
日本ルワンダ学生会議
第 10 回本会議 活動報告書

2013 年 12 月 18 日～2014 年 1 月 5 日

はじめに

この度は、私たち日本ルワンダ学生会議の活動報告書を手にとって下さり、誠にありがとうございます。本書は昨年 2013 年 12 月 18 日からの 19 日間、ルワンダ人学生 4 名と日本人学生が共に行った事業、「第 10 回本会議」の活動内容の詳細をまとめたものです。

本報告書第 1 章では、今回の事業で訪問した、横浜・鎌倉・福島における活動内容の詳細とその成果を、第 2 章の「学生会議」では、学生が興味を抱いたテーマを取り上げ行ったプレゼンテーションの内容や、そのプレゼンテーマに基づき設定されたディスカッションの中で得た学びを見ることができます。第 3 章では本事業に参加した団体メンバーの感想を掲載しております。また、随所に織り込まれているコラムでは、実際にルワンダ人学生と関わった日本人学生の目を通して見ることができるルワンダの姿を、表現豊かに紹介させて頂いております。

個人感想の中には、大学生活の中で継続的にルワンダと関わり、様々な思いを抱き活動してきたメンバーの思いや、将来に向けての決意がつつられております。なぜ日本の学生が遠いルワンダの国と交流を深めることに意義を感じて活動し、またそれを発信しようとしているのか。メンバーの想いをお伝えできれば幸いです。

アフリカ、ましてやルワンダは、いまだ多くの偏見に捕らわれ、ほとんどの日本人がその現状や多面性を知りません。本報告書が、本書を手にとって下さった皆様のルワンダに対する興味を増進し、新たな可能性を生み出すきっかけとなれば幸いです。日本ルワンダ学生会議は、今回の経験を糧に今後も「相互理解」という活動理念の下、ルワンダメンバーと共に日々精進していきます。私たちの今後の活動に、どうぞご期待ください。

最後となりましたが、私たちの活動の幹ともなる日本招致事業は、多くの方々のご協力とご支援なくては実現することができませんでした。日頃から私たちの活動を応援してくださっている皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございます。

どうぞ最後までお楽しみください。

2014 年 2 月

日本ルワンダ学生会議、一同

日本ルワンダ学生会議 第 10 回本会議活動報告書

目次

はじめに.....	3
-----------	---

序章

日本側代表挨拶.....	8
ルワンダ側代表挨拶.....	9
関係者挨拶.....	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	11
ルワンダ共和国基礎情報.....	14

第一章 第 10 回本会議 事業概要

第 10 回本会議 概要・活動日程.....	22
------------------------	----

第二章 日本招致活動報告

横浜企画

横浜企画事前学習.....	26
寿町企画.....	28
フェアコーヒー訪問.....	30
交流会@Fe.a.coffee.....	32

鎌倉企画

鎌倉企画事前学習.....	34
寺社見学.....	38

福島企画

福島企画事前学習.....	43
除染作業見学・意見交換会.....	45
富岡町視察.....	52
おだがいさまセンター企画.....	56
カンベンガ・マリールイズ氏講演会.....	58
福島企画リフレクション.....	62

第三章 学生会議活動報告

学生会議 概要・議題	66
Vision2020.....	67
茶道とその精神.....	69
障がい者の貧困.....	71
AGACIRO Development Fund.....	73
GIRINKA 政策.....	75
少子高齢化.....	78
ルワンダにおける医療制度の構造について.....	80

第四章 参加者感想

板谷美沙 日本大学経済学部 1年.....	84
岩垣梨花 早稲田大学人間科学部 2年.....	84
大山剛弘 早稲田大学創造理工学研究科 建設工学専攻修士 2年.....	86
片岡美月 早稲田大学文化構想学部 4年.....	90
小池志歩 群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部 3年.....	91
小坂弘奈 フェリス女学院大学国際交流学部 3年.....	92
品川正之介 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修 4年.....	93
島村志保子 日本大学法学部 2年.....	96
白川千尋 専修大学法学部 3年.....	98
谷川琴乃 早稲田大学政治経済学部 3年.....	101
藤本丈史 早稲田大学政治経済学部 4年.....	103
星野真希 学習院女子大学国際文化交流学部 3年.....	105
松本万里子 立命館大学経済学部 3年.....	107
丸茂思織 日本大学法学部 2年.....	108
宮本寛紀 横浜市立大学国際総合科学部 4年.....	110
安居綾香 同志社大学グローバル地域文化学部 1年.....	111
Alexis RWEMA ルワンダ国立大学農学部.....	113
Nadine KARINGANIRE ルワンダ国立大学社会学部.....	115
Theophile NAMAHUNGU ルワンダ国立大学薬学部.....	116
Rosette BAGWANEZA ルワンダ国立大学経済経営学部.....	117

付録

コラム

お前のカアチャン大人気！.....	11
ホームステイ 一島村家の年越し.....	19
ルワンダダンス.....	20
ルワンダ人学生、大海と出会う.....	40
鎌倉解散後のおはなし.....	41
教会にて.....	64
Theophile のこぶ.....	82
メディア掲載.....	119
後援・助成団体・ご協力頂いた方々.....	124
写真館.....	126
おわりに.....	128

序章

日本側代表挨拶.....	8
ルワンダ側代表挨拶.....	9
関係者挨拶.....	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	12
ルワンダ共和国基礎情報.....	16

日本側代表挨拶

日本ルワンダ学生会議代表で、第10回本会議の事業責任者を務めさせていただきました専修大学3年の白川千尋と申します。

2008年に第1回本会議が開催され、今回で10回目の本会議となりました。記念すべき第10回本会議が無事に終わりましたことを心から嬉しく思います。

本招致事業では、ルワンダ人と共に、東京・横浜・鎌倉・福島・の四都県を訪問しました。東京では、学生会議と呼ばれるディスカッションと団体理念である「相互理解」と今後の活動方針についてルワンダ人と話し合いました。横浜では、日本の「貧困問題」と「社会保障」をテーマに、日本の三大ドヤ街と呼ばれる寿町でのフィールドワークと、フェアトレードを通じた障害者の方の支援方法を学びました。鎌倉では、「日本の宗教」をテーマに鎌倉で寺社仏閣を見て回りました。そして福島では、「原発」をテーマに、除染作業見学、制限区域視察、仮設住宅における交流会、福島の復興と日本とルワンダをつなぐことをされているルワンダ人カンベンガ・マリールイズ氏による講演会を行いました。詳細につきましては、報告書に書かれておりますので、ぜひ、報告書をご覧ください。

今回の招致は、私が過去に経験してきました事業の中で、最も記憶に残るものとなりました。自分の主張を伝え続けることの重要性和、どうすればルワンダ人に理解してもらえるのかということを考え抜いた招致でした。「相互理解」はただ相手を理解するだけではありません。文化や言語の違いがあることと、そもそも相手と自分は違うということを前提に、相手を理解しようとする試みだと思っております。また、相手と分かり合うということは簡単なことではありません。相手と分かり合えないということも時には理解する必要があります。そのような「相互理解」が理念であるからこそ、目の前にいる“人間”と向き合い、互いを知り合うことを活動の基本とすることができるのです。

たかが学生、されど学生。学生ができることには限界がある一方、利益や売り上げを気にする必要がなく、また、特別な技術や知識が無くても、やりたいことができる学生だからこそできることがあります。今回の招致を通じて、ルワンダ人と日本人メンバーは「相互理解」が理念であることの自信と学生の「可能性」を感じる事ができたと思います。

最後になりましたが、第10回本会議は準備段階から招致事業が終わるまで、トラブルがなかったとは決して言えません。しかし、無事に事業を終わらせることができましたのは、周りの方々のご理解とご協力があったからです。この場をお借りして、心より感謝の意を表します。「相互理解」を理念に、今後よりいっそうの精進をしまいたしますので、日本ルワンダ学生会議の活動に目を向けていただき、ご指導いただければ幸いです。

日本ルワンダ学生会議日本側代表、第10回本会議事業責任者
白川千尋

ルワンダ側代表あいさつ

日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）ルワンダ代表より、本報告書を手にとってくださった皆様へ。JRYC のルワンダ側代表として、私は日本、ルワンダの人々に JRYC の活動に参加することを薦めたい。特に両国の若い人にてである。その主な目的は、将来のビジョンを作り、輝かしい未来を持つ次世代の若き人材を育成ことにある。その原理は、簡潔だがとても幅広い「相互理解」というものである。これは今日から、そして永遠に、ルワンダと日本両国の強固でフレンドリーな関係を生み出すであろう。したがって、是非我々の活動に参加し、明確にあなた方の思考を変えるために必要で重要な知識や経験を習得してほしい。

JRYC 全体で計画した活動に素晴らしいサポートをしてくれたことに日本人に対して本当に感謝している。この JRYC の活動は JRYC の活動に参加してくれたこと、活動に資金援助してくれたことを通してなされたことであり、そしてホームステイ等、両国メンバーの両親の助けがあってなされたことである。私はこれを続けていきたい。

日本ルワンダ学生会議ルワンダ側代表

Alexis RWEMA

関係者挨拶

JRYCの第10回会議は、日本に招聘した4名のルワンダ国立大学生と活動してきました。前回の岩手県に引き続き、今回は東日本大震災の被災地である福島も訪問しています。

2011年3月に東日本大震災が発生したのち、WAVOCでは海外プロジェクトを全面凍結して、WAVOC一丸で全プロジェクトが被災地支援に集中すべきだという議論がありました。日本が大変な時に、海外どころじゃないだろうという論調です。日本が不景気なのにODA（政府開発援助）の予算を減らせという思考とよく似ています。

そのような中、当時WAVOCの非常勤教員の私はただ一人、その会議場のその流れに全面的に反対しました。なぜならば、国土も小さく資源も乏しい日本は、世界の共感と支持がなければ国際社会で生き抜いていくことができません。そのような時こそ日本に「たこつぼ」にならず、海外プロジェクトをしっかりとつなげ、いま日本で何が起きているか、何が必要とされているかについて、長い間ボランティア活動を通じてつながっていた人たちに伝えていくことが必要だとうったえました。震災後、「絆」という言葉が流布しましたが、それは「被災地の人」と「被災地以外の人」の絆だけではなく、もっと広い概念でしょう。

多くのルワンダ人にとって日本は、科学技術と産業が発達した豊かな国というイメージです。しかしその科学技術の弊である原発は事故を起こし、放射能を飛散させていることはルワンダ人でもよく知っています。そして今回、若きルワンダ人たちは実際にその地に立ち、自分たちの目で見、人々の声を聞きました。JRYCは海外プロジェクトですが、今回の活動のように東北を世界とつなげ、東北の問題を世界から孤立させない取り組みともいえます。

ところで現在、日本社会は「ヘイト・スピーチ」にみられるような排外主義の蔓延が危惧されています。これが私にはジェノサイド前夜のルワンダの様子を想起させます。「私」と「あの人」、「日本」と「よその国」という見えないカベを乗り越えるために、「相互理解」はこれからますます重要になると思います。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員准教授
ボランティアコーディネーター
小峯茂嗣

コラム
お前のカアチャン大人気！

私が日本ルワンダ学生会議のメンバーになって早三年、ルワンダ人のホームステイを受け入れるのも今回で3回目となり、最初は初めての外国人を家に泊めるといふことで戸惑い気味だった私の家族ですが、もうすっかり慣れたようで、私「今日ルワンダ人来るからね」父「おう」という軽い反応。そして母はというと、もう何もアドバイスをしなくてもルワンダ人の好みの料理がわかるレベル。



過去のホームステイ受け入れを通して私が感じること…それは、なぜかうちの母がルワンダ人からモテる！ということ。私ではなく、母。なぜだ。過去にうちに泊めたルワンダメンバーは帰国後、必ず「お母さんは元気か、お母さんはどうしてる」と聞いてくる。昨年のルワンダ渡航の際には、ある女子から私ではなく母への手紙やプレゼントを渡されるほど。今回のホームステイ後にも、アレックスから「君のお母さんは最高だよ！僕が出会った日本人の中で一番素敵な人間だ！」と称賛されるので、母が毎回ルワンダ人に好かれる

理由を聞いてみると、彼女のホスピタリティ精神の高さ(料理・気配り・ちいさなお土産のプレゼント)、英語が話せなくてもなぜか心と心で会話できること、年齢を感じさせない可愛さ(笑)がルワンダ人のツボを押さえているらしい。なるほど……母のお・も・て・な・し精神には頭が上がりませんな。来年はどんなルワンダメンバーと出会えるか、今から楽しみである。
(小坂)



▲噂の母と(左)母からプレゼントされた箸を使って食事するルワンダメンバー(右)

日本ルワンダ学生会議 団体紹介

JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION

日本ルワンダ学生会議とは？

日本ルワンダ学生会議（Japan-Rwanda Youth Cooperation）は、「相互理解」を活動理念にルワンダの大学生と学術・文化交流を行う学生団体です。異なる背景をもつ彼らとどうやって顔の見える関係を築くのか。日本人同士で分かり合うことでさえ決して容易なことではありませんが、日々試行錯誤して活動しています。

主な活動内容

- | | |
|------------------|-------------|
| ・ルワンダへの渡航 | ・講演会の開催 |
| ・招致日本への | ・報告会の開催 |
| ・週1回の定例ミーティングの開催 | ・報告書の作成 |
| ・日本とルワンダに関する勉強会 | ・各種イベントへの参加 |

構成人数

日本側メンバー23名、ルワンダ側メンバー21名（2013年3月現在）

活動理念

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には、次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し

主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

団体理念の継承

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

略歴

2005年 10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が主催するスタディーツアーのかたちでルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年 9月	ルワンダにて第1回本会議を実施
2009年 3月	団体名を「ルワンダ・プロジェクト」から「日本ルワンダ学生会議」に改称
9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年 1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年 8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年 8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年 2月	ルワンダにて第9回本会議を開催
12月	日本にて第10回本会議を開催

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員教授の小峯茂嗣氏が設立した「ルワンダ・プロジェクト」が母体となり、2008年から学生が主体の運営を開始しました。以後、日本・ルワンダ間の学生交流を中心に精力的に活動しています。

平成 25 年度の活動実績

2013年 2月	ルワンダにて第9回本会議（渡航事業）を開催
3月	横浜商業高校にて出張授業を実施
4月	・「春のボランティアフェア」 プレゼンテーションコンテスト優勝 ・第9回本会議活動報告会実施（東京・神奈川県）
5月	・アフリカンフェスタへブース出展 ・第9回本会議活動報告会実施（京都）
6月	早稲田大学の国際開発援助論にて授業
8月	夏合宿実施
10月	グローバルフェスタに参加
12月	日本にて第10回本会議（招致事業）を実施
2014年 1月	（2013年12月18日～2014年1月5日）
2月	第10回本会議報告会実施予定

公認

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再建委員会（ARC） 小峯茂嗣
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

連絡先

メールアドレス：japan.rwanda@gmail.com

ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>



ルワンダ共和国情報

ABOUT RWANDA

ルワンダ共和国 基礎情報

ルワンダは東アフリカに位置し「千の丘の国」と呼ばれる、自然豊かな内陸国です。

- 首都：キガリ
- 人口：約 1000 万人
- 面積：63 万平方キロメートル
- 言語：キニアルワンダ語、英語、仏語
- 産業：コーヒー、紅茶など
- 宗教：キリスト教 他



略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961 年	王政に関する国民投票 (共和制樹立を承認) 議会在カイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター (ハビヤリマナ少将が大統領就任)
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生 (~1994 年 6 月)
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムング大統領、カガメ副大統領就任)
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任

2003年8月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003年9-10月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008年9月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2010年8月	カガメ大統領再選

政治体制

政体：共和制

元首：ポール・カガメ大統領

内政

1962年の独立以前より、フツ族（全人口の85%）とツチ族（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年6月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年9、10月の上院・下院議員選挙及び2008年9月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

経済

主要産業：コーヒー、茶など

GDP：56.3億ドル（2010年）

GNI：520ドル（2010年）

経済成長率：7.5%（2010年）

物価上昇率：2.1%（2010年）

総貿易額：輸出 193 百万ドル（2009年）、輸入 961 百万ドル（2009年）

主要貿易品目

輸出	コーヒー、茶、錫
輸入	資本財、半加工品、エネルギー財、消費財

主要貿易相手国

輸出	ケニア、コンゴ民主共和国、タイ、中国（2009年）
輸入	輸入 ケニア、ウガンダ、中国、アラブ首長国連邦

二国間関係

政治関係（極めて親日的）

- (1) 日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。
- (2) 1994 年 4～6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9～12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

経済関係（対日貿易）

(1) 貿易額

輸出	4,700 万円（2010年）
輸入	5.8 億点（2010年）

(2) 主要品目

輸出	コーヒー、バッグ類
輸入	自動車、二輪、機械

（上記内容は外務省ホームページより引用 2012年3月現在）

コラム

ホームステイ —島村家の年越し—

私の家はそもそも外国人のホームステイ受け入れたことがなかった。そこへ年末年始の3泊4日、ルワンダの女子大学生2名が滞在することとなった。両親と私の妹は口を揃えてルワンダンの面倒は、私に任せたと書いていたが、実際家に来てみると言葉は通じなくとも色々楽しめたようだった。



島村家にきたナディーンとロゼットには日本のお正月を楽しんでもらった。年越しそば、おせち、「行く年来る年」、書き初めなどなど。しかしその日本のお正月そっちのけで楽しんだことがある。100円ショップだ。

ルワンダンのお財布事情からすると、100均は家族や友人へのお土産を買う絶好の場所である。日本滞在中に何度か行ったようだが、問題は二人共「100均クオリティ」について島村家に来るまでは自覚していなかったということだ。私が連れて行った100均では一人20点以上買い占める驚異のお買い物を2時間も楽しんでいた。その買い物カゴの中には、イヤホンとボディークリームが入っていた。私はそのクオリティを危惧して忠告したが、テンションマッハの二人は聞き入れず購入。さて島村家でお試し…。“I hate you!!!”イヤホンに向かって何度も叫びながら笑うナディーン。ボディークリームの匂いをかいでなんか変な匂いが…としかめっ面をするロゼット。結果、私は二人から「真の100均を教えてくださいました人」というなんとも言えない名称を頂いたのだった。

島村家では他にも、衣装交換撮影大会（日本の浴衣をルワンダンが着て、ルワンダの伝統衣装を日本人が着る）をしたり、冷たい風が吹き荒れる中、千葉ポートに行って貝殻集めをしたりたくさん楽しい思い出ができた。私の家族も彼女たちとジグソーパズルをし



(島村)

たり、某テレビ局のルワンダを紹介した番組の録画を一緒に見たりと、以前よりもルワンダの学生を身近に感じられるようになったと言っていた。ただ余談なのだが、私の母はあまりの慣れない外国人に疲労を感じていたらしい。彼女たちのホームステイが終わった途端、母はひどく体調を崩し、しばらく寝込むこととなったのだった。

コラム

ルワンダダンス



福島県を訪れている時、企画でやったルワンダダンスがとても素敵だったので、同じ部屋の Nadine と Rosy に今日のダンスおごかった！よかったらあたしにも教えて！とはじめは軽いノリでルワンダのダンスを教えてくださいとおもっていました。ですが、実際に踊ってみると姿勢やポーズが難しいことこの上なく、腰の位置から腕の曲げ方など普段こんなつらい体勢取らない…みたいなポーズ

ングではじめは全くできませんでした。そして Rosy 先生も夢中になってきてスパイルタモード突入(^ u ^)もうほんとビシビシ指導うけました笑にこの絶妙な角度！できない！とにかく悪戦苦闘したし Rosy 先生にわらわれたりもしました。でも、最後は曲と合わせて踊れるようになり、すごく達成感がありました。ほかにルワンダの伝統的な衣装を着させてもらったりと気分はルワンダンでした。そして、当たり前なことだけど日本の盆踊りなどと全然違うことや、ルワンダの女性の美しさを歌った曲と踊りとだけあってすごくセクシーさもあって、普段は絶対できないことを体験しました。異文化に触れたり違いを楽しむことはやはりとても面白いなあ。と感じた一日でした。ただ次の日筋肉痛になりました。

(板谷)

第一章

第 10 回本会議 事業概要

第 10 回本会議 概要・活動日程	22
-------------------	----

第 10 回本会議 概要・活動日程

ABOUT 10th CONFERENCE

開催日時・場所

場所：東京都、神奈川（横浜市・鎌倉市）、福島県

日程：2013 年 12 月 18 日（水）～2014 年 1 月 5 日（日）

活動内容

4 名のルワンダ国立大学の学生を日本に招聘し、19 日間の事業を行う。歴史ある港町であり、日本の経済の中核を担う横浜においては、社会保障やソーシャルビジネスを題材とし、資本主義に伴う格差の現状や社会保障制度について、日本とルワンダの異なる視点から考える。福島県では、福島第一原子力発電所事故をテーマとし、同事故に対する理解を深め、今後日本ルワンダ学生会議が、どのように被災地に、また日本に貢献できるのか、またどのように日本とルワンダという国がよりよい関係を築いていけるかを考える。鎌倉では「日本の精神文化」について学び、相互理解の足がかりとする。また、ルワンダやその文化を日本の一般市民に広く紹介し、被災した方々の心の支えになることを目指し、福島県にて交流会を開催する。

事業目的

1. 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。またこれは同時に両国の学生が自国について再認識し、理解を深めることでもある。
2. 日本とルワンダの学生が共同生活をするることにより、友情を育み、信頼・協力関係を構築することによって、相互理解の第一歩とする。また、ルワンダと日本の二国間にとどまらず、その相互理解が国家間の協力関係や平和な世界を築くためにどのような役割を果たしうるかを学ぶ機会とすること。
3. お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
4. 当団体内部だけの交流だけでなく、ルワンダ人学生によるダンスコンサートなどを行うことにより、日本の幅広い層を対象とした文化交流を実現する。

5. 事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して、日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。また、ルワンダ側メンバーも事業活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

第10回本会議 全体スケジュール

2013年12月		
実施日	事業内容	実施地
18日(水)	ルワンダ側メンバー日本到着、開会式	成田空港
19日(木)	横浜企画事前学習	早稲田
20日(金)	寿町訪問	横浜市
21日(土)	Fe.a.coffee との合同企画	
22日(日)	鎌倉企画事前学習	
23日(月)	寺社見学	鎌倉市
24日(火)	福島企画事前学習、移動(神奈川県→福島県郡山市)	福島県郡山市
25日(水)	休息日	
26日(木)	川上好氏へのインタビュー、富岡町現地視察	福島県富岡町
27日(金)	除染作業見学・町役場の方と意見交換会	福島県須賀川市
28日(土)	富岡町仮設住宅にてイベント開催	福島県郡山市
29日(日)	カンベンガ・マリールイズ氏との合同企画 移動(福島県→東京)	福島県福島市
30日(月)	リフレクション兼ディスカッション	東京
31日(火)	休息日	東京・神奈川
2014年1月		
1日(水)	休息日	東京・神奈川
2日(木)	学生会議(2コマ)、当団体についての方針会議	東京
3日(金)	学生会議(5コマ)	
4日(土)	学生会議(5コマ)、閉会式	
5日(日)	ルワンダ側メンバー帰国	成田空港

第二章

日本招致活動報告

横浜企画

横浜企画事前学習.....	26
寿町企画.....	28
フェアコーヒー訪問.....	30
交流会@Fe.a.coffee.....	32

鎌倉企画

鎌倉企画事前学習.....	34
寺社見学.....	38

福島企画

福島企画事前学習.....	43
除染作業見学・意見交換会.....	45
富岡町視察.....	52
おだがいさまセンター企画.....	56
カンベンガ・マリールイズ氏講演会.....	58
福島企画リフレクション.....	62

横浜企画

【スケジュール】

実施日	活動	場所
12/19 (木)	事前学習	早稲田大学
	夜回り	寿町
12/20 (金)	炊き出し	寿町
12/21 (土)	フェアコーヒー 訪問 講演と交流会	東戸塚
12/22 (日)	リフレクション	東戸塚地区 センター



フェアコーヒー交流会にて

活動内容

横浜は歴史ある港町であり、日本の経済の中核を担う場所である。その横浜において、社会保障やソーシャルビジネスを題材とし、資本主義に伴う日本の格差の現状や社会保障制度について考察した。

横浜市で行う各企画のテーマについての事前学習、それに深く関与する団体・法人を訪問。以上を踏まえた上で、両国の将来性を探ることを一つの目的とし、ディスカッションを団体内で行った。またルワンダと日本の友好関係を広めるために、横浜市民の方を交えての交流会を開催した。

企画全体目的

1. ビジネス形態の具体例であるフェアトレードや、障害者雇用支援を取り上げることで、企業の社会的責任について、日本とルワンダ双方の視点から考えること。
2. ルワンダのように悲しい歴史を乗り越え、これからよりよい国を作っていくため、発展や開発に目を向けている国からは特に、「先進国」とひとくくりに見られがちな日本の社会の中に存在する、格差の広がりとその打開する取り組みを直接目にするすることで、一筋縄にはいかない貧困の解決について深い議論を交わし、両国の将来的な格差是正に寄与すること。

横浜企画事前学習

担当者：島村志保子
板谷美沙

企画概要

日時：2013年12月19日（木）
場所：早稲田大学
参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人3人、日本人10人）
内容：寿町、フェアトレードについての
プレゼンテーション

企画目的

■基本的知識を知ってもらうこと

目で見える事実の裏側でどのような歴史があるのか。それを知らずに現地訪問することは、逆に偏見や誤解を生む可能性もある。この事前学習では寿町の概要について、そしてフェアトレードについて根本的な知識を記憶にとどめてもらい、フィールドワークや実際の経営についてのお話を効く際
の理解の補助することを目的とする。

プレゼンテーション詳細

■寿町

日本三大日雇い労働者のまち、横浜市寿町の人口構成などの基本情報、歴史的背景、現在の状況、現状打開への取り組みについて説明した。

■フェアトレード

フェアトレードとは何か、なぜ必要なのか、フェアトレードがもたらす利益や利点、また現在抱える問題点などを提示した。

担当者感想

■寿町

私は授業の関係でルワンダ人と共に寿町を訪問することができなかったのですが、ここで寿企画への感想を述べさせてもらおう。当団体メンバーの一人が長期的に寿町に関わりがあって、この寿町企画の実現に至ったのだが、私自身ももっと寿町について知ってからルワンダ人に説明したいと考え、昨年の夏に初めて寿町を訪問し合宿や炊き出しに参加したりして、寿町の空気に触れた。私がかつとも衝撃を受けたのは、夜回りに参加したときに出会った女性の方の目である。私たちが話しかけても、下を向いたままかすかに頷くだけだった年配の女性の方だったのだが、食事と飲み物を渡して「おやすみなさい」と声をかけ立ち去ろうとした時に彼女が顔を上げた。その目にまっすぐ見られたときに、何かを感じるわけでもなく、ただただショックを感じた。またその光景に反して、寿町訪問の中で私にとって意外な事実だったのは、寿町で生活する人たちは明るい人たちが多く、ボランティアの方とすれ違う時にも必ず挨拶は欠かさないし、町の中で本当にいい人間関係が築かれているということだった。

日常の中では「生活保護」⇒「不正受給」という社会問題だけがお茶の間を賑わわせ、生活保護が受給者の将来的な自立を補助するための大事な役割も担う、ということが忘れられがちだ。社会の問題、特に格差問題は資本主義とも密接に関わり複雑である。一筋縄に解決しないからこそ問題なのであるが、その問題をルワンダ人に伝えるときに自分がどうこの事前学習で、ルワンダ人に何を根底知識として伝えていくのかに迷

ってしまい、最終的なプレゼンが情報不足になってしまったのが心残りだ。

寿町訪問から戻ったルワンダ人からは「日本にもこんな事実があるだなんて知らなかった。(寿町に) 行ってよかった」というコメントももらった。その一方で日本人の目からすると、まだまだ日本の格差問題の深刻さやそこで生活する人たちの気持ちが伝わっていないのがわかるような言動も彼らには見受けられたようだ。日本の文化を肌で感じたり、日本史を専攻しているわけでもない、まだ若い学生に一回の事前学習、現地視察で何が伝えられるのかという意見もあるかと思う。しかし、これがルワンダの学生にとって先進国の捉え方を見直すきっかけとなっただろうし、また私自身の「相手に日本を伝える」貴重な経験になったと思う。ここでの反省を忘れずに次の招致にしっかりと活かしていくことで更なる日本とルワンダの相互理解を促進していきたいと思った。(島村)

■フェアトレード

私自身フェアトレードについては名前しか知らなかったのですが、事前学習のためにいろいろ調べている間に私たちの身の回りにあるもので安く買えるチョコレートやバナナなど多くの品々が発展途上国の貧しい農家の人々に支えられていることを知りました。不当な取引によって多くの人々が苦しめられているというこの現状を打開するためにも公正な値段での取引、大企業、先進国などの圧力などからかいほうしてあげてひとりでも多くの人がしかるべき生活を送れるようにならなければならないということ強く感じました。また私たちがこ

のことを少しでも理解し、フェアトレード商品を選択するというのも大きな協力になると思いました。しかし、もちろん品質がよくないと消費者は買ってはくれません。なので、農業従事者の方々もより良い商品を作り上げていくという互が幸せになれる構造を作り上げることが双方の発展につながると言えると思います。ルワンダでは農業従事者が80%なので大きな興味を示してくれました。フェアトレードは日本では認知他の先進国と比べてまだまだ低くこれからのフェアトレードビジネスはまだまだこれから可能性を持っていると思います。今回企画でお邪魔させていただいた珈琲店のようなお店がこれからどんどん増えていけばなあと思いました。そのためにもこのことを多くの人に伝えていければなあ、と感じました。(板谷)

寿町企画

担当者：小坂弘奈

【スケジュール】

19日	
20:00~21:30	寿町集合、夜回り
20日	
8:00~9:30	炊き出し
9:40~12:00	渡辺英俊氏「寿町とは？」
12:30~15:00	炊き出しお手伝い、昼食 (雑炊)
(13:45~14:25)	近藤昇氏「炊き出しとは？」
15:30~16:30	リフレクション
17:30	終了

企画概要

日時：2013年12月19日(木)、20日(金)

場所：寿町

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

企画目的

ルワンダのように悲しい歴史を乗り越え、これからよりよい国を作って行くため、発展や開発に目を向けている国からは特に、「先進国」とひとくくりに見られがちな日本の社会の中に存在する、格差の広がりとそれを打開する取り組みを直接目にする事で、一筋縄にはいかない貧困の解決について深い議論を交わし、両国の将来的な格差是正に寄与すること。

活動報告

■夜回り

寿地区センターの三森妃佐子氏の協力の

もと、19日は夜回りを経験した。寿町を出発し、JR 関内方面へ歩いていき、駅周辺の建物の下や地下鉄へ続く地下道などを歩くと、多くの路上生活者が就寝の準備をしていた。通常の夜回りでは、毛布やせっけんなどの日用品、食べ物を配るのだが、今回は夜回り開催日ではなかったため野宿者には声をかけずに近くを歩くだけという条件付きの参加であった。段ボールで周りを囲んでいる人や、毛布と新聞紙のみで眠る人など、暖の取り方は人それぞれだが、話によると段ボールで屋根を作り、新聞紙・毛布すべてを兼ね備えたスタイルのことを「5つ星」と捻くることがあるらしい。ほんの30分外を歩いただけだったが、我々の手足はだいぶ冷たくなっていた。これほど寒いことから、真冬の日本の夜空の下で野宿することがどれほど過酷かということがルワンダメンバーにも伝わっただろう。

■炊き出し

寿町では毎週金曜日にボランティアの方々による炊き出しが行われている。メニューは決まって雑炊で、味は味噌、醤油、カレーなど様々。今回私たちはこの炊き出しに参加させていただき、野菜の切り込みや皿洗い、配食を手伝った。作業はすべて分担され同時進行で手際よく行われる。私たちはまずジャガイモの皮むきと野菜洗いに分かれ、ボランティアの方の指示に従った。野菜は3つの大きなたらいで順番に痛みがないか念入りに確認しながら洗っていく。準備がひと段落すると休憩し、13時からの配食はラジオ体操とズンドコ節ダンスからはじまる。ルワンダメンバーも初めてのラジオ体操は難しそうだったが楽しんで

いた。その後、公園の周りにずらりと並んだ町の人ひとりひとり声をかけながら雑炊を配っていく。ルワンダメンバーからは日本にこのような場所があるとは信じられないという予想通りの感想をもらい、炊き出しの手伝いを終えた。

■町について

渡辺英俊氏のお話

寿町のある教会の牧師である渡辺英俊氏から、寿町についてのお話を伺った。渡辺氏は私たちのために英語で資料を作ってください、流ちょうな英語でお話してください。高度経済成長期で大量の人手が必要となり全国から集まった日雇い労働者の今の姿が、寿町や路上にあるというお話は、町写真やグラフを見ながら聞くとより現実味を帯びた。彼のお話の中で、私たちは町の成り立ちや、支援団体について知った。

近藤昇氏のお話

近藤昇氏は、寿労働組合として長年日雇い労働者の人権を守る活動をしている。私たちは炊き出しの合間に彼から炊き出しについて聞かせていただいた。多くのボランティアの方々に支えられ20年近く続けられている炊き出しや、行政の窓口が占められる年末年始の期間には炊き出しや健康相談などを毎日行う越冬闘争が2013年で40回目を迎えることなどを知った。

感想

担当者

私は高校生の頃のフィールドワークがきっかけでこの町のことを知り、以来炊き出しや夜回り、イベント企画の手伝いに

微力ながら参加させていただいてきた。私は横浜出身であるが、寿町はきっかけがなければ知ることがなかつたろう。しかし知れば知るほど路上生活者や生活保護を受け貧しく暮らす元日雇い労働者たちの現状、日本社会のありかたや開発至上主義に疑問を感じるようになった。しかし、疑問を感じつつも寿町の独特な雰囲気は私にとって魅力でもあり、町のオッチャンには人間臭さを感じる。そんな寿町が私は好きなのだ。ルワンダメンバーの多くが抱く日本に対しての「発展」した美しくお金持ちの国、というイメージは間違っていないかもしれないが、そうではない面も知ってほしいということ以前から望んでいたため、今回自分が日ごろ関わっている寿町を、ルワンダメンバーに知ってもらえたことは私の目標達成でもあった。

企画を終え、その日は私の実家にホームステイし、母の手料理を食べたのだが、メンバーのひとりが苦手なものが入っていたらしく残すように言うと、「寿町で食べた雑炊よりはおいしい」と言われたのが忘れられない。たしかに、ルワンダメンバーの言うとおりの具も米も少なく味の薄い雑炊はごちそうではないが、朝早くから冷たい水に手をさらして作り、オッチャンたちと一緒に食べる雑炊を、不思議と美味しいと感じていた私であった。



参加者

まずはじめに、私たちに寿町を訪れるチャンスを与えて、たくさんの経験をさせてくださった方々全員に感謝します。私が見た KOTOBUKI は、日本の貧困層の方々が暮らしていました。彼らは仕事も、十分な設備の整った家も持っていません。インターネットなどを通して得る知識よりも、実際にこの町に来れば、日本の本当の姿を知ることができます。多くの人は日本を楽園のような国だと想像しますが、この町を見れば、日本は楽園ばかりではないということがわかるでしょう。自分でも理由はよくわかりませんが、この町に暮らす人々は、他の日本のどこかで見た人びとよりも、他人に敬意を持って暮らしているように見えました。彼らと、彼らを支援する人びとは、人間を身なりや暮らしぶりで判断しません。

寿町は、日本の歴史において重要な町だと感じます。かつては日本の基盤を築いた日雇い労働者の町として栄えていましたが、今では町を知る人も少なくなっているようです。そんな寿町は時代に取り残されているように、また一方で他の地域とは違う独立を果たしているようにも見えました。

私はこの町を知ることで、発展した楽園のような国、日本にも、貧しく暮らす人びとが存在するということを知りました。そして私は KOTOBUKI は、人と人の関係性や人間の価値を改めて見直すことのきっかけをくれる町だと思います。最後になりましたが、今回私たちを協力して下さった方々、町で出会った方々に改めて感謝申し上げます。

(Theophile)

フェアコーヒー 訪問

担当者：宮本寛紀

企画概要

日時：2013年12月21日（土）

場所：fe.a coffee（フェアコーヒー）

住所：〒240-0026 神奈川県横浜市保土ヶ谷区権太坂1-53

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

（ルワンダ人4人、日本人8人）

協力者：関辰規さん

（フェアコーヒー経営者）

企画目的

fe.a coffee（フェアコーヒー）は、途上国の生産者からフェアトレードで仕入れたコーヒー豆を、福祉作業所で働く障害者の方々と共に焙煎し、美味しいコーヒーを提供する「関わる全ての人々がフェアでハッピーになれる」といったコンセプトで営業しているカフェ。

近年、経済的な利益だけでなく、社会の諸問題を解決するといった社会的利益も同時に実現するような事業を推進している企業が増えてきている。これは「ソーシャルビジネス」とも呼ばれ、様々な地域や分野に渡り広がりをみせている。

ルワンダでも、「INZOZI NZIZA」（インゾージ・ンジーザ＝ルワンダ語で「甘い夢」）というアイスクリーム屋さんがアメリカの Blue Marble Ice Cream 社の協力で開業し、現地の女性に対する雇用機会や社会進出を支援している。経済成長の著しいルワンダ

においても、企業は利益のみを追求するのではなく、社会にいかに関与していくかがこれから期待されている。

本企画では、日本における「ソーシャルビジネス」の現状や課題について学び、一つの事例として「フェアコーヒー」を訪問し、お話を伺うことで、「ソーシャルビジネス」の在り方や必要性について考えるきっかけとする。

活動報告

まず、訪問日とは別日程で事前学習として日本人メンバーの板谷によるフェアトレードに関するプレゼンテーションとディスカッションを行った。

訪問日当日は、関さんがルワンダから仕入れたコーヒー豆を焙煎し振る舞ってくださり、そのコーヒーを飲みながらお話を伺うという談話形式となった。

関さんがなぜこの事業に取り組むことになったか、どのような仕組みで事業を行っているか、これからどのように発展させていきたいか、など約3時間に渡り、適宜質問にも答えていただきながら進めた。

実際に、コーヒー豆を焙煎する機械を見せていただき、障害者の方々の作業の様子が分かる写真もを見せていただいた。

障害者の雇用問題が日本社会における「問題」である以上、その分野で事業を行うことの厳しさ・難しさなどについて、NPOの設立による二本柱で事業を進めることが当面の目標であること、今は横浜を拠点としているが、これからは全国的に広げていけたらいいという希望についても語っていただいた。

また、「フェアトレード」や「障害者雇用」

という以前に『このコーヒーは美味しい。また飲みたい。』と思ってもらえるような品質の維持・向上にも努めていると仰っていた。効率さや便利さを求めるが故に、その背景にある様々な弊害や問題の存在を忘れがちであるが、今回の訪問で改めて気付かされる有意義な談話であった。

感想

担当者

企業が利益を追求することは当たり前で、それを批判するつもりはないが、より持続可能で、社会で生き残っていくためには、社会的な利益も重視しなければならないと私は思う。ルワンダ含め、発展途上の国々では多くの産業が生まれ、様々なビジネスが始まる。その際に、この「ソーシャルビジネス」という考え方が少しでも周知されていけばより良いビジネスが世界中で広まるのではないだろうか。また、それは発展途上国だけでなく、日本含め先進諸国においても必要性があると思う。

参加者

とても印象的なお話だった。かかわる全ての人々がハッピーになれるビジネスというのはとても良いことだと思う。

日本社会の根本を変えなければならないとも思い起こされた。 (谷川)

僕たちの活動（日本ルワンダ学生会議）の視点からも「ビジネス」について考えることは重要だと思う。日本とルワンダの関係構築にも「ビジネス」という側面は欠かせてはならないものだ。日本でも、大学を卒業したとしても正社員として職に就くこ

とが難しいことを知って驚いた。(Alex)

フェアコーヒーのフェアが、フェアトレードの”fair”と wel”fare” (福祉) の2つの意味があることが印象的だった。私自身、「ビジネス」に余り興味がなかったが、社会に良いインパクトを与えられるようなビジネスもあることを知って興味が湧いてきた。とても良いお話を聞けたと思う。

(Nadine)

交流会

@ Fe.a.coffee

担当者：島村志保子

企画概要

日程：2013年12月21日(土)

場所：コーヒー豆販売店

「フェアコーヒー」(境木商店街)

内容：ルワンダクイズやクリスマスカードづくり、ポラロイドでの写真撮影を通じて日本人とルワンダの学生が交流を行う。



企画目的

「ルワンダ」と聞いたとき、ジェノサイドを知っているか、または名前は知っているがよくは知らないというのが日本の現状である。今回のイベントでは子どもたちをメインターゲットとし、ルワンダの大学生と共に楽しい時間を過ごす中で、クイズや何気ない会話を通して、ルワンダの国旗や言葉を知ってもらい、ルワンダについて興味関心をもつきっかけを作ることを目的とする。

活動詳細

当日にアンケート等を取らなかったため、参加された一般の方々の人数が把握できなかったのだが、20人以上の方が集まってくれたかと思う。小学生の親御さん含めたくさんの大人の方々も参加して下さった。

ルワンダクイズではルワンダの場所や国旗、大統領、挨拶の言葉を当てるゲームを行った。

クリスマスカード作りでは小学生からルワンダ人に折り紙の折り方を教えてあげている光景や、出来たカードをルワンダの学生にプレゼントしている微笑ましい光景が見られた。

大人の方々もルワンダの学生に質問をたくさんして下さり、ルワンダ人の歌や踊りも楽しんでもらったようであった。また一旦自宅に戻り、日本の糸を使ったおもちゃ作りをルワンダの学生に教えてくださる方やもいて、ルワンダ人にとっても日本について知れる良い機会となったのではないだろうか。

感想

参加者

非常にいい交流会だったと思う。子どもたちは楽しそうにルワンダ人とサッカーしたり絵を書いたりしていたし、ルワンダ人も日本における交流会の重要性についても理解してくれた。(実際最初はなんで自分たちが日本の子どもたちと遊ぶのか疑問ではあったらしいが、日本のルワンダへの認知度の低さなどの現状を、後のプレゼンで理解したそうだ。) 楽しい思い出と共に今回の交流が将来に繋がるものとなれば嬉しく思う。

営業日にも関わらずお店を会場として提供してくださり、広報もしてくださった、関さんには感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。(島村)

ルワンダ人と交流会 in fe.a coffee

日時	内容	参加費
12月21日(土) 14:00~17:00	1. 「ルワンダ」クイズ 2. 「クリスマスカード」作り 3. 「記念写真」撮影	小学生未満・・・無料 小・中学生・・・¥300 高校生以上・・・¥500

場所
フェアコーヒー
(場木商店街)

ルワンダからやってきた学生たちと一緒に遊ぼう！
遠いアフリカの国、ルワンダから3人の学生が日本に来ます。彼らは何語を話すの？どんなことを勉強しているの？たくさん質問してみよう、一緒にクリスマスカードを作ったり、写真を撮ったりしましょう。
お問い合わせ：日本ルワンダ学生会 担当番（島本）
hiroki.030305@nrii.com 080-3258-6780

↑交流会の広報用のちらし

これは当団体メンバーの一人がデザインしたものです。こういう時に人材の層の厚さを実感します。

(注) 当日は参加費を徴収しませんでした

鎌倉企画

【スケジュール】

実施日	活動	場所
12/22 (日)	事前学習	東戸塚地区センター
12/23 (月)	寺社見学	鎌倉市内

活動内容

「鎌倉」や「日本人の宗教観」についてのプレゼンテーション・ディスカッションを行い、お互いの宗教に関する知識や考えを共有したうえで鎌倉の寺社見学をし、日本古来の文化に実際に触れる。

企画全体目的

1. 学生会議や鎌倉におけるフィールドワークを通して、日本人学生とルワンダ人学生の双方が互いの宗教観の違いを理解していくこと。
2. 宗教観の違いを理解することで、互いの価値観の背景を知り、今後の両者の関係性をより強固な土台のもとで考えていくこと。



鎌倉企画事前学習

担当：丸茂思織

企画概要

日時：2013年12月22日(日)

場所：東戸塚地区センター

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
(ルワンダ人3人、日本人6人)

プレゼン目的

1. 現代日本人の宗教観のバックグラウンドとなった神道や仏教について知ることで、互いのさらなる理解につながり、相互理解への足がかりにする。
2. 次の日に行う寺社見学をより有意義なものにする。

次の日に鎌倉にて行う寺社見学をより充実したものにするために、「鎌倉」や「日本人の宗教観」についてプレゼンテーションを行う。また上記したテーマに関して、意見交換やディスカッションを行い、宗教に対するお互いの考え、またその違いを共有することでお互いの理解を深める。

活動報告

鎌倉プレゼン

■プレゼンター

星野真希

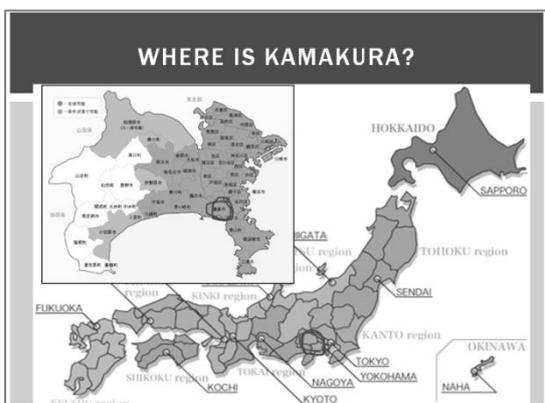
■プレゼン内容

鎌倉とは？

次の日に寺社見学で訪れる鎌倉とはどんな場所であるのか。図を多用してルワンダメンバーに説明した。鎌倉は日本古来の文化が色濃く残る場所で、数多くある寺や神社を見ることで、現在でも当時の雰囲気を感じ取ることができる。



また本プレゼンでは、企画の充実を図るために、あらかじめ鎌倉企画の目的や趣旨、スケジュールをルワンダメンバーに伝えた。(企画目的・趣旨は前ページを参照)



日本人の宗教観プレゼン

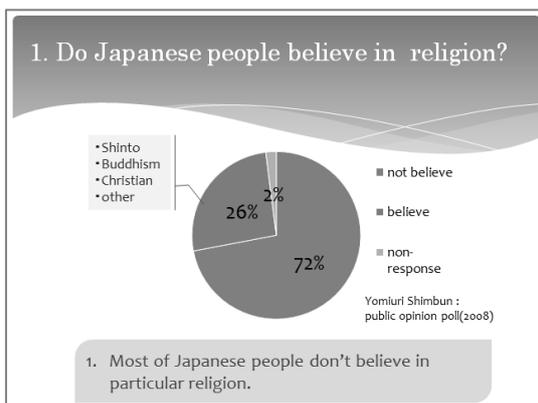
■プレゼンター

谷川琴乃、丸茂思織

■プレゼン内容

1. 日本人と宗教の関わり方

まず、特定の宗教を信仰している日本人はどれくらいいるのだろうか。2008年の読売新聞世論調査によると、仏教や神道、キリスト教などの特定の宗教を信仰していると回答した人はわずか26%であり、無宗教と回答した人の割合が72%を占めている。



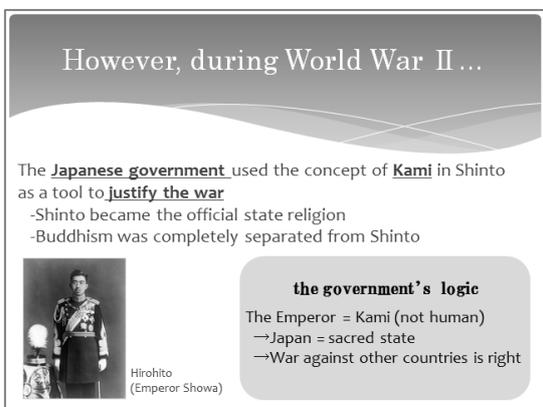
しかし、特定の宗教を信仰している日本人が少ないからといって日本人の生活が宗教と無関係であるわけではない。キリスト教の祭事であるクリスマスや、神道の行事である初詣・七五三は、「宗教行事」といった日本人にとって特殊なものではなく、今や「習慣」として日本人の生活に密着したものとなっている。

以上の資料から、日本人と宗教の関わり方の現状として「日本人は特定の宗教を信仰することから遠ざかっている」、「日本でさまざまな宗教行事が習慣化している」という2点を挙げる事ができる。以下からは、上記した2点の現状に対する理由を、

日本における「仏教」「神道」「キリスト教」のそれぞれ歴史から紐解く。

【①神道】

神道は自然崇拜と神人・先祖崇拜に基づいた日本古来の宗教の宗教であるが、開祖も経典も教義をも持たない。神道は多神教で、この世の森羅万象に神が宿るとしており、森や川、山等、日本の先人たちは様々なものを神として祀っていた。また仏を信仰することが日本の神々を否定することにつながらないという考えからも分かるように、神道は外来宗教に対し非常に寛容であったと言われている。以上から、神道が一神教を持たず、また外来宗教に寛容であったことが、のちに伝来する仏教やキリスト教と共存の道をたどることになった理由の1つであると考えられている。



また神道は第2次世界大戦時に、戦争を正当化するための道具として利用された過去がある。当時神道は「国教」とされ、「神仏習合」されていた仏教とは完全に切り離された。神道が神人崇拜であることを逆手にとり、天皇を「人間」ではなく「神」とすることで、日本を穢してはならない「神聖な国」とした。「神聖な国」であるから、他の国に逆らい対立することができる、

日本政府は「神道」を都合よく利用することで戦争を正当化したのである。その後第2次世界大戦が終了するのと同時に、日本では信教の自由が認められ、かつて「神」とされていた天皇もここでようやく「人間」として認められることになった。以上の理由から、「神道など、宗教に関する話をする事は良いことではない」とされている時代もあった。

【②仏教】

仏教はインドで生まれ、6世紀に韓国より日本に伝播したと言われている。仏教が日本人に受け入れられた理由は以下の3つであると言われる。

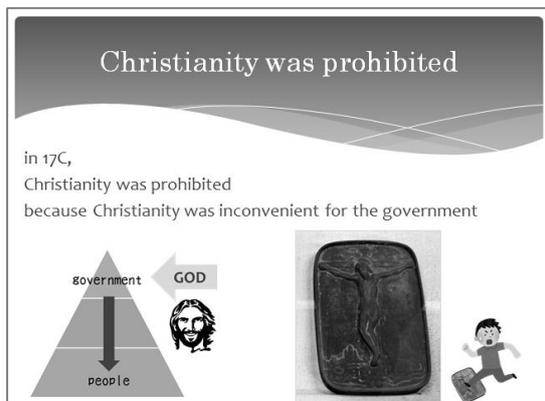
- (1)神道・仏教が共に一神教でなく、寛容であったから。
- (2)神道を排斥するのではなく、神道に寄り添った方が、仏教を広めることができると僧侶が考えたから。
- (3)僧侶たちが薬学や建築といった分野において高い技術や知識を有していたため、上級階級の人々がそれらに興味をもったから。(五重塔や炭、紙を作る技術は韓国・中国からやってきて僧侶によって伝えられた)

またのちに仏教と神道は「神仏習合」というかたちで統合されることになるが、神道が国教とされるにあたり、その後再び分裂した。

【③キリスト教】

1549年にフランシスコ・ザビエルによって、キリスト教は日本へ伝来した。しかし17世紀になると、政府は「踏み絵」等の実施によりキリスト教の信仰を禁止する。キ

リストという神の存在が日本政府にとって非常に都合の悪いものであったためである。



第二次世界大戦後、キリスト教にもやっ
と信教の自由が認められ、以後日本各地の
教会が作られた。

【④その他・新興宗教】

また 1995 年、日本の新興宗教であるオウ
ム真理教によって「地下鉄サリン事件」が
引き起こされ、13 人ものが命を落とした。
本事件により、宗教に対して悪い印象を抱
く人が増えたと考えられている。

2. まとめ

日本人が特定の宗教を信仰することから遠
ざかっている理由

- ・神道が戦争を正当化する道具として利用
された過去があるから
- ・オウム真理教の地下鉄サリン事件等から、
信仰宗教に対して悪い印象を抱いている
日本人が多いから

日本でさまざまな宗教行事が習慣化してい
る理由

- ・日本古来の宗教である神道が外来宗教に
対して寛容であるという特徴を持ってい
たから

感想

発表者

プレゼン内容については、個人的に満足
できていない部分もあるが、ルワンダメン
バーが日本の宗教に興味をもち、またその
現状（日本人が特定の宗教を信仰していな
いながら、様々な宗教関連のイベントを楽
しんでいること等）を理解してくれたこと
が、今回の何よりの収穫だと感じている。

また今回、日本人の宗教観についての
プレゼンをするにあたって、日本人であるに
も関わらず、宗教について知らないことが
多くあることに気付かされた。日本独自の
価値観や文化を改めて見つめなおす良いき
っかけになったと思う。最近ホットな社
会問題等が企画のメインピックに取り上
げられることが多いが、宗教観や文化は
我々の考え方の背景になっている重要な
ものである。今後もそれを相手に伝え、
同様に相手を受け入れる努力を続けてい
きたいと思う。（丸茂）

参加者

だれもが森羅万象を崇拝する権利をもつ
神道は、素晴らしいものであると私は思っ
た。日本人が宗教に関連する様々なイベ
ントを行っていながら、特定の宗教を信仰
していない人がほとんどであることを知っ
て、非常に驚いた。特定の宗教を信仰し
ない日本人と一神教であるルワンダ人の
宗教観はとて違うと感じた。（Nadine）

鎌倉寺社見学

担当者：小池志歩

【スケジュール】

11:00~13:00	鶴岡八幡宮
14:00~15:00	長谷寺
15:00~16:00	高德院大仏
16:00	解散

企画概要

日時:2013年12月23日(月)

場所:神奈川県鎌倉市

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人3人 日本人10人)

企画目的

鎌倉は「武家の古都」と呼ばれており現在の日本文化形成において、大きな影響を及ぼした場所である。鎌倉寺社見学を通して、仏教や日本文化に対する理解を深めることを目的とする。

活動報告

23日に行われた鎌倉寺社見学では、鶴岡八幡宮、長谷寺、高德院大仏の3か所を訪問した。以下活動報告である。

■鶴岡八幡宮

鶴岡八幡宮は鎌倉武士の守護神、また源頼朝ゆかりの神社として全国でも知名度が高い場所である。鶴岡八幡宮では、地図案内を利用し、鎌倉の地形について学んだ。山が多く複雑に入り組んだ地形と南に広がる海は、敵の侵入を防ぎやすく、海上交通にも便利でかつ、温暖な気候を合わせもつ

といったことから、国を統括して政治を執り行うには優れた場所であったと言われている。また境内では、鳥居や手水の意味や拝礼作法などを学び、ルワンダ人学生だけでなく日本人学生も興味深い様子であった。鶴岡八幡宮は源頼朝が鎌倉の街づくり拠点とした地である。そしてそれは今日まで引き継がれ、毎年多くの祭事が行われるなど、鶴岡八幡宮を中心に活気溢れる町が形成されている。鶴岡八幡宮では、穏やかな山並みに囲まれた美しい自然の中で、古き良き歴史の深さだけではなく、人々の活気も感じ取ることができた充実した時間であったのではないかと。



メンバーの話を熱心に聞くルワンダメンバー

■長谷寺

長谷寺では、阿弥陀堂、観音堂、弁天堂をそれぞれ見学した。中でも観音堂にある長谷観音は高さ9.18メートル、楠でできており木造では日本最大級である。観音様は、みんなの思いや、願いの声、つまり音を自在に聞くことのできる仏である。長谷観音は頭の上に11の顔があるが、それは人々の思いや願いごとにたくさんの種類があるので、それぞれの人の思いにあった表情をするためであるといわれている。それから長谷寺においては仏像だけでなく庭園

もたいへん魅力的であった。境内は2つの池の周囲を散策できる回遊式庭園として整備されており、木々の美しさや、自然とともにある日本人の心を感じることができたのではないだろうか。

■高徳院大仏

高徳院大仏は有名な鎌倉名所の一つである。それゆえ大仏は鎌倉の仏像で唯一国宝に指定されている。大仏は台座を含めると総高は約18メートルあり、また総量は約121トンと、日本人・ルワンダ人学生それぞれその大きさに大変圧倒されていた。大仏は常人とは異なる32の身体的特徴があるとされており、当日はそのいくつかを説明した。また大仏の胎内の中にも入り、大仏像が大変高度な技術を駆使して製造されていることも学んだ。高徳院では簡単にはあるが、仏教の開祖であるブッダについて、また悟りを開くというのはどういうことか理解を深めることができたと考える。



大仏の説明をするメンバー

感想

担当者

まず鎌倉企画に参加できたことをたいへんうれしく思う。なぜなら鎌倉へは、恥ずかしながら一度も言ったことがなく、鎌倉については何も知識がない状態であったし、また私たちの生活と宗教について考えたことなど皆無であったからだ。鎌倉企画に参加したことによって、鎌倉の町や寺社について理解を深めるだけでなく、仏教や日本文化について知るきっかけになったと。それぞれ寺社見学では、歴史や由緒など事前学習をすることで、当日また新たな発見を得、感動を手にすることができた。そして知識だけでなく、私が受けた感銘をルワンダ人学生に伝えるのは難しいことであったが、わずかながらも、ともに共有できたことをたいへんうれしく思う。

(小池志歩)

コラム「ルワンダ人学生、大海と出会う」

鎌倉滞在中、メンバー3人が久保宅にホームステイ。企画の合間をぬって地元を案内した。七里ヶ浜から江の島へぬけ、水族館に入る。ルワンダ人学生は初めて見る海、富士山、イルカやペンギン、モノレールに大興奮。定番コースであったが、これほど大きいリアクションをもらったのは初めてだった。ルワンダで初めて胴体ほどの大きさの角を持つ牛（おそらく水牛）を見た自分の反応はこんなものだったのだろうと思う。 (久保)



家族連れやカップルでにぎわうフォトスポット
だって、そんなの関係ない！構わずちゃっかり
抑えます。

「メリークリスマス！」

鎌倉散策後のおはなし

ルワンダ人の移動は必ず日本人が付き添う。この日もそうだった。12月28日天皇誕生日の日、私たちは鎌倉訪問を終えて本日の宿泊場所の東京に行く予定になっていた。さて東京に戻るぞ！といったとき、ルワンダン3人と私の間に衝撃が走った。「ルワンダンと付き添える日本人＝私だけ」だったのだ。別に鎌倉から池袋くらいの移動なんて大したことはないはずなのだが、この日のルワンダンの荷物は日本に来た時に持ってきたものすべて。かなり重い荷物との旅が予想された。アレックス「え、シダックスだけ??(・・;)」。テオ「haha。小さすぎるよ(笑)」この時はかりはルワ男をパンチしようかと思った。さらに悪いことに、池袋に着いてから、ルワ男の宿泊場所提供の日本人メンバーが迎えに来るまでの1時間、電気屋で買い物をしたいとの要望がナディーンから寄せられた。筋力も英語力も足りない私が今から東京に戻り電気屋で買い物なんて…。日本に来て6日目の疲労が蓄積されたルワンダ人、そして期末テストの疲労が溜まった日本人。両国民に不安が漂うなか、鎌倉→池袋の旅が始まった。

ちょうど座席を得ることができ、ルワンダンを立ちっぱなしの状況に追い込むことは避けられたのだが、どうもルワンダ人の顔色がよくない。彼らにすると慣れない電車はやはり疲れるとのことであった。彼らを励ましている一方で、私はスマホで必死にリサーチをしていた。電気屋はどこか。外貨両替できるのはどこか。それより池袋って何があるんだと。

しかしこの座っているだけの移動は何とでもなかった。池袋に着いて某電気屋さんに入ってからが私の本番だった。まずナディーンが欲しかったのは一番安いデジカメ。私はルワンダンと店員さんの通訳・交渉をすることになった。しかも祝日である今日は外貨両替できる場所が周辺になかったため、最終的に私がその日のレートでナディーンのもつドルと日本円を交換し、支払いを行った。人生の中で一度も持ったことのないドル札を私はお財布に大事にしまい、喜ぶナディーンの顔を見ながら、妙な達成感を得たところで、私の大仕事は終了した。この日は電気屋での買い物のあとも、ロゼットというルワ女との1年ぶりの再会や彼女たちとの宿泊などがあったのだが、その自分にとって濃い一日が終わろうとしているとき、力不足のなか一人で精一杯、外交をした自分を密かに褒めながら、また翌日に控える期末テストの結末を心配しつつ、ルワンダンの眠る姿を横目にぐっすり寝た。(島村)



翌日の爽やかな朝。美味しそうに白川代表が作ったフレンチトーストを食べるナディーン(右)とロゼット(左)

福島企画

【スケジュール】

実施日	活動	場所
12/24 (火)	事前学習	早稲田大学
12/25 (水)	クリスマス休暇	郡山市
12/26 (木)	須賀川市除染作業 見学 意見交換会	須賀川市
12/27 (金)	富岡町視察	富岡市
12/28 (土)	ダンスイベント	郡山市
12/29 (日)	マリールイズ氏に よる講演会	福島市
12/30 (月)	リフレクション	ラノー・ドール (メンバー関連施設)

活動内容

福島原発事故をテーマに、除染作業見学・意見交換会、生活制限区域、ダンスイベント、カンベンガ・マリールイズ氏による講演会を行った。企画最終日に、リフレクションを行い、日本ルワンダ学生会議として、そしてルワンダ人は日本に何ができるかを話し合った。各企画が終了した後もリフレクションを行い、お互いの感想や意見を共有し合った。

企画全体目的

1. 福島事故と現在の福島の状況に対する理解を深めること。
2. 行政、市民がどのような過程を経て地域の復興に至るのかを学ぶこと。また、1994年の内戦から僅か 20 年弱で経済成長の軌道に乗ったルワンダの事例も踏まえて、地域の復興や成長を学びたい。
3. ルワンダ人のダンスを通して、福島の方々を勇気づけ、福島の復興に繋げること。
4. 今後日本ルワンダ学生会議が、どのように被災地に、また日本に貢献できるのか、またどのように日本とルワンダという国がよりよい関係を築いていけるか考える。

福島県内で活動にするにあたって

日本ルワンダ学生会議は福島県で活動を行う上で、団体の放射線基準値を定めた。一般公衆の年間線量(医療は除く)限度である 1.0 ミリシーベルト(0.23 マイクロシーベルト)を基本的な放射線基準値とし、それ以上の線量の高いポイントには基本的には近づかないこととする。しかし本企画で行う除染作業見学と現地視察で行く場所は、比較的放射線量の高い場所であるので、両企画の参加は個人の任意に委ねることとする。現地視察で行く富岡町に入る際、必ず参加者には保護者の同意を得たうえで、防護装備(スーツ、グローブ、マスク)をし、車内からは出ず、滞在時間は 3 時間として活動を行った。

福島企画事前学習

担当者：品川正之介

日時・場所

日時：12月24日（火）11:00~12:00

場所：早稲田大学

プレゼン要旨

福島企画にあたって知っておくべき基礎知識を説明。福島基本情報から原発事故、水素爆発のしくみ、放射能・放射線基礎知識、現在の状況など、幅広くプレゼンした。

プレゼン詳細

1. 福島についての基礎知識

福島は東京から約 200km 離れた所に位置し、面積は 13,780 km²、人口 1,94 万人。ルワンダは面積 26,338 km²、人口 1,130 万人なので、福島の面積はルワンダの約 2 倍、人口は約 5 倍強ということになる。

今回福島県内で訪れる福島市、郡山市、須賀川市は内陸部に位置するものの、富岡町は海岸沿いにあり、福島第一原発からも近い。2013年12月現在は居住制限が設けられているものの、昼間は除染作業員などが立ち入り作業を進めている。

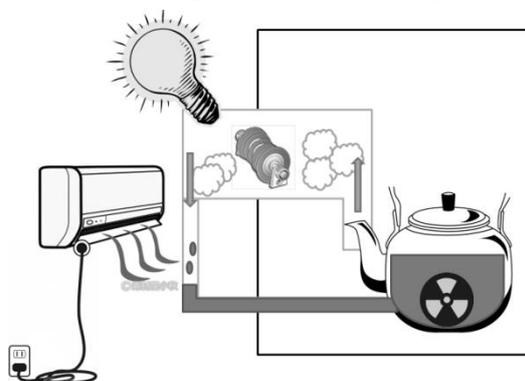
2. 東日本大震災

2011年3月11日 14時46分、地震発生。マグニチュードは9.0、犠牲者15,883人、行方不明者2,651人、避難者24,000人。多くの方が津波によって被害を受け、日本の歴史上最悪レベルの災害となった。

3. 福島第一原発事故

太陽光エネルギーなどの場合を除いて、発電の基本的なしくみはタービンを回すこ

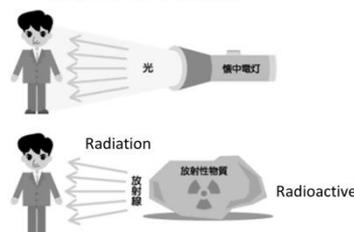
とによって電気を得ることである。火力、水力、風力、そして原子力もその基本的なしくみ自体は同じであるが、タービンを回す際のエネルギー源が異なる。原発の場合は、核燃料が用いられ、簡略化してしまえば、核燃料で水を蒸発させ、その蒸気によってタービンを回し、電気を作る。核燃料は扱いに十分に注意せねばならない。高い熱を放つため、継続した冷却を必要とするが、津波によって原発の電源が喪失、冷却装置が機能停止したことによって、結果的に水素爆発を起こすこととなった。



水素爆発とは、核燃料を冷やす水がなくなり、核燃料が自身の熱で溶け始める際に発生したガスが格納容子内に充満し、圧力に耐え切れず建屋内部に漏れ、水蒸気と反応して爆発を起こすものである。今回の事故では、この水素爆発によって大量の放射性物質が撒き散らされることとなった。

4. 放射能の危険性

Why radioactive and radiation are dangerous to human ?



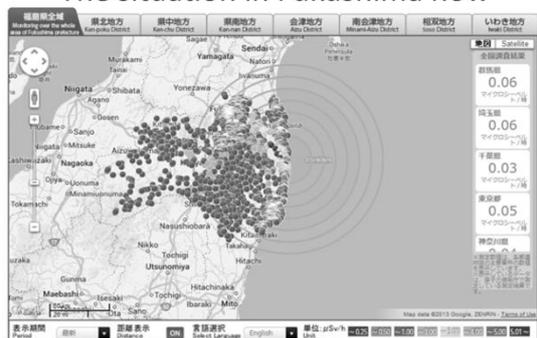
(放射線・放射能基礎知識を説明)

放射線について、どの程度被曝したら危険で、どの程度までなら安全なのか、という明確な線引きはない。ただ、ひとつの基準として、自然被曝以外に、年間100mSvを被曝すると、0.5%ガンで死亡するリスクが高まるという。この年間100mSvを1日分に計算しなおすと、1日あたり0.23mSvを毎日欠かさず浴びた場合、0.5%のガン死亡リスクが高まることとなる。危険と安全を線引きするのは難しいが、これをひとつの基準として考えることが出来る。

3. 現在の福島状況

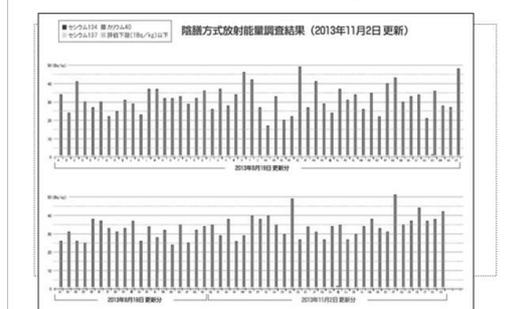
原発付近の放射線量は相変わらず高いが除染作業が進み、放射線量が下がってきている地区もある。

The situation in Fukushima now



福島県産の食の安全については、放射線量の検査・陰膳調査の実施などによって、安全性の保証に全力を挙げている。

Another survey



今回の企画で、様々な人にお話を聞く機

会があるから、ぜひとも自分の目で見て、いろんな人に話を聞いて、福島の現状を判断してほしい。

質疑応答・コメント

Q. 富岡町に行くことのリスクを教えてください。

A. 正確なリスクを言うことは難しい。ただ、プレゼンで述べた基準（100mSv 被曝で0.5%ガン死亡リスクが上昇）に照らし合わせて考えれば、短時間の滞在はほとんど問題がないと判断した。

・福島に行くのに不安がある。いくらそこで人々が普通に暮らしているからといって、それが安全を意味するわけではない。（ルワンダ側メンバー）

⇒たしかにそういえる。ちなみに、最近、放射線のことを気にしすぎると逆に体に良くないので、あまり気にしすぎずに普通の生活をするよう心がけている人もいます。（日本側メンバー）

Q. 富岡町に入るときは、防護服・マスクを着用してバスからも出ない。それでも富岡町に行くのに恐怖を感じるか？（日本側メンバー）

A. 感じる。（ルワンダ側メンバー）

・是非、自分の目で富岡町に入って、自分の目で、福島で何が起きているのかを見てほしい、ただ行くか行かないかは各人の判断に任せたい。日本側メンバーにも、保護者の方の許可が下りず富岡町にいけない人もいます（日本側メンバー）

⇒確かにリスクはあるかもしれない。もし

万が一ガンなどの病気になったら、ルワンダではうまく治療が受けられないかもしれない。ただ、現地に行くことで得られるものはたくさんあるはずだ。それらを天秤にかけたとき、僕は実際に行ってみるほうをとりたい。(ルワンダ側メンバー)

⇒その後、話し合いの上、ナディーンを除いたルワンダン 3 名と日本人メンバーで富岡町入りすることを決定した。

感想

発表者

自分でもよく理解していなかった福島原発事故をルワンダンにプレゼンするのは非常に大変で、たくさん勉強することとなったのだが、福島原発事故をじっくり考える非常に良い機会になったと思う。今まで東京にいたときは、何万ベクレルやら、何ミリシーベルトやらの情報にただ漠然と、「危なそう」という感想を抱く程度だったが、今ではニュースなどで見る際情報を判断するための知識が以前よりはすこしは多くなったと思う。

文面にしてみると、案外さらっとしている風に思われるかもしれないが、この富岡町に行くか行かないかの議論は長引き、ルワンダ側メンバーだけで一度議論したりと大変であった。ルワンダンの放射能に対する恐怖心・警戒は自分が思っていたよりも大きく（普通に考えたら当たり前かもしれないが）、よく考えて見れば、日本人は、「よくわからないけど、なんとなく大丈夫だろう」という具合に、悪い意味で放射能や今の福島や日本の現状に慣れてしまっているのではないだろうかとも思った。(品川)

除染作業見学・意見交換会

担当者：白川千尋

【スケジュール】

9:45~10:00	除染作業事前説明
10:10~10:30	須賀川市市長橋本克也氏と面会
9:00~10:30	除染作業見学
11:30~正午	須賀川市職員との意見交換
13:00~14:00	岩瀬公民館セシウム検査室見学

企画概要

日時：2013年12月26日（木）

場所：福島県須賀川市

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人4人、日本人7人)

協力者：須賀川市長橋本克也氏

須賀川市役所原子力災害直轄室の職員の方々

企画目的

福島原発事故後の収束の難しさを自らの目でみて知ること、自分たちが抱いている除染作業に対する先入観と現実がどのように異なっていたかを考える。また、行政の方々と直接意見交換をすることで、除染とそれに伴う様々な影響についての理解を深める。

活動報告

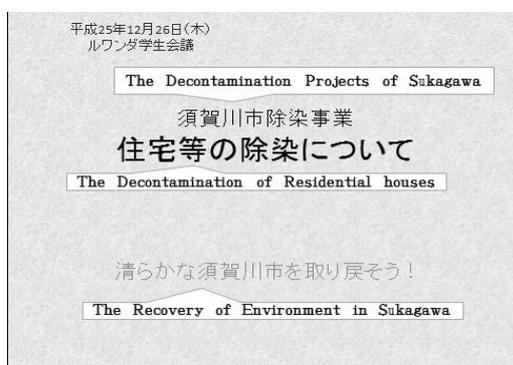
須賀川市仮庁舎にて、原子力直轄室の職員の方から除染作業についての説明をしていただいた後、除染現場へ移動。その後、同職員の方々と意見交換会を行い、食物に

含まれるセシウムの濃度を測る施設を見学した。

■須賀川市仮庁舎訪問

須賀川市長の橋本克也氏とお話する機会を設けて頂いた。ルワンダ人が積極的に質問していたことが印象的であった。その後、除染作業についてのプレゼンテーションを同職員の方に行って頂いた。

プレゼン内容（通訳：品川）



- 東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故の概要説明
- 須賀川市の放射線量について
- 除染事業全体の流れ
- 住宅除染方法の説明
- 道路・公園等の除染方法の説明
- 須賀川市の除染について
- 除染の効果

■除染作業見学

下水処理施設付近の表土を 20cm ほど削り、一か所に汚染度を集積していた。地面に近づけるほど、放射線量は高く、離れているほど、線量は低くなった。



■意見交換会

(品川) 須賀川市の住民は除染作業に対してどのような意見や印象を持っているのですか？

(職員 A 氏) 早く除染を行ってほしいという気持ちが強いです。

(品川) 住民の方々は除染に満足されたり、納得されたりしているのですか？

(職員) マンパワーが必要とされているので、中々、そこが追いついていないので、早く終わるのが難しいです。そのため、優先順位を決めて、高い線量の地区から除染するという方針です。なるべく早く終わられるような態勢を整えていきたいと思っています。

(白川) 住民が除染を断るというケースはあるのでしょうか？

(職員) 断られる方もいらっしゃいます。気にしない、自分でそれなりにやってしまったという方もいます。

(品川) 放射線をルワンダ人は怖がっていたのですが。

(職員) 須賀川市における線量は住める基準であり、そこまで高くないです。しかし、避難区域のように線量の高い地区については、国が指定し、そこに入らないようにと指示しています。

(Rosette) 震災後に何人か元いた住まいを離れた方がいると思いますが、その後、福島県内に帰ってきた人はいますか？

(職員) 事故当時は、様々な憶測や噂が流れ、県外に避難した人はいましたが、徐々に戻ってきていると聞いています。除染が終わった空家に人が戻ってきたというケースもあります。

(Rosette) 学校の除染の状況について教えてください。

(職員) 小中学校および、幼稚園、保育園については、平成 23 年に校庭の表土除去を行いました。

(片岡) その除染は放射線のレベルに関係無く行ったのですか？

(職員) 子どもの生活空間は最優先エリアと決めており、小中学校、幼稚園、保育園といった子どもたちが遊ぶ場所が一番早く除染しました。

(Nadine) 子どもたちは、震災前と同じように学校に通えているのでしょうか？

(職員) 震災後は当たり前のように通っています。

(岩垣) 一般家庭に対する除染についても、子どものいる家庭の優先順位は高いのですか？

(職員) そのようなご要望もありましたが、基本的には子どもがいる、いないにかかわらず、エリアごとに行っています。

(Nadine) 除染をなるべく早く終わらすためには、政府が人材を育成し、もっと増やした方がいいのではないのでしょうか？

(職員) 県内各市で除染を行っていますが、現場監督が見られる人数は限られています。きちんとしたスキルを持った作業員を確保することが今後の課題です。

(Theophile) 須賀川市や福島の食べ物が安全であることを証明するような取組などは行われているのかを教えてください。

(職員) 検査体制をしっかりと行っているということを発信しています。また、旅行会社を通じて、福島では普通に人が暮らしているということを見に来てもらっています。

(Alex) 除染をしてもらった住民はお金を払う必要があるのでしょうか？それとも無料で行ってくれるのですか？

(職員) 除染にかかる費用は全て国が支払います。

(片岡) それは市の予算ですか？

(職員) 国からお金をもらって市が除染を執行するというかたちです。

(品川) 予算は正直なところ、十分いただいているのですか？

(職員) はい。国の方では確保していただいております。

(品川) それで足りているとか、足りていないとか、除染をするためにもっと必要とかはありますか？

(職員) 除染でできることとできないことというものがあります。国の除染のガイドライン通りに行くと、予算は県を通していただけます。

(星野) 国の予算はどれくらいいただいているのですか？

(職員) 12月の補正予算で須賀川市は年間170億円いただきました。

(JRYC メンバーのざわめき…)



(Alex) 作業員の方はどれくらいいますか？

(職員) 一日当たり、1000人ほどです。

(片岡) それは市の職員の方ですか？

(職員) 職員ではなく、受託している建設会社や造園会社さんの社員の方々です。

(Theophile) 除染作業する必要のある面積はどれくらいあるのでしょうか？また現段階では除染は何パーセントくらい終わっているのでしょうか？

(職員) 須賀川市には、25000世帯あります。その中で優先的に除染されるのが5000世帯ほどあります、今年は4700世帯の発注は済んでいます。

(片岡) つまり、注文は済んでいるけれど、まだ終わっていないということですか？

(職員) はい、そうです。

(職員 B 氏) 12月末で終わったのがだいたい発注をかけたうちの1000世帯です。

(Rosette) 除染を終えるのにどれくらいかかるのですか？

(職員 A 氏) 一番難しい質問ですね。須賀川市内では、線量が徐々に下がってきてはいます。線量は時間とともに下がっていきます。なので、時間との闘いです。

(品川) はっきりした数字ではだせないのですか？

(職員) 平成27年までにはある程度、メドをたてたいというのがあります。

(島村) 国から予算もおりているのに、作業員不足というのは、建設業者など受託側から除染作業を嫌がられているという状況があるのですか？

(職員) 嫌がれるということより、須賀川市は震度6強を観測しました。まだまだ、現場復旧も必要であり、同時併行している状態です。なので、現場復旧と除染で取り合うという状況になっています。作業員の方々は放射線の管理がきちんとされていれば、作業は安全であると理解しています。

(職員 C 氏) 福島原発事故については、ルワンダで報道されたのでしょうか？また、ルワンダの国民の方々は、福島で原発事故があったことを知っているのでしょうか？

(Alex) はい。BBCや国際ニュースを通してルワンダでも報道されました。

(Nadine) 私の親は「日本は危ないから行くべきじゃない。日本は安全ではないから行ってほしくない」と言われました。

(職員 A 氏) 第一原発事故の状態によって、東日本がどうなるのかという不安があったのは確かです。いわゆる、原子炉を冷却することができないということで自衛隊や消防隊員の方々が懸命に放水作業をしていました。「チェルノブイリのように爆発してしまうのではないか、日本は大丈夫なのか？」と多くの方が思われました。現在は、原子炉の冷却は維持されております。また、廃炉に向けた作業も進められております。事故当時は、国際的

にも「日本はどうなるんだ？」という声はあったと思います。

(Nadine) ルワンダでは過去に、ジェノサイドという悲劇的な出来事がありました。現在のルワンダでは、そのような悲劇が二度と起きないように、いろいろな対策が行われています。日本も原発事故という悲劇が二度と起きないために、須賀川市としてどのような意見や見解がありますか？

(職員) 福島には、第一と第二原発があります。福島県としては、再稼働はしないという考えです。



(Nadine) 他の地域はどのようなのでしょうか？

(職員) 日本には 50 数基の原子力発電所があります。原子力規制委員会が様々な条件をたてています。例えば、津波に対する備え、大震災に対する備えとか。今まで以上に厳しい規制をかけて、再稼働について今後、自治体と協議していくというかたちです。

(Alex) 他の原発を持っているような国についてはどう思いますか？ルワンダは津波も来ないし、地震も起きません。原発を建てても、日本ほどの被害はないと思います。日本人として、原発を他国に進めることはできますか？

(白川) 日本はそもそも、津波や地震の多い国なので、原発を建てることに適した国ではない。しかし、今後どうやって電気を作りだしていくかをみんなで考えていかなければならない課題だと思う。

(職員) 原子力というのは、エネルギーの候補の一つでしかないのです。そもそも、エネルギー政策というものがある。その一つに電力という分野があります。私が小さいころは、火力発電が主で、原子力なんてものはあまりなかった。それからいつのまにか、原子力というものが主になり、次に火力、天然ガス、水力という順番になりました。それは今までの科学技術とコストの問題でそのような順番になったと思います。このような事故が起きて、原子力をやめるとなれば、電気料金は 2 倍になり、それに納得できるかという問題があり、家庭ではそれを我慢できるということもあるかもしれないが、では、企業は我慢できるかという問題もある。国は、原子力発電はコストの面や地球温暖化の面からクリーンなエネルギーだと一生懸命宣伝してきました。そういったことを含めて、便利な部分とリスクの部分をよく考えてやっていくエネルギー政策であるべきだと考えています。ただ、感情的な面からすれば、福島県の各自治体そして市民のみなさんは、この放射能問題で苦しんでいる部分もあります。そういうことからすれば、福島県民は放射能問題に対してアレルギーを持っています。

(品川) 原発はエネルギー政策だけに関わっているのではなく、政治、経済、産業、環境などいろいろなことに関係している

ので難しい問題なのだと思います。

(職員) このような事故が起きても、「では、日本中の原発をすぐにやめましょうか」という議論にならないのは、原発がもつ機能とメリットと不安が絡み合っているのです。

(板谷) 原発の供給量が3~4割であれば、すぐに無くして新しいエネルギーを供給するというのは簡単ではないし、止めるということも難しい。私達は新しい方法を考えていかなければいけないと思う。日本に合った発電方法を考えていって、原発で補う分を少しずつ減らしていって、一番自然な方法がいいと思います。事故の起こる可能性の低いものが一番いいのかなと思います。長い時間を見て、解決していかなければいけない。

(白川) ルワンダにはキブ湖があり、そこからいくらか電気を作っていると聞いたが、そういった自然エネルギーについてはどう思う？

(Alex) あれば、中国人が作ったブラックマーケットだよ。

(岩垣) 原発について日本人は、原子力の便利な点とリスクのある点を話し合わなければならない。日本の政府と市民の間でもっと多くの議論が交わされるべきだと思います。でも、個人的に、政府が市民の意見を取り入れていないように感じられます。政府と実際に住んでいる市民の方々が意見をシェアできるような場所をもっと多く作るべきだと思います。

(星野) 須賀川市を訪れるまで、除染は福島だけの課題だと持っていました。除染のやり方、福島の置かれている状況も知らなかったです。でも、今回、実際訪れ

てみて、福島の問題は現在も続いている問題だし、おそらくこれからも放射能との闘いは続いていくので、それらを見据えて原発を建てるのかどうかを考えていかなければいけないし、10年後、50年後といった先のことを見据えて政府は考えていかなければいけないと思いました。実際、放射性廃棄物を捨てる場所が無いということをおっしゃっていたのですが、そういった場所を見つけるのは急務なのに、そういったところを国がまだ解決していないということを考えると、意外と国というのも、原発に対して真剣に向き合っていない部分があると感じました。

(品川) まず、最初に知りましょう。これからは問題意識を持ち続けて勉強しましょう。

(職員) 私達実際、福島で生活をしていません。子どもたちとともに当たり前のように生活しています。仕事も生業もあります。放射線から逃げないで向き合って、今後の自分たちの生活を支えていくという気持ちでやっていますので、それをみなさんにお伝えください。



■セシウム濃度測定室の見学

急遽、須賀川市職員の方のご意向でセシウム濃度測定室を見学させていただくことになった。実際、セシウム濃度を測定している所を見ることはできなかったが、過去にセシウム濃度を測定した記帳な資料を見ることができた。

感想

担当者

まず、師走という忙しい時期に、日本ルワンダ学生会議のために、除染作業見学、意見交換会、そして測定室の見学をする機会を作ってくださった須賀川市市役所原子力直轄室をはじめとしたみなさまにお礼を述べさせていただきたい。

筆者は今回で、須賀川市の訪問は三回目となった。この企画が実現するまで、須賀川市役所に二回訪問し、除染の下見と企画の打ち合わせを行った。企画を実施し、終えることができたのは、須賀川市役所の方々のご協力があったことはもちろんである。一方で、直接企画の内容を説明しに伺い、企画に賛同していただくことができるまでになった自分たちの「伝える力」が以前よりも伸びていることを感じることもできた。

除染についての評価は様々あるが、今回、除染作業を自分たちの目で見ること、除染がどのようなものなのかを理解することができた。除染は線量を低くするのに、一定の効果はあるが、完全に除去することはできない。「安全である/安全ではない」という二つの指標で安易に判断することの危うさというものを学んだ。

除染を初め、廃棄物処理施設や最終処分場の課題など、これは福島だけの問題ではなく、日本全体の問題であるということ、ルワンダ人と共有することができた。また、福島原発事故の大きさと深刻さを日本人とルワンダ人の両方に理解してもらったのではないかなと思う。

(JRYC 白川)

参加者

原子力発電所は津波に襲われやすい大変危険な場所に建てられている。また、除染なしで生活するというのも危険なことだ。除染作業見学は私をいろいろ納得させた。なぜなら、私は自分の目で土壌や壁の放射線の線量を確認することができ、その線量によってここが恐ろしい場所なのかどうかを判断することができたからだ。

今後、日本が原発を建てるのであれば、新しいシステムを伴った原発をより安全な場所に建てるべきだ。そうすれば、2011年に起きた事故は再び起こらないのではないかなと思う。(Nadine 白川訳)

富岡町視察

担当：白川千尋

【スケジュール】

8:00	郡山出発
10:00~13:00	富岡町視察
	国道288号線
	国道399号線
	富岡第二中学校
	富岡町役場
	富岡駅
	海岸
	毛萱(スクリーニング・防護装 備回収)
	檜葉
	広野
	高速道路
14:00	宿舎到着

企画概要

日時：2013年12月27日（金）

場所：福島県富岡町

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人3人、日本人7人）

協力者：川上工務店取締役川上好氏
川上工務店職員川上秀人氏
オリエンタル交通

企画目的

比較的放射線線量の高い居住制限区域、避難解除準備区域がどのような場所であるのかを自分の目で見て、福島の実状を理解すること。また、事故が起きる前、富岡町で暮らしていた川上好氏から、事故が起きる前の富岡町での生活や富岡町がどのような所であったのかを伺い、現実の富岡町と比較することで、原発事故がもたらした被害の大きさを知ること。

活動報告

富岡町に向かう途中、川上好氏にインタビュー形式で質問を行った。また、富岡町に着いてから川上好氏に富岡町をガイドしていただき、その都度、質疑応答をするという形をとった。富岡町に近づくにつれ、ルワンダ人の顔に変化が見え始めた。



■インタビュー&質疑応答

（川上好氏）以前富岡町に住んでいました。自然に囲まれ、自然と接するような趣味、例えば、つりや狩りをもっていましたね。でも、原発事故が起きて、町から郡山市に避難しました。なので多くの趣味を失い、福島でその趣味を持つことは二度とできなくなりました。

（白川）新しい場所に移り住んだことで、人間関係は変わりましたか？

（川上氏）今までは知り合いが近かった。隣同士だったから。でも今はそれぞれ避難して、会いたいけれど会えない状態だね。特に子どもはそうでしょうね。

（白川）避難をしなければいけないとなった時、川上さんの子どもはどのような反応でしたか？

（川上氏）子どもは結局、「何が起こったのか分からない」という状態だったね。地震と津波だけだったから、みんなすぐ帰れると思ったんだよ。避難してる最中に、原発がドンドンと爆発して、初めてみんなこれ

は「よくない」と思ったね。おんちゃんらも含めてみんなたまげているよ。

(白川) 事故が起きてから、常に風評被害がつきまとうことになり、福島県の風評被害はまだ消えていません。福島県に風評被害があることについてどう思いますか？

(川上氏) なかなかこれは厳しいよね。はっきり言って、その線引きってもんがよく分からないから。だから結局、どこでいいか悪いかちゅうのをするのはなかなか難しいところはあるんだけど。少し線量が落ちたか分からないんだけど、若い人に「これを食べ」って勧めることはできないんだよね。ある程度都市いった人間が食べても10年は結局表に(症状が)でてこないんだよね。それはそれでいいっている人はいるんだけど。若い人も風評被害について勉強しないと。まだまだ被害はでてくると思います。



(都大路から川内村方面へ移動中)

(板谷) 今、一番改善してほしいことって何ですか？

(川上氏) 放射能関係…難しいなあ…！
はっきりいって、東電はまだ本当のことを言っていないからね。だから今ある程度、東電のことをテレビで報道しているか分からないんだけど、ちょこっとまだ隠している部分がある。言えないこともまだある。

まあ、そういうところは完全に全部言ってもらいたいよね。それで、言って、一般市民にいろんな興味を与えて、いろんなことを話し合って改善なり対策をやっていかないと、たぶんこれから東電の信用ってのは無くなるんじゃないかな。

(Alex) 事故の後に原発が撤廃されず、原発が残っていることについてどう思いますか？

(川上氏) 腹を割って言えば、原発なくてもなんとかなるんだよね。はっきり言って。電力ちゅうのは、今は風力でも水力でもあちことにあるから、原発を頭に置かない方がわれわれはいいと思っている。だから、はっきり言って、原発は廃炉にしたっていいと思っている。ただ、それを今度は、原発を仕事にしていた人からすれば、仕事がなくなっちゃうと自分ら生活できないもんだからさ、まあ、原発は廃炉にしちゃってもいいと思っているんだけどね。

(Theophile) 震災以降、富岡町はどういう状況なのですか？

(川上氏) 帰宅困難区域と出入りできる区域に分かれているんだ。けれども、普通に入れるところは、人間がちょこちょこいるなという気がするんだけど、もう困難区域ちゅうのは人が完全に入っていないから、もう周りは草がボウボウだし。



(Rosy) 事故が起きた時、原発で働いていた人たちはどういう状況だったのですか？

(川上氏) すぐみんな避難。避難して、(その後) 急遽中に入って復旧作業をしに行った人もいるね。

(片岡) 富岡には、もともと原発の仕事に就いている人はどれくらいいたのですか？

(川上氏) ほとんど原発関係でしょ。大熊・双葉・楡葉・広野・相馬やいわきの方もだいたい原発関係の仕事に就いているね。

(片岡) つまり、今帰れなくなっている人のほとんどが原発関係の仕事に就いていたということでしょうか？

(川上氏) そうだね…原発関係が多いね。結局、その町全体に原発が来て、そこから雇用が生まれているから、町にしてみれば、事故が無かったらそのまま仕事に就いていたと思うんだけど。今回この事故が起きて、結局原発は地震にも強いという認識が崩れちゃったわけだからね。



(川内村通過中)

(品川) 事故当時、政府は避難指示をだしたりしたのですか？それとも自発的に避難したのですか？

(川上氏) 町の方に国から連絡が来て、そこから自衛隊、警察が来たね。

(富岡町到着、海岸付近)

(星野) 富岡町は津波で亡くなられた方も

多いのですか？

(川上氏) 多いよ。今まで津波がくるといっても何十センチや一メートルいかにないくらいだった。今回、地震がでかいのきたからといって、でかい津波が来るなんて誰も思わなかったんだ。それで、いったん大事なものを家に取りに帰った人が津波に流されたんだよね。



(双葉警察署前を通過)

(しばらくして、第二原子力発電所が前に見えてくる)

感想

担当者

「そもそも若い学生が線量の高い区域に入っても大丈夫なのか？」

「線量に基準値というものには存在するのかわ？」

「放射線の影響はどうか？」

放射能や放射線について知れば知るほど「怖い」という感情が大きくなり、福島企画を全面的に見直す必要があるのではないかと考えたこともあった。

怖いけれど、「正しい怖がり方をしたい」。知識を得続け、自分の目で現場を見て、見たものと知識をすり合わせ、「福島はどうか」ところなのか」を自分で判断することの大切さをこの企画の下見も含めて感じるこ

とができた。

郡山市や福島市の駅周辺を見ると、そこにはイルミネーションもあり、多くの人があが歩いている。ここは、原発事故があった県なのかと疑問が浮かぶことさえあった。

しかし、ある講演で聞いた言葉をきっかけに、その風景は、福島の一つの側面ではないということを筆者に認識させることとなった。「福島の人には普通に生活しているように見えるけれど、別に放射線のことを忘れたわけではないのです。普通の生活を装っているのです」。このような言葉は、この講演以外で聞かれることも少なくはなかった。「普通の生活」とは何であるか、「なぜ普通の生活を装わないと生活できないと考える人がいるのか」ということに、筆者は目を向ける必要があると思う。そこに目を向けることは、自分が自由に使っていた電気の一部がどこで作られてきたのかを振り返らせ、福島原発事故は「自分の問題でもある」という意識を与えてくれるからである。

富岡町のような制限区域が福島には存在するということを、福島のもう一つの現実として頭にいれておかなければならないと思う。筆者は福島のもう一つの現実を、地元の方に失礼にならない範囲とリスクマネジメントをしたうえで、多くの人に見に来てほしいと思った。特に、筆者のような若い学生や外国人に、自分の足で訪れ見に来てほしい。

放射線や放射能に関する情報はあふれるほどある。現地に行かなくても、簡単にそれらの情報を得ることができる。しかし、しばしば多くの情報のおかげで「何が正しいのか分からない」というような混乱が起

き、恐怖が助長されるということがある。それは筆者自身も経験した。

福島を自分の目で見ること、それまで見ていた以外の側面の福島を見ることができるとは思えない。だから、筆者は福島に来てみたいと思うのである。

(JRYC 白川)

参加者

正直に書く。意外と驚きや悲しみの様な気持ちは少なかった。写真や動画で事前に見てきた者を追体験している様な感じだった。ただ、写真・動画と現実で大きく違うことがあって、それは除染作業員の姿だった。制限区域と言えども、多くの作業員の人や、一時帰宅の人がいて、そこに驚いた。富岡は制限区域で、線量も高い。建物も壊れている。でも、人は入れるし、防護服なしで作業している作業員もいる。一部人が帰ってき始めている所もある。なんだか、希望を持てる状況でも、絶望する状況でもない変な感じだった。

(JRYC 品川)



富岡町訪問は、私にとって衝撃だった。津波の被害もそうだが、放射線で入れない地域は、人々の生活感が残っていて何とも言えない気持ちになった。普通の生活が放射能の影響などで止まってしまう怖さ改めて感じた。また避難することで、人々のコミュニティが壊れてしまった話を川上さんから聞いて、ただでさえ、故郷を離れてしまうことに悲しみを感じるのに、人々のコミュニティが崩壊してしまった富岡町に住んでいる方のことを思うといたたまれない気持ちになった。(JRYC 星野)

富岡町を訪れる前は、怖くて仕方がなかったけれど、そこには結構人がいたし、また除染作業員が除染作業を行っており驚いた。私は自分の目で富岡のリアリティを見ることができた。福島企画で富岡町や須賀川市を訪れる機会を作ってくれて感謝している。福島に対する私の考えは変わったし、私は福島の現実を知っている。

(Rosette 訳白川)



おだがいさまセンター企画

担当者：岩垣梨花

企画概要

日時：2013年12月28日(土)

場所：富岡社会福祉協議会おだがいさまセンター

参加者：富岡町仮設住宅にお住まいの方、周辺地域にお住まいの方、踊りの会の皆さま、フラダンスの会の皆さま、日本ルワンダ学生会議のメンバー(日本側10名、ルワンダ側4名)

協力者：富岡町社会福祉協議会様、NPO ビーンズふくしま様

企画内容

午前：おとな企画

ルワンダの伝統ダンスコンサート、ならびに踊りの会・フラダンスの会の方々による発表。ダンス披露終了後にルワンダティールを振る舞っての茶話会。

午後：子ども企画

ルワンダ〇×クイズ、ジェスチャーゲーム・椅子とりゲームなどルワンダ人と子どもが触れ合うレクリエーション。

企画目的

- ① ルワンダ伝統ダンスを披露することで、福島の方々に遠い異国について関心を抱いていただくこと。
- ② ジェノサイドという悲劇を乗り越えてきた国として、伝統ダンスで福島の方々

を勇気づけたい、というルワンダ学生たちの熱意を伝える機会になること。

- ③ 実際に現地に住んでいる方々と共に過ごすことで、ルワンダ人に伝えられた思いを様々な人たちに共有すること。
- ④ ルワンダ人との交流を通して、福島の子どもたちが世界に対する視野を広げる機会を提供する。



(こどもとの交流を楽しむ)

活動報告

午前10時より、第一部企画としておとな企画をスタートした。大雪の影響でアクシデントにも多々見舞われたが、メンバー各人が指定された仕事をこなし、また臨機応変に対応したため円滑に進行を行うことができた。特に踊りの会・フラダンスに会の方々よりダンスレクチャーを頂き、メンバー全員で輪になって踊った際には、参加者全体で非常に盛り上がる事ができた。ダンス披露終了後の茶話会では、避難生活に対する思いを語ってくださる参加者の方もいらっしやり、メンバーひとりひとりが真剣に耳を傾けた。

午後は13時半より、こども企画をスタートした。天候不良もあってかこども企画参加者は少なかったが、少人数であるからこそ寧ろルワンダ人と子ども達の距離がどんどん近くなっていき、思う存分触れ合うこ

とができる時間となった。ルワンダ人と子ども達はお互いに言葉が通じないため、ジェスチャーゲームや椅子とりゲームなど、言葉を使わなくても一緒に遊ぶことのできるレクリエーションで交流を楽しんだ。また参加者の子どもの中に中学生がいたが、学校で習った英語を使って一生懸命にコミュニケーションを図ろうとしている姿が非常に印象的だった。最後に企画協力者のNPO ビーンズふくしま・大河原様よりケニア伝統ダンスを披露していただき、大盛況の中、本企画は終了した。



(踊りの会の方々にダンスを教えてもらう)

感想

担当者

おだがいさま企画が本格始動し始めたのが昨年7月のことである。そこから約5ヶ月間、本当に多くの方のご協力のもとに本企画は成功を収めた。企画アドバイスから会場提供、さらには参加者募集に尽力してくださった、おだがいさまセンター職員様。こどもの視点や心情を教えてくださいたり、企画アドバイス、また子どもさんへの周知にお力添え頂いたNPO ビーンズふくしま様。そして下見の際に何度も何度もお世話になったおんちゃん、お兄ちゃん、そのご家族の皆様。その他にも多くの方々に支えられ、この企画を終えることができた。

企画中、特に印象的だったのが踊りの会・フラダンスの会の方々からダンスを教えてもらったダンスレクチャーのコーナーである。これまでは日本で行うダンスコンサートでは、常にルワンダ側がパフォーマーであり、日本側が教えてもらう立場に立っていたが、今回は逆に教えていただく時間があったことで、文化の相互理解を体験的に行うことができた。最後に全員が輪になって踊った際には言葉を越えた会場の一体感を感じることができ、ルワンダ側も充実感に満ちあふれた表情だった。

今回の企画では、直前までなかなか内容を調整することができず、ギリギリの準備になってしまった。そのために当日の進行には不安に感じていたが、メンバー一人ひとりが本企画の趣旨をきちんと理解し行動してくれたことで、スムーズに運営することができた。特に新入生の活躍は素晴らしいものがあり、今後のステップアップに更に期待が高まった。(岩垣梨花)

参加者

今回のダンスコンサートを通して、富岡町の住民の方々から直接、地震や津波の被害そしてその後の生活について伺うことができ、非常に貴重な機会となった。私はまた、富岡町の方々の多くがルワンダに興味を持ってくれ、好きになってくれたことがとても嬉しかった。午後の部では、子どもと一緒に遊び、ルワンダについてのクイズを楽しんだ。今回出会った富岡町の方々はとても親切で、私は彼らと素晴らしい時間を過ごすことができた。日本の伝統ダンスもとても気に入った。(Nadine)

カンベンガ・マリールイズ氏講演会

担当者：品川正之介

【スケジュール】

14:00~15:30	カンベンガ・マリールイズ氏による講演会
15:30~16:30	質疑応答
17:00~19:00	会食・交流会

企画概要

日時：2013年12月29日(日)

場所：福島県福島市

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人4人、日本人8人)

協力者：カンベンガ・マリールイズ氏

：本田 紀生氏



カンベンガ・マリールイズ氏プロフィール

1965年ルワンダ生まれ。1993年より約1年間、福島文化学園にて留学。1994年ルワンダに帰国されたが、内戦が勃発し同年再来日。2000年に福島県内にてNPO法人、ルワンダの教育を考える会を立ち上げ、現在は理事長を務めておられる。先の東日本大震災を福島にて経験されて以降は、従来

のルワンダの教育支援活動に加え、福島での被災地支援活動にも積極的に関わっており、特に仮設住宅への訪問や講演など精力的に活動されている。

企画目的

震災を経験し、その後福島での被災地支援活動を積極的に行っているマリールイズ氏のお話を聞くことで、震災後福島の状態を知り、今後日本ルワンダ学生会議が、どのように被災地、また日本に貢献できるのか、またどのように日本とルワンダという国がよりよい関係を築いていけるか考える

講演内容概要

ルワンダと福島での経験を通じて人生において一番大切なこと、それは人との出会いである。人との出会いが人生を豊かにし、人との繋がりがあるからこそ、困難な状況を乗り越えられる。のちに日本に留学にいくきっかけとなったルワンダ駐在の JICA ボランティアの方、日本語を厳しくもやさしく教えてくれたホストファミリーのお婆さん、内戦の絶望の淵で出会った日本人医師、第二の故郷・福島の人々...マリールイズさんは、様々な人との出会いに支えられ、今までの人生を歩んでこられた。

多くの人との出会いで人生が変わったマリールイズさんは、今度は人を支える活動に取り組み、また日本とルワンダを繋ぐような活動をされている。ジェノサイドを経験した子供たちが夢を取り戻せるようにと学校設立に尽力し日本で NPO を立ち上げ、震災のあとはルワンダ紅茶とコーヒーを携えいち早く被災者の方を励ます活動に

取り組んでこられた。福島震災は本当に凄まじいものだったが、「全てを失っても希望がある。」と、ジェノサイドと東日本大震災の二つの惨禍に巻き込まれても、それを乗り越えてきたマリールイズさんは言う。福島は第二の故郷であり、とても大切な場所である。ルワンダが様々な人の助け無しに、経済発展を遂げられなかったように、福島も多くの人の助けが必要になる。そのためには人と人との関係が大事である。実はルワンダの子供たちが、誰に言われたでもなく日本の復興のために折り紙で鶴を作ってくれた。人と人とのつながり、日本とルワンダのつながりがこれからも続いてこそ、両国のよりよい将来が築かれる。

質疑応答（抜粋）

Q. いつ頃からルワンダで学校を開こうと思っていたのか。

A. 実は、学校を建てるアイデアは 1992 年くらいから練っており、1993 に学校を開設していたが、ジェノサイドで全て破壊されてしまった。ジェノサイド後、学校の復興は難しかったが、努力を続けた。2000 年に NPO を立ち上げ、学校も再建した。はじめは 2 教室からのスタートだった。

Q. 学校はどこにあるのか。

A. キガリのキミロンコという場所にある。そう遠くないので次回の招致でぜひ訪れてほしい。

(補: 学校名はウンチョムイーザ学園。詳細はルワンダの教育を考える HP にて)

Q. 学校の運営にかかる費用はいくらか。

A. 毎月日本からルワンダに 30 万円送金し

ている。学校には、孤児や片親を亡くした子など一部がいて、学費を払えない場合は学校が金銭的サポートをしている。また100%私立の学校なので、教師の給料も払っている。

Q. 100%私立だと、カリキュラムにある程度の自由はあるか。

A. 国の作ったカリキュラムには従う。ただ、日本の折り紙を教えるなど、文化教育の面などで工夫をしている。

Q. 生徒数は？

A. 現在 220 名。すでに卒業した生徒もいる。

Q. ジェノサイドを経験したルワンダ、原発事故を経験した福島でなにか共通点を感じるか。

A. とても感じる。初めて日本に来たとき、誰もルワンダのことを知らなかった。しかし、1994年にジェノサイドが起きた後は、みんなから大変でしたねと声をかけられた。ルワンダは、日本の人に虐殺の地として認識されており、それが悲しかった。人々にルワンダの文化や優しい人柄など、美しい面を伝えよう、ルワンダのイメージをジェノサイドからポジティブなものに変えようと思った。今福島でも同じことが起きている。以前はみんな福島がどこにあるかすら知らなかったが、今はみんな福島のことを知っている。危ない場所として。私には多分、多くの人に福島の本当のことを知ってもらうという使命がある。私たちは、過去は変えられないが、未来は変えることが出来る。ルワンダが今アフリカの奇跡と呼ばれるように、福島も日本の奇跡になれる。

1000年に1度という大震災の場にめぐり合わされた私たちは、この惨劇を後世に伝えていく使命があるのだと思う。

Q. 日本とルワンダのよりよい関係を築くために、若い世代は何ができるか。

A. まずはお互いの国のことを良く知ること。まだ両国はお互いのことを良く知らない。何か日本を紹介するイベントをルワンダで開いたらどうか。実は私はルワンダの国際エキスポで、日本のブースを出したいと思っている。そこで登壇してあなたたちが日本で見たことを話す機会などを作ってもいいと思う。

Q. ルワンダで、JRYCの活動をもっと広く知ってもらうにはどうすればよいと思うか。

A. 相互理解を理念とする活動の意義は、政府や大学の人はわかっているはずだ。もっと、活動の意義をそういう人たちに話しに行き、理解と協力を得ると良い。ルワンダ政府は、アガーシャ(=何か新しいこと)に興味を示しやすいので、もっと活動の意義や将来性について話すといい。ルワンダの政府系機関は日本よりももっと近く、会いに行きやすい。実際私は市長にも大臣にも大統領にも会えたのだから、あなたたちもできるはず。

感想

担当者

福島に実際に訪れる前は、震災と原発事故後未だに先行きが見えない福島に対して、かなり悲観的な思いをもっていた。しかし、福島企画を通じて色々なものを見、人と出会い、またマリールイズさんのお話を聞く

ことで、確かに福島の様子は厳しいものかもしれないけど、なにか、希望、ないし可能性というものを感じたように思う。「アフリカの奇跡と呼ばれるルワンダのように、福島も日本の奇跡になれる。」「過去は変えられないが未来は変えられる。」「全てを失っても希望はある。」マリールイズさんの、いくつもの困難を乗り越えてきた人生経験によって紡がれたこれらの言葉はとても印象的だった。福島企画と、今回の講演会で、お話の中にあっただように、福島とルワンダの共通点が見えてきた。これから、福島とルワンダ、日本とルワンダのよりよい未来のために、自分でできることを微力ながらがんばっていききたいと思う。

実は、報告書内には詳細は記載していないものの、質疑応答の延長で、JRYC がより発展していくにはどうすべきかという議論が大いに盛り上がり、マリールイズさんから様々なことに対してアドバイスを頂いた。お忙しい中、講演会の開催を快く引き受けてくださったこと、団体の活動に対して多くの知恵とアドバイスをくださったことに、この場を借りて、深くお礼を申し上げたい。

(JRYC 品川正之介)

マリールイズさんは、私たちの活動に対して多くの有益な助言をしてくださった。明確なゴールを設定すること、活動に自信を持つこと、できないと決め付けずまずは挑戦してみるなど、人とのつながりを大切にすることなど、今回とても勉強になった。

彼女の歩んできた人生のお話は、とても心に響くものだった。どんな困難であろうと、目標を定めて自信をもって進んでいけ

ば道は切り開けるものだと思った。今回、マリールイズさんにお会いでき、とてもよかった。ありがとうございました。

(Rosette 品川訳)



*今回は紙面の都合上、講演内容のごく一部のみを記載したが、紙面上ではお話の雰囲気や伝えきれないので、この報告書をお読みになっている方にはぜひ、マリールイズさんの講演を生で聞いて頂ければと思う。

参考：ルワンダの教育を考える会 HP

<http://www.rwanda-npo.org/>

福島企画

リフレクション

担当者：安居綾香

企画概要

日時：2012年12月30日（月）

場所：ラノー・ドール

企画目的

12月24日から30日にかけて行った福島企画について、振り返りを行い、日本・ルワンダの相互の考えを共有する。

活動報告

福島企画のリフレクションでは、以下の3点について話し合った。

1. 福島に対してのイメージは変わったか。
2. 変わったのならば、どのようにイメージが変わったのか。
3. 私たちは福島のために何ができるだろうか。

1. 「福島に対してのイメージは変わったか」

全体としては、ルワンダ、日本の学生共に、福島に対してイメージが変わったというメンバーが多かった。

2. 「変わったならば、どのようにイメージが変わったか」

ただただ福島は危険、ルワンダの学生の中には、「福島に行くの？大丈夫？行かない方がよいよ。」と家族や友人に心配されて来たメンバーもいる。ルワンダでは、福島は

危険で最も日本で行ってはいけない場所という認識があるようである。日本の学生も、ルワンダの学生と同様に福島は危険な場所、という考えを持っている人が企画前は多かった。

しかし、企画後はその印象が少なからず全員変わった。「原発問題＝福島」と考えられがちだが、福島は広い地域によってその被害状況は全く異なる。須賀川市役所の方々のお話を伺って、福島に対してイメージが変わったという意見もあった。福島で生産されている農作物は危険だと考えていたルワンダの学生もおり、須賀川市における除染見学は、実際に自分の目で見て、現地の方々のお話を直接伺ったことで、基準値に則った農作物は安全であることがわかった。

一方、富岡市の視察では、人間が住んでいない様子を見て、改めて原発事故の恐ろしさを実感した。しかし、その途中で見た除染活動の風景は未来に希望を感じるものであったという意見も出た。

また、福島の人々に対してのイメージも変わった。企画前は福島の人々は悲しい出来事があった後で笑顔がないというイメージを持っていたが、「おたがいきまセンター」で実際に福島の方々と交流したことで、その認識は間違っており、悲しみを抱えながらも前向きに生きていることを知った。

3. 「私たちは福島のために何ができるだろうか」

私たちは学生で福島の現状を大きく変えることは難しい。しかし、この福島企画で実際に自分たちの目で見て肌で感じたことは、メディアを通して見る福島と異なるも

ので、“実際に”ということがどれほど大切かわかった。一つ、福島企画とルワンダの共通点を見出せた。日本でルワンダの話をする、どうしてもジェノサイドのイメージから、「ルワンダは危ない国なのでは？」と私たち日本の学生は周囲の人々から心配されることもしばしばである。このように間違った情報が行き交っており、正しい情報を人々に伝えることは大切だと話し合った。自分の足で現地に行くことは、正しい情報を得ることに繋がる。メディアに流されず、正しい情報を得ることはとても大切なことだと感じた。しかし、全世界の人々が私たちと同じように現地に足を運ぶことはできない。そのため、実際に行った人が正しい情報を広めることが大切である。私たちは個人レベルでも、家族や友人に伝えたいと話し合った。また、このような悲しい出来事が再び起こらないように教訓を得ることも大切である。日本だけではなく、他国にも広めたい。ルワンダは経済成長が盛んであるが、発展の裏にはこのような弊害があることを福島原発事故を教訓に知ってもらいたい。

感想

担当者

私は正直、福島に対してイメージがガラリと変わったわけではない。しかし、福島全体が何となく恐く、危ないのではないかという印象は変わった。地域によって状況は様々で一概に危ないと言ってはいけないことがわかった。私が最も印象に残っている瞬間がある。「おたがいさまセンター」で出会った男性の「富岡に帰れる日はいつかわからない。戻れるかさえもわからない。」

という言葉と悲しげな表情は忘れることができない。この福島企画を通して、このように悲しい現実を見ることになった。しかし、その反面、復興しようと前向きな福島の人々の姿も見ることができ、交流することもできた。実際に福島を見た私たち JRYC メンバーにできることは、福島に対して正しい認識を持ち、身近な人々に正しい情報を伝えていくことだと考える、この福島企画に参加したルワンダの学生にも帰国後、悪い福島のイメージではなく、良い福島をぜひ伝えてほしい。

コラム

教会にて

これは12月25日のことである。Merry Christmas! 朝から女子部屋ではクリスマスソングが流れている。私たち日本人にとっては、クリスマスは皆でワイワイガヤガヤ、食べて、飲んで、楽しく過ごすだけの日である。しかし、ルワンダンはクリスチャン。クリスマスは礼拝に行く日でもある。4人中3人はカトリック、1人はプロテスタント。予定していた教会のミサは午前中にあったようで間に合わなかった。急いで他のカトリック教会を探したが、郡山には一つしかカトリック教会はないようだった。他の教会を探したが、これまた、前日に礼拝は終わっているなど、なかなか見つからなかった。電話をかけているうちに、郡山バプテスト教会の英語を話せる牧師さんに出会った。とても優しい方で、聖書研究の予定だったのをクリスマス仕様の礼拝に予定を変えてくれた。そして、ホテルまで送り迎えしていただけることになった。宗派は4人とも違ったが、皆で行かせていただくことになった。

みんなが知っているクリスマスソングを歌い、親からいただいた名前のお話を伺った。ハーフの娘さんがピアノを弾いてくださり、とてもアットホームで楽しい素敵なクリスマス礼拝となった。礼拝の後には、ケーキとお茶、みかんまでいただいた。そこでルワンダの話や今回の招致の話など、話も盛り上がった。思いがけず、福島の方々と交流する素敵な時間になったのである。最後には、お土産にカレンダーやりんご、ピザをいただき、福島の方々の優しさを感じた。牧師さんも、アメリカ人の奥様も娘さん、お孫さん方も温かく、JRYCメンバーはまたとない素敵なクリスマスを過ごすことができた。



郡山バプテスト教会の牧師さん、ご家族様、大変お世話になりました。
ありがとうございました。

そして、品川さん、その間のクリスマスパーティーの準備ありがとうございました。

(安居)

第三章

学生会議 活動報告

学生会議 概要・議題	66
Vision2020	67
茶道とその精神	69
障がい者の貧困	71
AGACIRO Development Fund	73
GIRINKA 政策	75
少子高齢化	78
ルワンダにおける医療制度の構造について	80

学生会議 概要・議題

ABOUT STUDENT CONFERENCE

実施日

2014年1月2日、3日、4日、5日

活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれの興味のある分野や社会問題などからトピックを決めプレゼンテーションを行い、その後、そのトピックに関連したディスカッションや意見交換を行う。

活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なテーマについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

学生会議トピック（発表者）

日時	プレゼントピック	場所
1/2（木）	Vision2020 (Rosy)	ラノー・ドール
1/3（金）	茶道とその精神（安居）	
1/4（土）	障がい者の貧困（小坂）	日本商環境デザイン協会
	AGACIRO Development Fund (Nadine)	
	GIRINKA 政策 (Alexis)	
1/5（日）	少子高齢化（板谷）	ARC 事務所
	ルワンダにおける医療制度の構造について (Theophile)	

会場をご提供して下さった皆様、誠にありがとうございました。

VISION2020

担当者：Rosy BAGWANEZA

(訳出：丸茂思織)

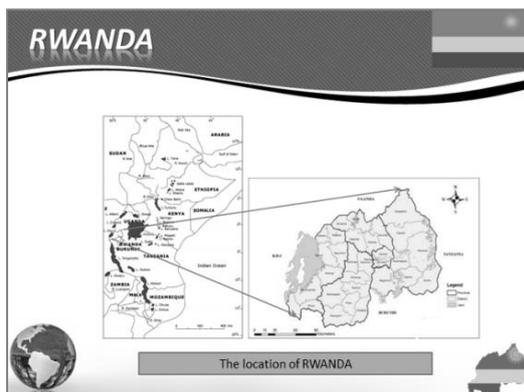
プレゼン要旨

Vision2020はルワンダ政府が主導となり実施している政策のひとつで、社会経済と文化発展において大きな役割を担っている。その主な目標はルワンダの経済を中所得国レベルにすることで、ルワンダ政府は貧困減少やインフラ整備などによってそれを成し遂げようと考えている。

プレゼン詳細

1. ルワンダとは

ルワンダ共和国は東アフリカに位置し、ウガンダ・タンザニア・ブルンジ・コンゴなどの国に囲まれている。その首都はキガリで、総人口はおよそ 1000 人。面積は 28,338km² (四国と同じくらいの大きさ) という小さな国である。またルワンダの発展を語るうえで、以下の事項は欠かすことができない。



①男女平等の国、ルワンダ

国会への女性の進出については、ルワンダは他の国のモデルになりうる。ルワンダでは政治において女性が男性と同じ発言力

を持っており、女性は社会において重要な役割を果たしている。ルワンダの急速な発展は女性と男性が同等の権利をもつことができる現状にあるとされている。

②天然資源

ルワンダの天然資源は、国民の暮らしや貧困減少に欠かせない重要なものである。天然資源を有効活用するために、ルワンダには Rwanda Natural Authority という組織が存在する。

③環境科学やテクノロジー、ICT

社会経済や環境の企業家開発は、ルワンダの経済を知識集約型経済へと導くとされる。特に、我々が支援する科学やテクノロジー教育、ITC 技術は、ルワンダが内陸国であり、様々な国に囲まれているという現状に対処する一助となる。

3. Vision2020 における今日のルワンダ

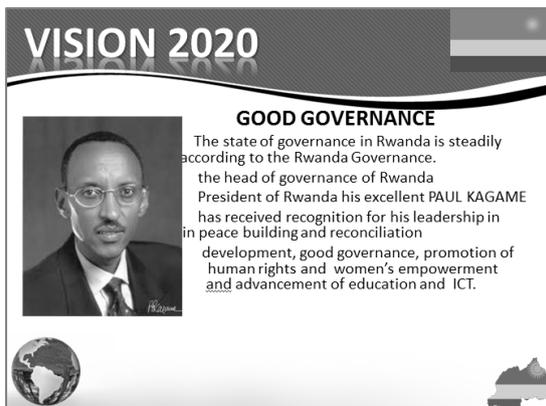
現在ルワンダは、Vision2020 が提起されるまでの国とは様相を異なるものとしており、Vision2020 を成し遂げるには、以下の事項を欠かすことができないとしている。

- ・良い政治
- ・教育促進
- ・インフラ計画と整備
- ・人種差別の撤回
- ・私営企業の発展

①良い政治

ルワンダの統治状況は現在ルワンダ政府により、次第に向上している。現在のルワンダの首相はポール・カガメ氏である。彼は平和構築・調停や経済発展、人権についてのプロモーションや教育・ICT の発展等の功績から、すばらしいリーダーシップを

認められている。



②教育促進

Vision2020はルワンダ教育セクターへの教育業績の統計や挑戦、および将来への指針を示しており、その明確かつ現実的な計画は、政府が政策を履行するための一助である。

③インフラ整備

Vision2020はインフラ整備の重要性を理解しており、運送手段の大幅なコスト減少を目指した道路や水輸送などのインフラ整備に投資している。

④人種差別の撤廃

ルワンダはさらなる友好関係を築くために、他国と協力している。例えばMushikiwabo 大臣は、日本と友好・協力関係を継続するために天皇誕生日をお祝いした。

⑤私営企業の発展

ルワンダ政府は私営企業の発展を社会や経済を動かすVision2020の6つの支柱のひとつと考えており、これは国民の安心の暮らしのために重要な役割を果たすとしている。天然資源の環境を破壊しない程度の使用を保障にしており、政策による環境への打撃を最小限に留めようと努めている。

3. 結論

ルワンダ政府の実施している Vision2020 は、ルワンダの発展において大きな役割を果たしているということができる。

質疑応答

Q. ルワンダは急速に発展しているが、一方税の無駄遣いが多いと聞いた。この状況についてどう思うか。

A. … (間)。…これは自然なロジカルなことであるので仕方がない。

Q. 最近急にいろんなことが変わった(首都の名前や大学のシステム)と聞いたが政府の政策が人々を困惑させているとは思わないか?

A. 我々は少々困惑している。こういった教育システムの変更はよくあることだが、あまり好ましいことではない。

Q. プレゼンのなかで男女差別がないと言っていたが、精神的にも男女差別がないという風に感じているのか。

A. 完全に 100%ではないが、70%程度はそう感じており、良い印象を受ける。男女平等のプロモーションも多く行われている。男性・女性に関係なく、その分野に関する知識を持っていれば同じ仕事をすることができる。

Q. 日本人女性は自分自身で子育てをしなければならぬが、ルワンダではベビーシッターが主流あると聞いたのだが。

A. ベビーシッター主流である。ルワンダの母親は3か月の休暇後、ベビーシッターに子育てを任せるケースが多い。

感想

参加者

ルワンダの Vision2020 については漠然と名前は聞いたことがあったものの、実際どのようなことを実施しているのか、恥ずかしながら全く知らなかった。したがって今回のプレゼンを機会に、多少なりともその内容を知ることができて良かったと思う。

ルワンダと比べ日本の方が依然として発展しているが、女性の社会進出等の点において、日本もルワンダから学べるのがたくさんあると感じた。

また、ルワンダメンバーが本プレゼンに限り、「匿名」でリフレクションシートを集めたことが印象的だった。彼ら曰はく「政治的なこと」だからだそう…うん。またルワンダメンバーが政府や政府の政策を、根拠も無しに過信し過ぎているのではないかと（あくまで個人的に）少々不安に思うところもあったが、非常に興味深いプレゼンであった。

茶道とその精神

担当者：安居綾香

プレゼン要旨

茶道とは、伝統的な日本の文化の一つである。美術や歴史、文学、花、料理、香りなど、たくさんの芸術要素を含んでいるために日本の総合芸術とも呼ばれている。お客様をもてなす茶道の精神は一期一会、そのおもてなしの心はどのようなものであるのかについて紹介した。また、プレゼンの最後には、簡単なパフォーマンスを行った。

プレゼン詳細

1. 茶道の概要

千利休(1522-1591)によって完成された日本の伝統文化の一つの総合芸術である。茶道とは、英語で **Japanese tea ceremony** と訳すが、人々が集まってわいわいがやがやと茶や菓子を楽しむ西欧などの tea party と異なる。茶を出すことにプラス、その裏にはたくさんの“おもてなし”が隠されている。まずは、茶道全体のおおまかなイメージを掴んでもらうために映像を流した。

2. 一期一会とは

一期一会とは、一生に一度だけの機会。どのような出会いも生涯に一回しかないと考えて、そのことに専念しましょうという意味である。茶道の場面では、どの茶会でも一生に一度のものと心得て、主客ともに誠意を尽くすべきことをいう。同じ客であっても、同じ菓子や同じ道具、花を同時に見ることはない。そのときの空間はそのと

き限りのものであるから、このひと時を大切にしましょうということである。

3. 現実世界の地位は無関係

厳密に言えば、現実の地位が関係してくることはある。しかし、一服の茶を前にしては現実世界における地位は無関係というのが茶道の神髄である。茶室の中の世界は異空間でまるでディズニーランドにいるようなものである。このプレゼンでは、茶室の「にじり口」と「刀置き」を例に説明した。「にじり口」は、頭を下げないと茶室には入ることができない仕組みになっている小さな入口のことである。どのような立場の人であっても、茶室に入るときには謙虚な心で入りましょうという意味が込められている。また、「刀置き」は、武士の時代、武士は命ともいえる刀も茶室には持ち込むことができなかった。現実で起こる生死は茶道には必要のないことで、皆で安心してただ茶を楽しみましょう、ということである。

4. 茶室におけるタブーな会話

茶室では、宗教、政治、お金、家族、生死の5つのトピックはタブーとされている。これも、現実世界のことは忘れましょう、また、他の客のことを配慮して暗黙のルールである。例えば、親を亡くしてしまった人が客にいる場合、家族についての話をしなれば、その人はその時間気まずく、嫌な思いをしてしまう。そのため、茶道で良いとされる話は、季節の話や未来の話である。例えば、「最近では寒い日が続きますね。京都では先週、雪が降りました。」などが挙げられる。一つの同じ空間で主客ともに楽

しめるように工夫されている。

パフォーマンス

プレゼン終了後、茶道の簡単なパフォーマンスを行った。点前は薄茶盆略点前。お盆と茶碗、茶筌、茶杓、棗、茶巾など、基本的な道具のみで、ポットを使って行った。そして、ルワンダの学生4人には、和菓子と抹茶に挑戦してもらった。

4人中1人はおいしいと抹茶を飲んでくれたが、3人の口にはそこまで美味しく感じなかったようである。味覚で日本の一部を少し知ってもらえたらどうか。

感想

発表者

時間上、準備していたプレゼンを全てできたわけではなかったが、日本の一伝統文化である茶道をルワンダの学生に簡単には紹介できたと思う。このことは私にとっても貴重な経験となった。私自身、7年間茶道の稽古を行ってきて、数多い細かいルールに嫌気がさすこともしばしばだ。しかし、そのルールの全ては「一期一会」のためで、日本人のおもてなしの精神が隠されていると考えている。茶や菓子を楽しむだけでなく、その裏にはたくさんの皆で空間を共にするための工夫が隠されていることを知ってもらえたならば、とてもうれしい。今度是可以ならば、本格的に和室でルワンダの学生と一席を共にしてみたいものである。

参加者

茶道は普段の地位を人々に気にさせなく、清らかな精神でとても良いものであると思

う。礼をして入らなければならない「にじり口」は、人間らしい行動だ。茶道は心を清める良い機会、皆がこのような機会に恵まれたら良いと思う。(Nadine)

日本の文化について、より興味を持った。特定の人だけでなく、たくさんの人々が茶道を知ることができたら良いと思う。

(Rosette)

時間の都合上、最後までプレゼンを聞くことができなく、知識を十分には得ることができなかったが、日本人が茶道を伝統文化として大切にしていることがわかった。日本メンバーも入れて、最後のパフォーマンスを楽しみたかった。(Theophile)

日本人は素晴らしい文化を持っていて、このことは良い相互理解に繋がる。日本の伝統文化について知る良い機会だった。ルワンダも日本人が知らないような、たくさんの伝統文化を持っているため、JRYC のルワンダ側も日本側にルワンダの文化を紹介できるようにこれからしたい。(Alex)



茶道のパフォーマンス

障がい者の貧困

担当者：小坂弘奈

プレゼン要旨

寿町企画で学んだように、日本には多くのホームレスの人がいる。そしてその中には障がいを持った人も少なくないのが現状であり、本プレゼンでは彼らがなぜ福祉の恩恵を受けられず路上生活に至ったのかを伝え、福祉のありかたや責任について議論したい。

プレゼン詳細

1. 障がいと貧困

重度の障がいを抱えた人や、一人暮らしをしている障がい者の月収は、障害基礎年金と福祉作業所などでの工賃を合わせて約7万円である。年金を受給しているからといって毎月7万円で生活することはとても満足とは言えない額だ。福祉作業所で一か月働いたとしても、もらえる給料は平均約5000円という小遣い程度である。また、家族と暮らしている場合でも、医療費や介護費など、抱える負担は大きいことから、障がい者と、障がい者を支える家族の経済的な負担は大きく、貧困状態にあることが多い。そうした家庭では、介護費を抑えるために福祉サービスの利用を控えたことが原因で、健康状態が悪化し、結果的に負担が大きくなってしまふ負のサイクルに陥ってしまう場合がある。

2. 障がいと路上生活

NPO「てのはし」による2009年の調査によると、路上生活者170人のうち、34%に知的障がいがあると発表され、同NPO

代表は「障がい軽く、なんとかがんばってきたひとが、雇用の悪化で路上生活に陥っている」と指摘した。また、彼らは知的障がいのためにコミュニケーション能力が低く、職場や学校でいじめにあいやすいことや、集団生活になじめないこと、生活が困難になった際に行政の窓口で自分の状況を説明できないことが原因で路上生活に陥ったと考えられる。

Aさん(41)の場合

高校卒業後、工場勤め

↓

職場になじめなく、職を転々とする日々

↓

貯金が底を突き、路上生活に

↓

ボランティア団体の炊き出しで相談

↓

病院での判断結果「知的・精神障がい」

↓

生活保護、グループホーム

貧困家庭では障がいが見落とされがちであり、地域や家族との縁が薄れ、福祉へとつないでくれる人が減ってしまう。問題はこのような、路上生活以前にある。

3. 日本の福祉制度

2006年より、日本は障害者保護法という新しい福祉制度を定めた。これは、福祉サービスの一元化やサービスの使用料金のうち1割を利用者が支払うこと、数ある施設事業を統合するといった制度だ。行政の財源確保がねらいであるこの法案には、障がい者と、支援団体から批判が相次いだ。法

案の問題点としては、障がいの重い人ほどサービス利用料金が高くなることや、障がいの一元化によって症状の種類ごとの必要な配慮への負担があげられる。多くの市民の反対により、2009年に当時の長妻厚生労働大臣は法案を変更することを発表し、当事者も含めた「障がい者制度改革推進会議」を行っている。

ディスカッション

テーマ：障がい者のサポートは誰が責任を持ち、行うべきか？

グループ A

家族、政府や地方行政、介護業者のすべてがその役割を担うべきである。障がい者の人権は守られるべきであり、家族のみが負担を背負うべきではない。

グループ B

行政などから十分な支援を受けることが望ましいが、障がいを持った人の家族が彼らをケアすることは、たとえ負担となっても当然だと思う。そのためには政府からの経済的なサポートが必須だ。

感想

発表者

すべての人の生きる権利は守られなければならないし、人権が、障がいの有無や貧しさから軽視されてしまうという世の中はあってはならない。障がい者と、その家族は既に金銭的な負担と、精神的な負担を背負っているため、行政による経済的な支援というのは当然のことであり、それ以上の支援をしなければならないと思う。障がい

者を支える家族が、愛情を持って介護することができなくなるほど負担を背負うということはあまりに悲しいが現実であり、私たちにとってこの現状を変えることが課題である。障害者保護法に反対する市民のあるひとりの、「弱者をどう扱うかで社会の品位が問われる」という言葉が非常に印象的であった。経済的に発展し、高層ビルが立ち並ぶ姿を遠くから見ると、日本は確かに発展した国だ。だが、ホームレスの人や、障がい者、貧しい人々に対する私たちや政府の対応を見ると、日本社会の品位がどれほどかわかる。

参加者

ルワンダの障がい者の多くはジェノサイドのトラウマが原因の精神障がいだ。日本の精神障がい者も何かトラウマがあるのかもしれないと思った。(Alex)



AGACIRO

Development Fund

発表者：Nadine KARINGANIRE

(訳出：谷川琴乃)

プレゼン要旨

AGACIRO Development Fund (アガチロ基金) とは、ルワンダの企業や国民からの寄付に基づくルワンダの開発基金である。外国からの援助の停止により開発資金不足に陥ったルワンダは 2012 年、開発の安定性の維持と経済の自律性の獲得を目的に、自国で資金をまかなう開発基金を設立した。

プレゼン詳細

ルワンダがアガチロ基金という開発基金を設立した背景には、外国からの援助の凍結があった。ルワンダ政府は隣国コンゴ民主共和国の反政府武装勢力「M23」を支援しているとして、国連をはじめ先進国から批判を受けている。このことで援助国である先進国がルワンダへの支援を打ち切ったため、ルワンダは自国で開発資金を捻出する必要に迫られたのである。ルワンダでは毎年 Umushyikirano (国民対話) という国民が参加する集会が開かれており、そこで国の方向性を決定する。2011 年に開かれた国民対話で、ルワンダの開発の安定性を維持するためにアガチロ基金のアイデアが提唱され、まず地方レベルで導入されたのち、2012 年 8 月に国レベルで施行された。アガチロ基金の公式な施行はポール・カガメ大統領によって行われ、基金の周知をはかるためにさまざまなイベントや宣伝が行

われた。

アガチロ基金の資金源はルワンダの企業や一般市民からの寄付金である。寄付は義務ではなく自由な意思に基づく。SMS、銀行、ウェブサイトを通じて寄付が可能であり、ルワンダ国外にいる人も含め、全てのルワンダ人が寄付を行うことができる。

どの分野に優先して予算を配分するかは、国民対話において国民の同意を得なければならない。また、アガチロ基金は経済省の管轄下に置かれることになっており、予算案は国民対話において報告される。そして将来的には独立化される予定であり、運営状態は第三者機関により監査され、監査結果は国民に公開される予定である。

質疑応答

Q.自分が3年前にルワンダを訪れた際、お金をねだってくる人を多く見たが、アガチロ基金が設立されてからルワンダ人は自助意識を持つようになったか？（品川）

A.外国からの援助が止まってからルワンダ人の意識は変化した。ルワンダのカガメ大統領が公の場で自助の理念を打ち出した影響が大きい。ただしルワンダは、外国から援助を拒否したいわけではない。援助資金の使い道まで先進国から指定されるのが嫌なのだ。自国のことは自国がよくわかっているのだから、お金の使い道は自分たちに決めさせてほしい。（Nadine）

問題は、先進国が途上国にお金を与えるのは、表向きは途上国の発展を助けるためだが、背後には先進国の政治的戦略が存在していることだ。これはいわば **indirect colonization**（間接的植民地支配）であり、アフリカはそれを拒否するために自立した

なのだ。ルワンダはこのような状況を克服するために頑張っているが、先進国にとっては敵に見えるかもしれない。（Alex）

Q.一般市民は誰がいくら寄付したかを確認できるか？（白川）

A.企業や銀行の寄付額は、アガチロ基金のホームページを見れば確認できるが、一般市民の寄付額は確認できない。（Nadine）

Q.企業にとって寄付が義務ではないのなら、企業にとって寄付することには何のメリットがあるのか？（谷川）

A.ルワンダの企業には愛国心があるから、寄付をすることで自国の発展に貢献できること自体が誇りなのだ。（Alex）

感想

参加者

私は、国に寄付すると企業にとって利益が減るのになぜ寄付するのかわからず質問したのだが、Alexが「愛国心」を持ち出して説明したのはなるほどと思った。考えてみれば、ルワンダ人学生と今までかかわってきて、日本人と比べてルワンダ人は愛国心が強いと感じていたからである。実際に、彼らは自分の国のことについて誇りを持って話すし、国の政策や大統領のこともほとんど批判しない。現に今回の海外援助凍結による歳出カットのせいで学費の負担が増えたそうだが、それについても文句を言うでもなく「自分の負担が国への貢献となっている」とポジティブなとらえ方をしていたことが印象的であった。このような愛国心は国民性から来ているのかもしれないし、発展途上国特有の空気からなのかもしれない

いし、外国から非難されたことで国民全体の団結力が高まったからかもしれない。

かといって愛国心だけで経済発展できるわけではない。企業も経営状態が苦しくなれば寄付をする余裕がなくなるのは予想されうる。現在ルワンダは経済発展が目覚しく、今後の成長が期待されている事実があるだけに、海外からの援助の凍結という問題にどう対処していくのかとても気になるところだ。アガチロ基金は今のところ順調に働いているそうだが、財源が自発的意思に基づいた寄付だけで成り立っていることを考えると、財源が継続的に確保できる保証はなく、これまで外国から受けていた莫大な額の援助の穴を埋めるのに十分だとは到底思えない。

コンゴの反政府武装勢力を支援しているという国際社会からの非難に対し、ルワンダ政府は「それは事実ではない」と一貫して否定している。しかし、援助凍結の要因がルワンダ政府の政治的行動である以上、経済発展を目指すルワンダはこの問題に今後も付き合わざるをえない。この問題におけるルワンダ政府の国際社会への対応が、今後のルワンダの政治体制や民主化に大きな影響を与えるだろう。これからの動向に注目したいと思う。(谷川)



GIRINKA 政策

一貧しい家庭に一頭の牛を一

担当者：Alexis RWEMA

(訳出：島村志保子)

プレゼン要旨

ルワンダにはまだまだ貧しい家庭が多くある。その家庭を救済するために牛を各家庭に送る政策がある。これはある程度成功を収めているのだが、その政策の概要と国民の声を紹介する。

プレゼン詳細

1. Girinka (ギリンカ) 政策とは？

ルワンダの貧しい家庭に一頭の牛を贈るプログラムである。この政策にはルワンダ政府だけでなく現地 NGO や国際機関など多くの機関が関わっている。

2. 設立背景

1994年ジェノサイド終息後、ルワンダ国民は以前に増して貧困に窮した。特に子どもたちのタンパク質等の栄養不足は深刻だったのだが、とても牛乳など手に入る状況ではなかった。ルワンダ政府はこの貧困状況を打開するための政策として、2006年にギリンカ政策を発足させた。

3. 成果

シンプルな活動なのだが、主要産業が農業であるルワンダでは貧困解決において大きな成果を得ている。

・成功例 1：ジョゼフさん一家

2007年にギリンカ政策により牛を贈ら

れた。牛乳の販売によって収入が増加したことにより、子どもの教育費を支払うことができ、娘の一人は大学をでて教師になった。現在は健康保険の支払いや新たな土地の購入などが可能となり、近所の子どもにミルクを分け与える余裕も生まれた。

・成功例 2：ロザリーさん一家

ロザリーさんは7人の子どもを一人で育てる母親である。ジョゼフさん同様2007年に牛を受け取り、今は5頭の牛を飼育している。増加した収入により、ローンを組んで子どもを大学まで卒業させたり、医療保険の支払い、2人の娘の結婚資金を準備することなどが可能になった。現在は一家で暮らせる、新しい近代的な家の購入を目指して農業や酪農に励んでいる。

4. 展望

既に172,755世帯にこの政策が適用された。2015年までには257,000世帯、2017年には350,000世帯への給付を目指す。

質疑応答

Q. どんな家庭に給付されるのか？優先順位はあるのか？（岩垣）

A. もっとも貧しい家庭から。近所の人も参加した会議にて、どの人を優先すべきか話し合い、最も必要性の高い家庭から順に牛の給付がなされる。

Q. 自己申告制か？（小坂）

A. 政府が村を回ってくるので、そのときに申告する。

Q. 横領されたりしないのか？（小坂）

A. 過去には地元のリーダーが牛を勝手に自分のものにしてしまう事件があったが、

彼は逮捕され、それ以来そういう事件の報告はない。

Q. 牛はどこから連れてくるのか？（谷川）

A. ルワンダ政府が調達することもあるし、イギリスなどからの協力を得て、牛を無償で譲り受けることもある。

Q. 牛が病気になったりしたらどうするのか？（岩垣）

A. そういうことは起きない。健康的な牛が選ばれているし、牛の世話の仕方を政府は教育する仕組みも整えられている。

Q. 雌牛だけ支給しても、子牛は生まれない。どうするのか？（小坂）

A. もしその家庭に牡牛がいなければ、ビジネスなどの次元に移り、雌牛の懐妊を人口的に行うなどの対策が取られる。

Q. 動物病院はあるか？（白川）

A. セクターごとに存在する。定期的に牛の健康状況をチェックし、牛が深刻な病気になることを防いでいる。また貧しい家庭には高い診察料を払わずに済むような仕組みがあるので、牛が病気にかかったために家計に深刻な打撃を与えるということはない。

Q. なぜ牛なのか？鶏なら政府はもっと安くたくさんの人に給付できるのに。（品川）

A. 文化的な理由も絡む。ルワンダが王国であった頃の話（王の病気が牛乳によって治り、さらに王といとこの仲が牛を贈るという行為によって修繕された）の影響で牛は富や愛、融合の象徴としてルワンダでは大事にされているから。補足ギリンガ政策は

ジェノサイド後の貧困を打開するものであり、同時に、国民同士の和解を狙う意図もあって、文化的にも融和の意味をもつ牛を大統領は選出した。）

ディスカッション

以下二つの議題を三つの班に分かれて議論した。なお一班毎の構成人数は 4,5 人である。

■議題 1

WW2 後に日本はどうして急激な経済発展を遂げることができたのか？

- 1 班：WW2 以前から日本はある程度の技術力があった。その高い技術力のもと作られた兵器の輸出により、戦後の日本経済は潤うこととなった。（戦争特需）
- 2 班：民主化が大きな影響力をもった。憲法改正などにより自由競争が促進されたことで高い経済成長率が見られた。
- 3 班：アメリカなどに国防を加担してもらったことにより、多くの国の予算を経済発展に回すことができたから。

■議題 2

日本ルワンダ学生会議がアフリカの貧困問題に貢献するには何ができるか？

- 1 班：良い教育が貧困を削減する唯一の手段である。
- 2 班：教育が大切。高等教育も含めた教育の無償化が重要である。治安の維持も大事である。
- 3 班：直接的な対策ではないかもしれないが、ルワンダについての情報を日本において広めることが長い目でみてアフリカの貧困解決に貢献すると考える。例えばルワンダの企業が資本や観光客

を集めるにあたって、日本が画一的にもつアフリカに対するマイナスイメージ（貧困・紛争）は障壁となる。その単一化されたイメージを取り壊すことでルワンダ人が自らの力で資本を引き込むための助けになると思う。

感想

参加者

この政策はルワンダの国の大きさを活かした地元密着の政策である。ギリンカ政策はルワンダの伝統を尊重した上で、牛を贈るというプログラムを作成しているという点では評価されると言える。昔はただ単に物（牛というそれ自体が資産となってしまうもの）を贈るのでは、いつまでたってもルワンダの貧困層の自ら現状を脱却しようとする姿勢を削ぐ結果をもたらすだけになるのではないかと思ったが、このプレゼンをきっかけにギリンカについて深く調べていくと、歴史的にも尊重されている牛を贈呈の対象とすることで、ルワンダ人同士の融和の象徴とする等のジェノサイドのアフターケアの側面を兼ね備えていることは重要な視点だと思った。他国の政策を見る際には歴史などに背景を深く学ばなければ、その客観的な評価はできないと感じた。ただ、ギリンカに限らずなのだが、ルワンダにおいて政策は欠点のない完璧なもののみなされ、成功例ばかりが並べられていることが非常に気になった。RPF（現与党）が打ち出す政策だからという理由でそれに正当性が担保されるのは、長期的な視点から見ても好ましい状況ではないのではと思った。

ルワンダ側にとっては、日本が戦後どう

やって急激な発展をしたのかというのは、自国の発展を見据える上でも大きな関心事のようだ。他国の学生から問われると、日本は長い時間をかけて着々と発展してきたのだと再認すると共に、国際情勢が求めているものに応じて辛抱強く挑戦していった日本の社会の力を実感した。上からルワンダにこうして欲しいとは思わないが、自国の発展を望むだけでなく、世界の需要を分析し、前向きに世界に挑んでほしいと思った。(島村)

ギリカ政策はルワンダの文化に根付いているという観点からも興味深いと思った。ルワンダに行った時に、各農家では牛はそれぞれ「誰かが誰かにチャリティーとして譲渡しているもの」と呼ばれていて、興味を抱いたのを今でも覚えている。日本ルワンダ学生会議として、ルワンダやアフリカの貧困に私たちができることは情報を広めることである。観光に関する情報にまずフォーカスし、多くの情報をルワンダ側のメンバーと協力して集め、専用のページを作成し、日本人に広められればと思う。(品川)

少子化問題について

担当者：板谷美沙

プレゼン要旨

日本ではいま、少子化が大きな問題となっており、それに対する様々な政策などが取られているが、この問題は主に若い世代への大きな負担となることは間違いない。そのため、今の状況とその原因を提示した。またルワンダとの比較をつけルワンダ人にも関心をもてるようにした。

【動機】

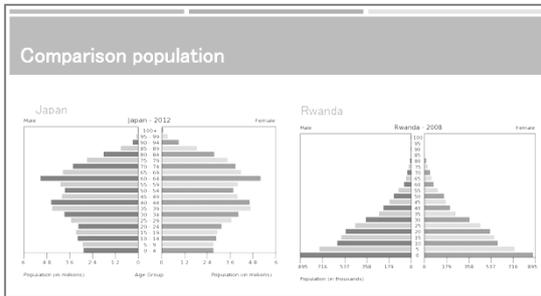
大学にて、少子化の問題を取り扱う授業を受け、日本はまだ取り返しのつかないところまではいっておらず、今からしっかり対策をすれば解決できる、と先生が言っており、なんでいま取られている政策はうまく機能していないのか、本当に必要なことは何だろうか。と考えるようになり、多くの人の意見を聞いてみたい。と思ったことからこれをプレゼンすることにした。また、ルワンダ人にも日本の抱える問題についてどう感じるのか、どんな意見を持つのか気になったからである。

プレゼン詳細

1. 今の日本の現状について

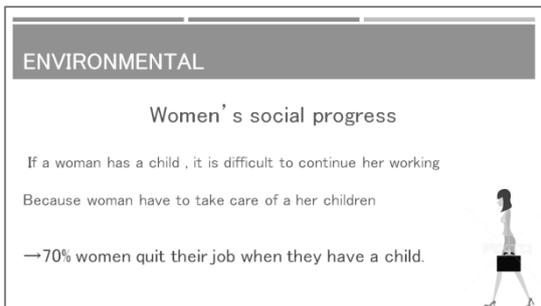
日本の出生率は人口を維持するために必要な 2.03% を大きく下回っており人口を維持するのが難しい状況にあることや、昔の年齢別の人口ピラミッドと今の年齢別の人口を比較しどのように変化していったのかなどを提示した。またルワンダとの比較を出すことにより日本ばかりではなく、ルワ

ンダでも十分に起こり得ることだ。ということを示した。



2. テーマ背景

現在日本の出生率は年々減少しており、一方で若者への不安感は日に日に増している。なによりこの問題による年金への不信感が顕著にみられる。お金を出してもその分は返ってこないのではないかと、ならば年金を払うよりも違うものに投資したほうがよいのではないかと。という意見が目立つようになってきた。また、不景気により経済的な理由で結婚や出産を避けるケースが非常に増えてきている。



ディスカッション

Q.出生率の低下をどう食い止めるか。

- ・母親が仕事を続けられるようにベビーシッターなどの制度を整えるようにする。
- ・子供に対する手当をあげる。
- ・いい対策をしてもらうには若者の投票率をあげるべき

Q.少子化対策への公的資金を増やすか否か。

- ・賛成

→経済的な要因が原因の第1位にあげられているのだから増やすべきだ

→2人目からの交付金を出す。

→ベビーシッターなどの経費を軽くする

感想

発表者

日本の問題を共有し、ルワンダ人にも身近に起こりうることだというのが伝えられてよかった。そして、面白いと感じたのはルワンダの女性が働くことに関してのサポートがしっかりしているという話が聞けたりして面白かった。このように互いの問題や違いを話すことにより、相互理解を深めることができたと思うし、いいところを互いに吸収していきたいと感じた。

参加者

女性が働きにくいというのは良くないと思う。私たちの国では女性の社会進出がかなり進んでいるためそこを日本人は改善していくべきだと感じた。

(Nadine)

経済が発展することによって少子化が起こるのは多少は仕方ないことであると思うが、対策をしなければ若い人たちに大きな負担となることがわかった。やはり政府にしっかりとした政策をとってもらうためには自ら投票する人たちのマニフェストをしっかりとみることが大事だと感じた。

ルワンダにおける医療

制度の構造について

担当者：NAMA HUNGU Theophile

(訳出：片岡美月)

プレゼン要旨

ルワンダの医療システムの概要および HIV/AIDS の現状とその取り組みを紹介。

プレゼン詳細

1. ルワンダ医療システムについて

1985 年から、ルワンダの医療システムは脱中心化と地域レベルでの医療の充実に注力してきた。1994 年のジェノサイドによって、人材、設備、機器などが失われ、医療制度は一時機能不全に陥った。だが新政府は 1995 年 2 月から医療制度の新制度をうちたて、復興に取り組んだ。2000 年からは、脱中心化をさらに推し進める段階へと移った。地域の医療システムは、その地域住民の健康、医療サービスや設備において責任を負う。

2. ルワンダ医療システムのプロバイダーについて

ルワンダの医療システムは、国立医療機関、私立医療機関、伝統的ヒーラーによって担われている。国立医療機関は、中央、中間、地域の 3 つのレベルに分けられる。

地域住民は、まず一番下位のレベルの医療機関へ行き、病状に応じて中間へと移送される。中間レベルでも不十分な場合は、中央へと移る。医療設備、規模の充実度は中央が一番高く、地域が一番低い。

私立医療機関はこのシステムからは完全に独立しているが、医療費は高額となる。また、ルワンダでは、薬草などを用いる伝統的な医療法も根強い。

3. ルワンダの HIV/AIDS について

ルワンダは世界で最も HIV/AIDS に影響を受けている 10 カ国のうちの 1 つである。その最も大きな原因となったのが、1994 年のジェノサイドである。当時、HIV 感染者によるレイプがジェノサイドの手段の 1 つとして用いられたためである。その結果として、特に郊外で HIV/AIDS 感染者が急激に増加した。

1980 年代半ばには 1.3% だったが、1990 年代後半には 11% になっていた。全体で見ると、1100 万人の人口のうち、40 万人が HIV/AIDS に陽性である。そのうちの 50% が女性であり、13% が 15 歳以下の子供である。

質疑応答

Q. 交通事故など緊急性の高い場合も、公立の医療機関のシステムに沿って、下位レベルから移送されるのか。

A. その場合は例外である。また、救急車は中央レベルの病院しかもっていないのだが、交通事故の場合、ルワンダでは市外に警官が立っているため、彼らが病院まで移送することもある。

Q. ルワンダの医療システムに問題点や課題はあるか。

A. 医者不足が深刻である。そもそも、医者を育てる場が限られている。ルワンダでは医学部がある大学が 1 つしかない上に、学

生のインターンを受け入れることができる病院も、中央レベルの1つだけである。

ディスカッション

日本は先進国であり、その医療システムはルワンダの手本にもなる可能性があるが、日本にはどのような医療システムがあるのか。

- ・日本にはルワンダのような公立医療機関システムはない。また、国民医療保険のような制度がある。ルワンダにももちろん同様の制度はあるが、私立の医療機関では使用することができない。

- ・医療システムではないが、日本の病院の特色として、お年寄りの憩いの場と化している現状もある。少子高齢化社会の象徴的な一場面であるし、また高齢者への医療制度の充実を表すものでもあるだろう。

- ・ルワンダでは伝統的なヒーラーが活躍していると聞いたが、日本におけるそのような人々は、西洋化、近代化の課程などで殆ど失われてしまった。だが、昨今は、漢方の保険適用など、東洋医学を見直す動きも出ている。

感想

参加者

医療機関システム1つ取っても、その国の特色が出るのだと実感した。日本では前述のように高齢化の側面が現れてくる。交通事故の多いルワンダでは、警官が被害者を輸送する手段が発達している。だが医者不足など、共通する問題も見受けられた。日本は医者を育てる環境もルワンダに比べてはるかに整っているのにもかかわらず、

なぜ同じような問題を抱えているのか。無論患者の絶対数の違いなどもあるだろうが、同時に、自分の日本の医療制度や問題点に関する知識の欠如を思い知った。

コラム

テオフィー Theophileのこぶ

「脇の下が痛いんだ。」

彼の脇の下を見ると、そこにはピンポン玉ほどのこぶができていた。

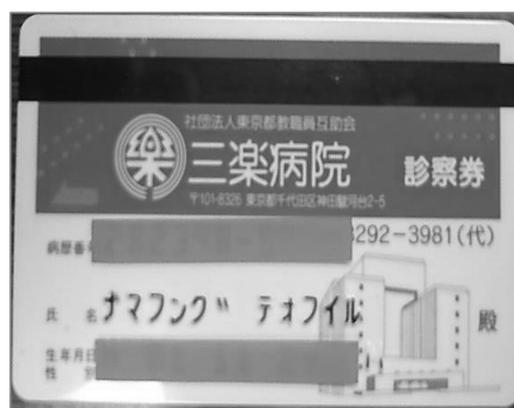
その日は1月4日であり、かつ土曜日。開いている病院はあるのだろうか…という不安とともに電話をかけまくった。そんな中、本人は美味しそうにスパゲティを頬張っているじゃないか。「なんて能天気なやつなんだ！」と日本人メンバーはあきれつつも笑みがこぼれた。



シェリーこと品川君と共に Theophile を近くの病院に連れて行くと、こぶの正式名称は「粉瘤」と呼ばれるもので、要はでっかいニキビができていたのだ。実は、これよりも小さい同じようなこぶは彼自身よくできるらしく、いつもはナイフで切った後に薬を飲んで治療するのがルワンダ流らしい。(ちなみに日本では、その部分を切って膿をだし、詰め物をして薬を飲むというのが治療法であり、通院するのが普通。)

薬学部である彼は、処方された薬の名前を知ることができて、満足したような顔をしていた。思わず「今回のこぶは、あなたの学問に活かすことができたんじゃない？ヨカッタね！」と言ってしまった。

話が少しそれるが、彼の口癖は「グッドラック！」(キニヤルワンダでは「アマヒールウェ マサ」という)であり、何でもかんでも「アマヒールウェ マサ！」と言うのが好きであった。しかしこの招致で最もこの言葉を言うてあげるのにふさわしかったのは、彼であろう。彼が病院に行く時、みな「アマヒールウェ マサ」と声をかけていた。



(白川)

第四章

参加者感想

板谷美沙	日本大学経済学部 1年	84
岩垣梨花	早稲田大学人間科学部 2年	84
大山剛弘	早稲田大学創造理工学研究科 建設工学専攻修士 2年	86
片岡美月	早稲田大学文化構想学部 4年	90
小池志歩	群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部 3年	91
小坂弘奈	フェリス女学院大学国際交流学部 3年	92
品川正之介	早稲田大学教育学部社会科社会科学専修 4年	93
島村志保子	日本大学法学部 2年	96
白川千尋	専修大学法学部 3年	98
谷川琴乃	早稲田大学政治経済学部 3年	101
藤本丈史	早稲田大学政治経済学部 4年	103
星野真希	学習院女子大学国際文化交流学部 3年	105
松本万里子	立命館大学経済学部 3年	107
丸茂思織	日本大学法学部 2年	108
宮本寛紀	横浜市立大学国際総合科学部 4年	110
安居綾香	同志社大学グローバル地域文化学部 1年	111
Alexis RWEMA	ルワンダ国立大学農学部	113
Nadine KARINGANIRE	ルワンダ国立大学社会学部	115
Theophile NAMAHUNGU	ルワンダ国立大学薬学部	116
Rosette BAGWANEZA	ルワンダ国立大学経済経営学部	117

「相互理解とは」

日本大学経済学部 1年

板谷美沙



この団体に入って初めての招致活動ということもあり、ルワンダのメンバーと会ったらすごく緊張して何をしゃべっていいかわからず戸惑ってばかりで大変でした。しかし、福島で同じ部屋で過ごし少しずつしゃべれるようになっていったのがすごくうれしくなったのを覚えています。そしてなによりもこの第10回本会議は、相互理解について考える場となったと思います。私は招

致が開催されるまで相互理解について深く考えたりすることはありませんでした。しかし、JRYCの将来性について考える時に相互理解についてのメンバーみんながどう感じているのか、どうして相互理解が必要とされているのかをみんなで話し合うことにより、私も相互理解について考えるようになりました。やはりなにをするにも互いの文化や習慣などを知らないと何かを成し遂げることは難しく、なくてはならないものだと考えるようになり、ではそのためになにをすべきかなどが見えてきた第10回本会議になったように感じます。まだまだ未熟で先輩たちに任せきりなことも多かったのですが、私も先輩方のようにここでやりたいことを成し遂げられるように努力していきたいと思いました。そしてなにより、ルワンダのみんなと過ごすことができたこの招致は非常に楽しくとてもいい経験になりました。ありがとうございました。

「見えなかったもの・見えたもの」

早稲田大学人間科学部 2年

岩垣梨花

日本ルワンダ学生会議のメンバーとして経験する2回目の招致。第10回本会議は私にとって非常に印象的な招致活動となった。それは大きく分けて3点挙げられる。一点目は昨年度・第8回とはうって変わった自身の立ち位置である。先輩からの指示を仰ぎ、作業をこなすのではなく、自らが指揮をとって企画の運営を行っていかねばならなかった。元々、何かの上に立つ性格ではないのだが、加えて今回は福島企画メンバーの相次ぐ離脱、留学準備・ゼミ専攻・他団体活動の忙しさなどが重なり、その苦しさから一時期、全ての

タスクを放り出してしまうという何とも身勝手なこともしてしまった。その浅はかさにやっと気づいたのは12月。今年じゃるわ（日本ルワンダ学生会議）を卒業する大好きな先輩の一言からだ。それまでの自分は自分のことしか見えてないことを痛感すると、不思議と周りでもむしゃらに頑張っている人たちの姿が見えた。そこからはこの人たちのために頑張りたいという気持ちに心を入れ替え、自分自身の企画である「おだがいさま企画」や本会議での討論などに腐心した。さながら底辺からの巻き返しと言ったところだが、なんとか自身の企画までにはその巻き返しが間に合い、最終的には有意義な企画を行うことができたと感じている。



二点目はルワンダ人との交流である。招致活動中、ルワンダ女子メンバー（以下ルワ女）は私の家に宿泊する機会が多く、そのため必然的にルワ女と過ごす時間も長かった。これは昨年度の招致では考えられなかったことである。昨年度の招致では、英語が話せないことを理由に、先輩の影に隠れて当たり障りのない会話を少しする程度だった。2人きりなら余計に何を話せばいいのか分からなくなり、気まずく感じていた。ところが今回はルワ女の一人、ナディーンとは2人で過ごす時間も長く、その間に色々な話をした。家族のこと、恋人のこと（私は話すネタが無かったので聞き役に徹していたが・・・）、学校での生活、さらには宗教観についても。つたない英語ながらもなんとか意思疎通を楽しむことはできた。特に宗教観については最後まで結論が得られず、沢山の質問を投げかけ・投げかけられながら続いた。他にも今年はルワンダ人と臆することなく話すことができ、微々たるものだが昨年度からのステップアップも感じられた。そのようにコミュニケーションが格段にできるようになったことも今回の新しいJRYCの一歩に貢献したのではないかと思う。

三点目、これは主に招致が終わってから考えさせられたことである。福島企画、ある些細なアクシデントから代表S氏と喧嘩になったことがあった。私もS氏も互いに腹を立てたが、時間をおいて冷静になってからお互いの言い分を理解し、すぐに仲直りできた。この事件（詳細はページの都合上、割愛させていただく）は笑い話として後日じゃるわOBに話したことがあったのだが、その会話の中で非常に印象に残ることを言われた。「その喧嘩はお前が悪いよ。とっさの判断を迫られた時に、代表の中でお前が信用できる立ち位置にいなかったのが悪い。」というものだった。この言葉で気づいたことは、また自分は自分のことばかりを考えて行動していた、ということだった。誰かに信用されること、そして一緒に仕事をしたいと思えるような人間になれなかったことの悔しさを感じた。と、同時に何か一つの企画をやり遂げるとき、企画の中身を精査することは勿論だが、しかしそれ以上に一緒に活動する仲間同士の信頼感を作り上げることが企画成功への大事なカギにな

ると分かった。今回の福島企画においても、自分自身の事で手いっぱいになり、企画を行う者同士の信頼感を作り上げるというところにまで頭が回っていなかったことを痛感した。OBからの一言はこのような自分に気づききっかけとなった。

総じて10回本会議では自分のダメな部分を痛感させられる会議となったが、同時に昨年とは違った収穫の多い会議ともなった。日本ルワンダ学生会議の強みである「ルワンダを通して自分を見つめる」ことが出来た。またルワンダと一緒に過ごした時間はとても印象深い。ゆく年くる年を観ながら一緒に年越ししたこと、富岡町の方々と一つの輪になって踊ったこと、JRYC 独立闘争で何時間も対立したこと、ナディーンの涙、分かり合えたことの喜び……。 「相互理解」の重みを感じる本会議であったこと、その本会議を一緒に作り上げられて本当によかったと思う。この経験を活かして、次はルワンダ渡航に参加したい。

「あれから5年」

早稲田大学創造理工学研究科 建設工学専攻 修士2年
大山剛弘

僕が日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）に入会を決めたのは、確か2009年2月の初めだったと思う。全期間にコミットしていた訳では無いが、所属期間で言えば丸々5年間と歴代メンバーの中でも最もかかわりは長かったので、色々な人の行き来や事件にも遭遇してきた。今回の第10回本会議には（心から！）残念ながら関わることが出来なかったのだが、JRYC 卒業を前にせつかく文章を書く機会を与えられたので、僭越ながら個人的な経験も織り交ぜてこれまでの事を振り返ってみようかと思う。それを踏まえて、私にとっての JRYC とは何であったのか、その結論を最後に書きたい。という事で、個人的かつ内輪な内容なので、第10回についての感想を読みたいであろう多くの方々には、読み飛ばして頂ければ幸いである。

唐突だが、2008年に僕は期せずして、大学入学と同時に所謂体育会系な学生寮で暮らすことになった。先輩とすれ違うたびに90°のお辞儀と共に大声での「こんにちは！」「失礼します！」の挨拶、夜中の2時に「腹へった」と先輩が言えば数km離れた弁当屋に走って買出しに行かせられる等々、まあここでは書けないような事も沢山あったが、とにかく僕はそんな所に住んでいた。高校まで陸上部に所属はしていたものの、今考えれば風通しのよいフラットな環境で生きてきたので、先に書いた寮にはほとんど嫌気が差しつつも、負けずぎらいな性分から、こんな環境でも自分らしく暮らしてやる！と、これまた集合住宅では非常に迷惑なことに、アンプを全開にしてギターをかき鳴らしていた。一方で、理系学部に入学したこともあり、一年次には週5日間9時から18時までモノクロームなキャン

パス（興味のある方はぜひ一度、早稲田大学・西早稲田キャンパスへ！）でみっちり講義、コンクリートを練っては破壊しの地道な実験、毎週 A4×20～30 枚の今時手書きレポート、華のキャンパスライフへの憧れはこちらでもあえなく瓦解。※1

そんな中、ふと流し読んでいた大学のサイトに出てきた「ルワンダ」の文字に、どこか閉塞感を感じて大学生活をおくっていた僕は、心惹かれて入会することになる。そこでメスティックな僕が覚えた衝撃といたら！年齢も背景も異なるメンバーが、人権問題・国際政治から下ネタに至るまで、闊達に激論を交わしている。国籍的な面でも多彩で、当時まだ入学前のイギリス高校出身のまっきん、大手企業勤務の（すぐ退社されましたが笑、現在は某航空会社の国際 CA、だったはずの）在日コリアンのスナさん、人権活動に勤しむフィリピン出身のクリスティーナ、パイナップル風の頭を振りかざすマリ王国でジェンベの称号を得た Sugee さん、高校を留年してまで単身フランスに乗込み語学を習得してきたバイタリティの塊・ころすけ、他多数、「留学」と聞くだけでもインターナショナル！と思っていた僕には、まさに目からウロコ、毎週のミーティングやその後の飲み会が新鮮で楽しくて仕方が無かった。

その後すぐ、自身初の海外経験である 2009 年夏のルワンダ渡航（第 2 回本会議）へ参加し、自分の英語力の無さや文化の違いに改めて打ちひしがれつつも（千田さんや Marine, Calliope にはよく励まされていた。今では考えられないが、当時 Maurice とは喧嘩ムードだったなあ笑）、やっぱり背景を越えてズバズバ議論し、国連にも大使館にもアポをとる為ならガンガン交渉する周りのメンバーに大いに触発される。自分も何かしなければと、拙い英語でも通じるまで話したり、言葉がだめなら音楽で！と道端で弾き語りをして、集ってきた人たちとは、向こうはキニヤルワンダ語、僕は日本語で話したりした。不思議なことにその時の会話は意外と通じていた気がする。ある日、ギターに合わせてラップを仕掛けてきた Simple Family という現地の Hip-Hop グループに貰った、木彫りのルワンダ地図に全員分のサインが書かれたギフトは、一生の宝物だ。彼らの「難しいことは考えずに、人類はみな Family！」という言葉には、ずいぶん勇気付けられた。

その次は、2009 年年末～2010 年年始にかけての、初のルワンダ人学生・日本招致（第 3 回本会議）。京都・広島・鳥取・東京と日本各地をめぐり、平和とはなにかといった議論から、乾燥地農業、寺院での仏教講座、そしてルワンダダンスのコンサートと、盛りだくさんな内容だった。予算上制約で移動はすべて夜行バス、食文化の違いなど苦労もあったが、今となれば良い思い出である（楽しすぎて、京都で自らゲストハウスのクリバに皆を誘ったにも関わらず、ひどく酔いつぶれてルワンダ人に部屋まで担がれていった事も...笑）。その後も団体では、第 4 回本会議（ルワンダ）、第 5 回本会議（大阪・名古屋・広島・東京）、第 6 回本会議（ルワンダ）、第 7 回本会議（長崎・大阪・東京）、第 8 回本会議（岩手・栃木・東京）、第 9 回本会議（ルワンダ）、そして第 10 回本会議（福島・横浜・鎌倉・東京）と活動実績は積み重なり、すべてに参加できたわけではないが、この中で少しずつ語学アレルギーを克服し、互いの異なる背景を踏まえて議論をしながら、JRYC に

参加する以前には無いベクトルで成長できた様に思う。

一方でその後、良くも悪くも JRJC において日本-ルワンダ間の関係が当たり前の存在になってくると、これまで表面化してこなかった互いのエゴから大論争も発生する。※2 何とんでも代表的イシューは、団体の意義をどこに見出すか、という事だろう。国際交流の場だ、NPO 的な社会貢献色を押し出すべきだ、否ルワンダダンスを押し出して文化的な面からアピールするべきだ、など色々な議論がなされてきた。真剣なだけに議論は白熱し、短期間で解決は難しく、悩み苦しんだメンバーも沢山見てきた。僕が団体代表と責任者を務めた日本招致企画・第 5 回本会議でも、自らのオーガナイズが至らなかつた事もあり、最終日まで揉めに揉めて、空港でも涙ながらの大激論に発展した事は、昨日の事のように覚えている。今回の本会議では、白川代表を中心に多くのメンバーの尽力と、これまでの議論の積み重ねから、この件について一定のコンセンサスは得られたようで何よりだが、学生団体の人の移ろいの速さを考えれば、またこうした議論が沸き起こるのは時間の問題だ。

では、どうすればよいか。僕はあえて、そのままでいいと言いたい。先にあげたような団体意義の主張はどれも正しいし、そうした議論が起こること自体、団体についてメンバーが真剣に考えている現れだ。団体理念にある「相互理解」は全然綺麗ごとではなく、泥臭くて厄介で、でもそれが無くては、存続していけないことを学べる。そしてこの事は、世界の諸問題を考える上でも、応用性がある。国内外問わず多くの方は、互いに分かり合えていないし、歴史上異なる種類の人間が顔を合わせた後の争いは、枚挙にいとまが無い。そして現代は、そこから逃げられないほど、各国の経済・政治は光に影に密接に結びついている。例えば、日本で携帯電話や PC を使う以上、私たちはアフリカのレアアースの恩恵に与っている。厄介でも、相互理解から逃げないこと、現実的な言い方をすればベターな妥協点を見つけることは、島国日本で育ってきた僕や多くの人々にとって必要な素養だと思う。第 8 回では東日本大震災の被災地・岩手県、今回の第 10 回では福島県で、日本の暗部といってもいい側面を議論したが、そのいずれでも参加メンバーが一応の理解を達成できるのだ。難しそうなテーマでも議論を恐れてはいけないと、今回改めて実感させられた。

長々と書いてしまったが、結論に移ろう。以上に書いた経験を踏まえ、僕にとっての JRJC とは、「日本とルワンダという背景のギャップを乗り越えた理解を通じて、国際感覚を養い、世界へ羽ばたく為のプラットフォーム」である。実際、既に多くの OBOG また関係者が社会に出て、JRJC で発揮した「知的なタフさ」や「議論に対する真摯さ」を発揮しながら、それぞれの信念を持って世界を相手に活躍している。これからもそんな自由闊達な風土を持つ、JRJC の益々の発展と後輩の大学生活の充実を願い、応援している。



Bangladeshはダッカにて、偶然居合わせた筆者（中央）と久保（右）、元顧問の小峯先生（左）。
こんな偶然にもあまり違和感が無い。2013年9月。

補足：

※1 ただしこうした土木系の専攻自体には元々興味があり、修論を書き終えた今でも研究は楽しく、来る4月から勤める予定の場所でも恐らく同分野に関わるのでは、という事で、これはこれでとても充実した大学生活でした。私立理系下宿という条件にも関わらず東京の生活を支援してくれた両親には、感謝しかありません。

※2 ところで、こうした問題は日本-ルワンダという対立軸よりも、個人個人の意識の集合体として考えた方が良いと今では思っている。たとえば「ルワンダ人はそう考えるよね」、「Japanese regard JRYC as...」といった考え方はステレオタイプ的で、相互理解を考える上で危険だ。一方で、明らかに国毎に共通する背景から来る、考え方の傾向・割合は、もちろんある。ステレオタイプは危険だけれども、全員を個別に考えると際限が無い。このバランスはいつでも悩ましい。

「最後の本会議を迎えて」

早稲田大学文化構想学部 4年

片岡美月



1年生から参加していた私にとって、今回が3回目の、そして最後の本会議だった。

ルワンダ人を成田で見送った後、素直に頭に浮かんだ感想は、皆が楽しそうで本当に良かった、良い本会議だった、ということだった。

しかし、本会議は娯楽ではない。楽しかったから満点とはならない。今、よくよく思い返してみるに、今回の本会議は、団体の意義や大切なことを、改めて実感できた時間でも

あったから、本当に良かったと思えたのだろう。

寿町で夜回りをしていた時のことだった。ルワンダ人メンバーのアレックスが、ホームレスの方々を見て、日本人の若い人々はこの問題に対して何かしているのか、また我々に何か出来る事はないか、と聞いてきた。私は、この団体の活動などを通して日本の貧困を学んできたつもりだったにも関わらず、彼のような疑問を真剣に抱くことはなかったのではないか、と思い、はっとした。その時、私が今まで無意識にホームレスの方々と自分を線引きしていたことに気付かされた。その日、横浜の地下街で目にしたホームレスの方々は、いや彼らと私の関係は、今までとは全く違って見えた。言葉にすると月並みに、当たり前前に響くけれども、ルワンダ人学生から見れば、私と彼らは同じ社会に暮らしていて、そこに境界線などなく、私は彼らになにか出来るはずなのだ。

同じようなことは、本会議を通して何回もあった。頭では当然と思っていたことが、本当には全く分かっていなかった、血の通わないただの知識だったと気づかされることがあれば、全く思いもよらぬ景色が見えることもあった。

ルワンダ人学生を招致して日本を周るといって、私達日本人メンバーが日本を紹介していく、というふうに見えるかもしれない。しかしそれは違う。ルワンダ人学生を通して、見えてきた日本、自分というものが沢山ある。文字で伝わる知識であれば、当然日本人メンバーがルワンダ人に伝えるという形になるだろう。例えば日本のホームレス問題であれば、寿町に行く前の私でもできる。だけれども、現地に行き、人々に出会い、そのことを共に見つめ、考える時、彼らがいるからこそ見えてくるもの、教えられるものが沢山ある。

私は今回、そのことの大切さを、染み染みと感じた。そしてそれはひとえに、色々なことを私達に教えてくださる方々の協力があってこそこのことである。今回、本会議に参加し

てくださった方々、支えてくださった方々に対しては、感謝してもしきれない。本当に良い本会議というのは、相互理解というのは、自分たちだけが奮闘するだけでは作りきれないものなのだろう。

最後の本会議がこの第10回で良かった。四年間を通して活動してきたにしてはあまりにシンプルな感想だとは思いますが、心からそう思う。

「ありがとう」

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部 3年

小池志歩

企画当日、朝現地へと向かう電車の中で、私は緊張の気持ちでいっぱいであった。それは、自身の都合のため招致にあまり参加できないことによる罪悪感と、ルワンダ人とコミュニケーションをとるために必須な英語が、今年の招致から全く向上していないからである。しかしそんな私の不安はすぐに解消された。それは日本人メンバーとルワンダ人メンバーがあたたかく迎え



てくれたからである。心配の種であった英語も、周りのメンバーの助けを借りて何とかコミュニケーションをとることができた。私が参加した鎌倉企画では、高德院の大仏の紹介を担当した。スケッチブックに手書きで大仏の絵を書いて説明をしたが、あまり出来のいいプレゼンとは言えないにも関わらず、みんなが真剣に聞いてくれてうれしかった。それと仏教・日本文化についてルワンダ人と考えを共有できたこともたいへんうれしかった。最後に、今回の第10回本会議は私にとって2度目の招致であり、たった1日の参加であったがとても有意義な時間であった。しかしながら、たった1日の参加であったように、準備期間も含めて僅かな時間しか招致に関われなかったことを大変申し訳なく思う。いつもあたたかく迎えてくれる日本人メンバーには感謝の気持ちでいっぱいである。もちろん今回の招致で出会えたルワンダ人メンバーにも。12月、海風が冷たい屋外での企画実行であったが、私の心は終始ほっこりほかほか、あたたかい気持ちでいっぱいであった。日本人メンバー・ルワンダ人メンバー全員に「ありがとう」と伝えたい。

「裏切りと、和解」

フェリス女学院大学国際交流学部 3年

小坂弘奈



今回で5度目の本会議となった私にとって今回の本会議は今までのものとは少し違った。私はルワンダが好きでこの団体のメンバーになり、夢だったルワンダ渡航を前回の本会議で果たした。第9回本会議で私たち渡航メンバーはあるルワンダメンバーと意見が食い違い喧嘩をし、涙し、相互理解なんてできない！と諦め、他のメンバーの支えもあり仲直りをし、大事な約束もした。そしてもう一度彼らを信じてみようという希望とモチベーションを持ちなおして帰国した。しかし、いよいよ第10回本会議が始まるという頃、私たちが結んだ約束がひとつも守られていないことや、誰もそれを知らないという現実を知り、私はショックだった。ルワンダと日本という遠く離れた私たちをつなぐのは、料金の高い国際電話や Facebook でもなく、信頼関係だと思っていたからだ。この団体のメンバーとして経験した今までのことが、すべて意味のないことのように思えてしまった。今回の本会議で最後にしようとして心に決め、以前より参加度も低くなったが第10回に参加すると、渡航以来久しぶりにルワンダの友と再会した。そして果たされなかった約束の話をはじめて知ると、心から悔み、彼らに罪はないのに謝ってくれた。今後どのように信頼関係を保っていくかを今回の本会議ではたくさん議論したと思う。何度壁にぶちあたっても、こうして議論していくことが、私たち日本ルワンダ学生会議であると思った。私個人としての今後の関わり方ははっきりとしないところがまだあるが、ルワンダが好き、という気持ちは変わらない。そして裏切られても、和解できるということを学んだ。3年目にして、相互理解の原点がはじめてわかったような気がする。大切なルワンダの友と、次に再会できるのがいつかはわからないが、会いたい人にはまた会えると信じている。

「終わりと始まり」

早稲田大学教育学部社会科社会科学専修 4年

品川正之介



出発ターミナルはひとけが少なく、やけに静かだった。そんな中、出発時間ギリギリで慌てる僕らの声が空港に響きわたっていた。相変わらず、毎年最後のお別れはドタバタで、別れの言葉をかけるのも、記念写真を撮るのも十分にはできなかった。けれど彼らを見送った後、いつもと違って、僕の心はちょっとした達成感と、やりきったという気持ちで満たされていた。やっと、

4年間にわたる苦悩に、終止符を打つことが出来たのだ。

この団体に加入してからの長い間、団体理念の相互理解について悩み苦しんできた。それは二重の意味での苦しみであった。一つは、相互理解とは一体何であって、どんな意義があるのか、自分の中で明確な答えが出せずにいたこと。二つ目は、相互理解という団体理念が日本側とルワンダ側でしっかり共有されていなかったために、お互いの目指そうとする団体の方向性に、微妙なズレが生じていたことだ。

大学一年でこの団体に加入した際には、相互理解がなんたるかなんて、これっぽっちも考えていなかった。それよりも、ただ純粋にルワンダと交流することが楽しかった。文化や習慣の違い、つたない英語でのコミュニケーションなど、色々苦勞しながらも、ただただ活動が楽しいと思った。しかし、一年、二年と活動を続けている中で、一つの疑問が浮かび上がった。ただ、楽しいだけでいいのか、と。そしてこうも思った。自分達の活動の意義は何なのだ、と。先輩の中には、相互理解という理念に、並々ならぬこだわりを持っている人が多かった。というより、「援助」とか「ボランティア」とか、何かルワンダとか、アフリカとか、途上国とかを、助けてあげるといような活動が嫌いな人が多かった。援助—被援助ではない、対等な関係こそが、真に大切なことなのだ、と。先輩たちはそう信じていた。僕もそんな風に思っていた。しかし、相互理解の意義が、はたして何なのか、僕にはしっかりと見えてこなかった。

決定的だったのは、大学二年時にルワンダに渡航したことだった。ルワンダはアフリカの奇跡と言われ、経済成長真っ只中、首都はビルの建設ラッシュに沸いていた。しかし同時に、開発の裏にある負の側面をまじまじと見せ付けられた。とても家とは言えない泥の塊の様な小屋に住む人々、物を請うストリートチルドレン、ゴミ山から金になりそうな物を探すスカベンジャー。そんな社会問題には目を背け、あくまで相互理解に固執する僕た

ちは、一体何なんだろうと思った。帰国してから色々悩んだ。しかも当時は、自分の周りには、学生という身分に言い訳をせず、途上国の社会問題に真剣に取り組む人がたくさんいた。一体、僕たち日本ルワンダ学生会議は何をやっているんだろうか。目の前には困っている人がいて、自分たちは彼らのために何かできたかもしれないのに。そこまでしてどうして相互理解という理念にこだわるのか。

そんな気持ちの悪さが頂点に達したときに、留学に行くチャンスを得た。留学先は、平和構築や開発経済学、アフリカ関係の授業が充実している大学であった。そこで、アフリカに対する開発援助を重点的に学ぶことに決めた。アフリカに対する国際援助の歴史を学んで、僕は、国際協力や援助が、だいだいだい... (中略) ...だいい嫌いになった。というのも、1950年代以降、アフリカ大陸を「救う」つもりでやってきた国際機関や国際NPOの姿勢が、誤解を恐れず言うなら、概して上から目線だったからだ。「かわいそう」なアフリカの貧しい人々を、「先進国」のわたしたちが「救」わなければならない、といった様な奢った上から目線の態度で行われた「国際援助」は、うまくいかなかった。例えば、IMFやWorld Bankなど、いわゆる超エリートたちが作った援助政策はことごとく失敗していった。50年間もの歳月をかけ、アフリカ大陸には総額約2.3兆ドル（アフリカ大陸全体の約2年分のGDP総額に相当。しかも2009年のGDP総額を基準にして）もの援助が流れ込んだが、貧困が解決するどころか、経済は悪化し、貧困がひどくなる地域があった。何故そのようなことになったのか。失敗の理由は様々にあると思う。だが、理由の一番大きなところは、援助国側のおごりにあったと思う。貧しい国は、自分たちの力ではどうしようもないから、我々が「助けて」あげなければならない、と考える姿勢であったり、自分達の援助政策や改革が絶対正しいと思い込み押し付け、被援助国の文化や価値観などを無視する姿勢が「国際援助」にはあった。よく、こんな言葉を聞く。「魚をあげるな。魚の釣り方を教えろ。」僕は思う。こんな言葉、クソくらえだ。この言葉からは、まさに今までの「国際援助」と同じおごりが見える。相手が魚の釣り方すら知らない、と思い込んでいること。そして、自分たちが教えようとしている釣り方が100%正しいと思っていることだ。正直、援助が有効であるかどうかと言うことは、アカデミックな場では多分未だに論争的であるし、確かに、紛争などの緊急時における国際協力は本当に大切だ。途上国開発援助の重要さも理解できる。でもよくよく考えてみれば、援助なんてものは国益絡みの話で、純粋に助けるためにする援助なんてないし、援助の成功失敗は様々な要因によって決まるだろう。そんなわけで、援助とかそういうのは、自分には合わないと思った。もはや感情的にそう思った。そして、こう考えた。より良い未来を作っていくために本当に大切なことは、まずなにより、相手を理解することだ。相手の文化と価値観を知り尊重することだ。そしてお互い対等な目線で、相手と関わることだ。留学ではっきりした。つまり、「相互理解」には、価値がある、と。

相互理解という活動理念へのおぼろげな自信を得た僕は、留学から帰国した後、この自信を更に深めるためにある調査を行った。日本人学生約100名にアンケート調査を行った。

調査内容は、アフリカに対するイメージと、ルワンダに対するイメージについてだ。結果は散々なものだった。他の地域に比べてアフリカのイメージは極端に悪く、例えば貧困だとかエイズだとか内戦だとか、ひどい場合、未開なんてコメントを残す人もいた。ルワンダのイメージは、「内戦」「ジェノサイド」「ホテル・ルワンダ」がトップ3を占めた。たしかに、アフリカは地理的に遠いし、ルワンダなんて小国だ。詳しく知っていて何か得になるなんてことはない。しかし、ルワンダにこのようなネガティブなイメージを強く持つ日本人が、ルワンダと関わろうとしたとき、そのときの気持ちは、「かわいそう」とか「助けてあげなきゃ」みたいなものになるのではないか。これは、どこかで見たことがある構図だ。そう、以前の国際援助の失敗の構図と同じなのだ。ある人はこんなことを言うかもしれない。アフリカやルワンダのことを過度に美化するな。内戦もジェノサイドもホテル・ルワンダも事実じゃないか、と。だが、考えてほしい。日本だって原発事故が起きた。人類史上最悪レベルの事故だ。だからといって、海外からの日本に対する見方は総じてネガティブなものだろうか。そうではないだろう。先進国も新興国も、どんな国だって良い面、悪い面がある。どうして、アフリカやルワンダの話になったら、ネガティブな側面ばかりが目立つのだろうか。日本人は、ルワンダのこと、ひいてはアフリカのことを良く知らない。僕は、これを変えたいと思った。「かわいそう」とか「たすけてあげなきゃ」とかの前に、まず、相手のことを知ること、これが大事なんだ。そして、それをやってきた僕たちの活動には価値がある。これをみんなと共有したいと思った。

そんな気持ちを秘めて、今回の第10回本会議に参加した。企画は福島を受け持った。これがまた発見の連続であった。ルワンダは福島に対して強烈な恐怖心を持っていた。「行ったら死ぬぞ！」みたいなこと親戚に言われたらしいし、福島全域が放射能で壊滅して入れない場所になっていると思っていたメンバーもいた。たしかに、福島の現状は、僕自身完全にどうなっているのかわからない。本当に「安全」なのか、どうなのか。ただ、一ついえることは、ルワンダ人が持っていた偏見や誤解は、現実とだいぶ乖離しているということだ。この福島の例にかぎらず、日本の3大ドヤ街である横浜の寿を訪れ、多くのホームレスたちを見た際、ルワンダ人はとても驚いていた。先進国日本でこんな社会問題があるなんて、と。つまり何が言いたいかというと、ルワンダ人も日本について多くの偏見や誤解を持っているということだ。このことに改めて気がついたとき、僕は相互理解という団体理念に確固とした自信を持つことが出来た。日本人も、ルワンダのことをちゃんと知らない。ルワンダ人も日本のことをちゃんと知らない。お互いのことを知らずに、より良い両国関係なんて築けない。僕たち日本ルワンダ学生会議は、両国の偏見や誤解と、現実のギャップを、埋めていくことができる。そしてそれこそが一番大切なことなのだ。相互理解にまつわる4年間の苦悩は、一つここで解消された。だが、問題はもう一つあった。相互理解と言う理念を日本側とルワンダ側でがっちり統一することだ。

本会議のプレゼンで僕は自分の思いをルワンダにぶつけた。上記したような、思いと問題意識を聞いて、そして自国のイメージが極端に悪いことに相当ショックを受けたルワ

ンダ側は、相互理解こそが一番大事なことだと納得してくれた。今回は、じっくりプレゼンで説明したこともあって、心からの納得だった。今回の第10回本会議で、やっと団体としての理念が日本とルワンダで統一された。と同時に、4年間の苦悩が終わりを迎えた瞬間だった。

実はこのほかに、他のトピックで大激論が巻き起きたり、団体の理念についての合意文書をつくったり、色々紙面で語りつくせないほどあれこれあったわけだが、ここらへんでしめておこうと思う。とにもかくにも、大変であったが、個人的には4年間の苦悩を総決算できた良い招致であった。自分自身も、日本ルワンダ学生会議も、これからまた新たな一歩を踏み出せると思う。ただ、新入生の人には本会議中重いトピックばかりで、すこし退屈な思いをさせてしまったかも、とすこし反省してもいるが...

最後に、お礼を述べておきたい。この感想には詳細を書いていないものの、第10回本会議では、様々な方にご協力を頂いた。特に私は福島での企画を担当していたのだが、本当に福島の皆様には何から何まで、ご協力をしていただき、何度お礼を述べても足りないくらいである。毎年、様々な方にお世話になる本会議だが、今回の招致ほど、人の助けの有難さを感じた招致はなかった。最後に、改めて今回の企画にご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げたい。本当に、ありがとうございました。

「私たちの代表。そしてルワンダとの交流。」

日本大学法学部 2年
島村志保子

第10回本会議を総括した感想を書く場にこの自分の感想が適しているのかどうか大変迷ったのだが、私がこの招致事業を終えて、最も心に残るのが、現代表の存在とルワンダとの交流の意味であったので、そのままこれを掲載してもらおう。

自分の中で、今回の招致は長い時間をかけて大切にしてきたと思っている。昨年1月末に自信のない中で、一年後に控える第10回本会議開催のための助成金申請書類を書いた時から、私の第10回本会議は始まった。当初この招致にちゃんと関わるとわかっているメンバーは3人しかなくて、表向きでは東京近郊に企画を集中させることの意義を唱え企画書も作成したが、本心ではコアメンバーの少なさにおじけづいて妥協した結果でもあった。そんなリスクを恐れて判断する自分に自信も持てない日々を過ごす中で、代表の白川が福



島で企画をやりたいと名乗りをあげた。正直その時は助成金申請の時点でその思いをぶつけてくれれば良かったのにと反感をもったりしたものだったが、2月の第9回本会議でルワンダを訪問して帰ってきた白川を見たときに、第8回本会議から抱いてきた団体に対する不安が和らぎ、日本ルワンダ学生会議のこれからは何か明るいものを感じたのを今でも記憶に残っている。

今の代表は他のメンバーたちがモチベーションを保つのが苦になっていく中で、それに反するように自分の中の伝えたいものをOGOBや先輩メンバーの力も借りて発信していったと私は思っている。日々の活動の中で失敗を重ね、日本ルワンダ学生会議の活動そのものに苦痛を感じていた私も、彼女の姿に影響されて、すっかりルワンダとの関係性の重要さを追求することの楽しさや意義を再び思い出していった。

国際交流はたくさんの積み重ねが大切だ。時間もそうだし、どんな関わり方を積み重ねていくかも大事だ。ただ交流を継続していく中で、モチベーションの維持や努力をし続けることは大事だとは思っていても実際に行うのは難しい部分が沢山ある。ましてやルワンダだ。アジアの国々のように近くはないので、会いに行くと顔を見るのも容易ではない。ネットでの連携も、時差は8時間、ネット環境も完璧でないので、Skypeで顔を見ることも困難な状況である。お互い学生としての勉強もあり、終始相手の国の学生とチャットしている場合でもない。理想の状況（相手との信頼関係を築く）を生み出すための努力、例えば学校での専門科目以外の学習とくに英語力を磨くであったり、睡魔と戦いながらチャットで彼らとコミュニケーションをとるであったり、そのような努力の大きさに圧倒されて、最終的には「そもそもなぜルワンダとわざわざこの私が？」という問いにいつか、訳がわからなくなってしまふ。いつの間にか努力がただ辛いものになる。そんなとき自分の身近な人がルワンダへ愛着をもち、自信をもって活動し続けていることがどれだけメンバーの支えになるか。それを今回の招致では強く感じた。

日本の学生が、なぜ被災地やアジアの貧困地域ではなく、わざわざ遠い小さな国ルワンダとの交流を大事に活動する必要があるのか。そう質問されることも多々ある。私個人の意見からすると、すべての国や地域との関係性に敬意が払われるべきで、その関係が現在におけるビジネス上の重要性や立地条件に左右されるのであっては、新たな可能性を潰したり、思い込みによる軽蔑など争いの火種を生み出すと思うからだ。ルワンダのいい面も悪い面も含めた、その多面性を日本人が知らないことが、日本とルワンダの新しいビジネス連携などの可能性を妨げるのは惜しいことだと思う。だから私はこの団体でルワンダを知り、日本を伝え、日ル共に発信する環境を整えていきたいと思っている。ルワンダはまだまだ抱える問題も多い。しかし日本も同様に、長所と短所を抱えながらも国際という枠組みの中で大きな影響力をもっている。ルワンダにも自分たちの力で国際社会の中で勝負していこうという希望や活力で溢れていることなどは日本人が認識すべきである。その事実を先取りして知っていることが私たちの団体の強みである。

最近あったちょっと嬉しいことについて紹介して私の感想を終えたい。私はルワンダ人

と初めて会えた喜びで、第 8 回本会議で来日した Rosette との大切な思い出と、自分の力不足のために後悔が大半を占める第 8 回本会議の悔しさを忘れないように、彼女と空港で撮った一枚の写真をその招致が終わってからずっと Facebook のプロフィール写真にしてきた。今回の招致事業で彼女に再会できたことと、前の招致事業から少し成長できた自分へご褒美という意味でも、また新しく撮った彼女との日ル伝統衣装交換の写真を私は新たなプロフィール写真にした。その一ヶ月ぐらいだろうか。彼女も私が写った写真をプロフィール写真にしてくれた。彼女にとって日本人と撮った写真の存在が少し大きくなってくれたのかなと思うとつい嬉しくなってしまう。「日本」というルワンダとはかなり離れた国。そこの学生の姿がルワンダの学生の記憶に残り、そのことによって私たちの国の将来に新たな可能性をもたらして欲しい。いろんな壁はあるけれども、また会いたい。そう思える私たちでありたいと強く思う。

最後となったが、本会議の開催あってこそ私は様々な経験を今回することができた。本事業に協力していただいた皆々様に厚くお礼申し上げたい。

「次に繋げる」

専修大学法学部 3 年
白川千尋



今回は、日本ルワンダ学生会議に所属してから二回目のルワンダ人日本招致事業であり、事業の責任者と代表という立場で関わった。この招致事業の準備期間から終了にいたるまで、あんなにも自分の方向性が分からなくなり、同時に団体の運営に悩み、活動と理念に対する自信をなくし、さらに、ルワンダ人との信頼関係がどん底に至ったことはなかった。

「自分の方向性が分からなくなった」というのは、代表という立場と責任を意識しすぎて、自分の意見や、やりたいことを押し殺し、“自然な自分”を見失ったことである。「日本ルワンダ学生会議の目標って何なの?」、「理念の相互理解って何なの?」と聞かれたとき、自分の言葉がでてこない。誰かが、先代が言った言葉をそのままなぞる様なことしか言えない。そこには“自分”がなく、なんだか“空っぽ”な感じだった。代表という一つの肩書に固執しすぎた私は、自然な自分を伝えることができなくなっていた。

そんな状態であるから、うまくメンバーに言いたいことを伝えることができない。その時、日本ルワンダ学生会議は全体的にフワフワした「何をやりたいのか分からない」不安定な状態になっていたと思う。そのような状況の中で、「この活動は楽しい!」なんて思え

るわけがなければ、周りから「楽しそう！」と思ってもらえるもわけない。

また、正直に言うと、代表になってからしばらく、頼れるメンバーがいなかった。だから、悩みを打ち明けることもできなかった。また、「代表はできる人」という勝手な像を作り上げ、「自分でやった方が早い」と思い、周りを頼ろうとしなかった。格好悪い姿をメンバーに見せたくなかったのだと思う。

“自然な自分”と“代表である自分”の二つの自分が重なれば問題はないのだが、なかなか重ならない。日本ルワンダ学生会議で何をやりたいのかが分からなくなってしまった。

しかし、そのような状態と当初の姿勢を変えることに気付かせてくれた人がいてくれた。その人のおかげで、「メンバーを頼ろう」と思うことができた。「みんなの力を貸してください」。この時、私は「メンバーがいての代表」なんだと気付いた。8月の合宿の時であった。まだまだ不安なことはたくさんあったが、なんだかんだ、この時から第10回本会議に向け、メンバー一丸となってやっていこうという風になっていったのではないかと思う。

「ルワンダ人とフクシマに行きたい」

福島企画を構想したのは、ルワンダ渡航を終えた3月。この福島企画を通じて、私は“自然な自分”を探し出すことができたと思う。

ルワンダを通してフクシマを見ることができ、フクシマを通してルワンダを見ることができたと思えることがあった。その一つが、「ルワンダは危ない」「日本は危ない」という日本人とルワンダ人の認識である。日本は、アフリカやルワンダ（に限らず）に対するイメージとして、「危ない」「怖い」「ジェノサイド」「病気」「紛争」といったマイナスイメージを抱く人が多い方だと思う。親に「アフリカへ行く」というと、「アジアやヨーロッパに行く」というよりも、反応は厳しく、また行くことを心配される。あるルワンダ人メンバーは、親から「日本は原発事故が起きたから危ない」と言われたという。地震や原発事故については、ルワンダでもテレビやラジオで放送され、インターネットでも情報を得ることができる。今まで交流してきたルワンダ人の多くが抱く日本に対するイメージや印象は、「先進国」「発展している」「科学や技術のレベルが高い」といった良いものばかりであった。しかし今回、「日本は危ない」というマイナスな言葉を初めてルワンダ人から聞いた。

フクシマにルワンダ人と訪れ、共感したことは「自分の目で見ること」と「自分の足で現地に行くこと」の重要性であった。なるべく多くの情報や知識を得ることはとても大切である。しかし、それら情報や知識を過信しすぎてもいけないと思う。現場を見に行っただけで初めて分かることもある。自分の目で見た現実と得た知識や情報をすり合わせ、最終的には自分で判断することで、固定観念や偏見が取り去られることがある。今回、日本に来たルワンダ人メンバーのほとんどが、「思っていたものと、自分で直接見て聞いたものは違った。100%とは言い切れないが、フクシマは危険ではないということが分かった」と言っていた。まさに、偏見が消え去った瞬間であった。

自分の国のマイナスの部分や問題を見せることで、逆に、無くなる偏見や得られる視座がある。こういったことを経験できることが、日本ルワンダ学生会議の強みである。

福島企画は、自分のやりたいことを具現化できる場だった。やればやるほど楽しかった。徐々に、“自然な自分”と“代表である自分”が重ならないということに悩むことは無くなっていた。

この招致は、自分とルワンダ人と正面から向き合う機会を与えてくれた。この自分とルワンダ人との向き合いの部分を書くことが一番難しかった。正直、伝わるものを書けているか分からない。ちゃんと言語化できていないところも多い。批判もあると思う。適当に書いてしまおうと何度も魔が差した。書いていることが暗すぎるなど自分でも思った。まとまらなくて、ただの言葉の羅列になってしまった。でも、この招致の間、私が何を考え、どう自分とルワンダ人と向き合ったのか知ってほしい。

伝えたいことを形にできるまで、何度も何度も自問自答した。何度も逃げ出したくなった。自分と向き合えば向き合うほど、格好の悪い自分ばかりが現れる。そんなはずはないと思いつけると、体がすごくしんどくなる。血の気の引くような感覚だった。“自分の言葉”を見つけれない。分からない。何も考えて生きてこなかったのかとさえ思った。

相手を分かろうと、知ろうと、言葉の一つ一つにしがみついた。

言語や文化の違いがある分、相手を理解することは簡単なことではない。

自分の言語能力の低さと知識の無さに悔しい思いをし、伝えたいことを伝えられないもどかしさを感じた。

しかし、伝わらない/伝えられない問題は、言語能力の低さでも、知識の無さでも、はたまた性格でもない。

「何が何でもこれは相手に言いたいことや分かってほしい」というものを持っているか。

がむしゃらでもいいから、それを伝える努力をしているか。

性格や言語能力の低さにだけ理由を求めることは、ただの言い訳でしかない。

持てる力をだしきらなければ、自分を伝えることはできない。

それは本当に疲れるし、時間もかかった。

分かってくれないルワンダ人に腹が立つこともあった。

「信頼したらまた痛い目を見る」と思ったこともあった。“ルワンダ人”とくくるのは間違っていると分かっているけども、“ルワンダ人”を信じることができなかった。

それでもやっぱり最後には、一縷の望みをルワンダ人から見出し、それに賭けてみたくなった。なぜか？

本当にルワンダが好きだから、「相互理解」が団体の理念だったから、ここまで必死になれた。この招致は、ルワンダ人と向き合い、自分と向き合う過程がどんなものかを私に教えてくれた。

報告会テーマ「10回目のプロポーズ」には、「今まで何度かルワンダ人と活動の方針について話し合ってきたけれど、毎回、結論を残すことができなかった。しかし今回、ようやく、ちゃんとした結論を残すことができた」という意味が込められている。

相手に自分の言いたいことを伝えられないもどかしさを感じながら、がむしゃらに言いたいことを伝え続けた。それでもルワンダ人はわかってくれない。「なぜ？」この疑問から見えたルワンダ人との「相互理解」を、今回感じる事ができた。

自分を見失い、伝えたいことを伝えられないもどかしさと、それを表現できない悔しさとつらさを経験させてくれたこの団体を、私は誇りに思うし、この団体に入って本当によかったと思う。

「第10回本会議を振り返って」

早稲田大学政治経済学部 3年
谷川琴乃

私が日本ルワンダ学生会議に加入して約2年経つ。招致事業を経験するのは今回が2回目だ。今回の本会議では、横浜・鎌倉・福島のうち福島企画に参加できなかったことが心残りだが、私にとって非常に有意義な経験ができた招致であった。ルワンダメンバーと学生会議をしてルワンダについて知識を深められたのはもちろんだが、日本についても学ぶことができてよ



かった。鎌倉企画で担当した日本の宗教についてのプレゼンテーションの準備のために、日本の歴史を宗教という視点で復習することができ、新たな発見があった。横浜企画の下見で、寿町の炊き出しや夜回りに参加し、寿町に住む方やボランティアの方とお話しできたことも貴重な経験であった。横浜で障がい者雇用とフェアトレードに取り組む fe.a coffee の関さんのお話を聞いて、日本の障がい者の就労問題についても考えさせられた。日本ルワンダ学生会議の良いところの一つは、このように日本についても学ぶ機会があることだ。相手のことを知るにはまず自分のことを理解していないといけないのは、人間関係と同じだと感じる。また、日本についてのトピックの中でも、ホームレス問題や原発など、経済発展の負の側面についてのトピックが多かった。日本と言うと先進国、技術大国というイメージを持たれていると思うが、経済発展の負の側面にもしっかりと触れ、経済発展がゴ

ールではなく、解決されない問題は常に存在し続けるという現状を見せることは、先進国としての義務であると思う。

ルワンダメンバーからは、国の将来を担う若者としての姿勢という点で学ぶものがあった。学生会議で障がい者、貧困、ホームレス問題など社会問題について議論するとき印象的だったのは、ルワンダメンバーが、問題解決における若者の役割についてよく質問していたことだ。彼らはルワンダの政策についてよく知っており、自国の抱える課題に対する当事者意識が高いと感じる。私も含め日本人の学生は「自分 vs 政府」という捉え方をする傾向があると感じるが、ルワンダ人学生は政府の示した方向に向かって自分も主体的にかかわりながら一丸となって国の発展に貢献しようという意識を持っているように感じる。もちろん政府に従順過ぎると危険な面もあるだろうが、当事者意識をもって国づくりに参加する彼らの姿勢は、日本人の若者としてうらやましく感じるし、見習うべき姿勢だと思った。

今回の本会議では、学生会議だけでなく団体の方向性についても議論が行われた。この議論は何年も前から日本メンバーとルワンダメンバーとの間で行われているが決着がつかない議論であった（詳細は長くなるので書かないが）。私は1年前、ルワンダで行われた第9回本会議に参加した。そこで団体の方向性についてルワンダ側のリーダーと意見が食い違い、もめてしまったことがあった。その時はこちらの意見を相手が一向に受け入れようとしないことに絶望し、相手を理解しようとするのを止めてしまった。「相互理解」をあきらめてしまったのだ。その苦い思い出が残っていたこともあり、今回の第10回本会議で団体の方向性についての議論をした際は少し辛かったが、長い議論の末最終的にはお互い納得した上で結論を出すことができ、本当によかったと思う。異なる意見を持っていてもあきらめずにこちらの気持ちを伝え続け、なぜ相手がそう考えているのかを本気で理解しようとするれば、相手もそれに応えてくれることがわかった。こちらの常識からしたら「どうしてそう考えるのだろうか？」と理解不能に感じるような意見でも、しっかり話を聞いてみると、その意見の背景に日本にはない常識、習慣や文化が存在していることに気が付く。第9回本会議の時の私は背景の部分に触れる前にあきらめてしまっていたのだと気付いた。文化的背景まで理解して初めて相互理解に近づけるのだと実感した。

このように長年の議論の決着がついた記念すべき第10回本会議であったが、個人的にもうれしかったことがある。それは、新メンバー（今年度の春に団体に加入した日本人メンバー）に今回の招致を振り返ってみての感想を聞いたとき、「楽しかった」と笑顔で答えてくれたことだ。彼女たちは今回の招致が始まるまで会ったことも話したこともない「ルワンダ人」という未知の対象を想像しながら、慣れない英語プレゼンを必死に練習したり企画の下見に行ったりしなければならず、色々な不安を抱えていたと思う。実際1年半前に私が初めてかかわった招致を思い出してみても、楽しかった記憶よりも不安だった記憶や大変だった記憶の方が強い。しかし今回の新メンバーは、最終的にはルワンダ人と一緒に過ごしいろいろな話ができ楽しかったと言う。「相互理解」という一見分かりやすそうで

実は難しい理念を掲げ、アカデミックな議論をする学生団体に所属していると、「先進国と途上国」「対等な立場」など、難しく考えがちだ。しかし、この純粋な「楽しかった」という気持ちは、実は一番大事なものだと思う。純粋に「一緒に時を過ごせて楽しかった。だからまた会いたい」と思えることが次につながっていく。私も1年前ルワンダに渡航した際ルワンダ人が好きになって、また会いたいという気持ちが今回の招致に参加する原動力となっていた。相手のことをもっと知りたいと思う気持ちこそが「相互理解」の基礎となる。その気持ちがあれば、困難なことがあっても乗り越えていけると思う。

私は現在就職活動をしていることもあり学生時代を振り返る機会が多いため思うのだが、この団体に入っていなければ行く機会のなかった場所、会えなかったであろう人、知ることがなかったことが本当にたくさんある。それらは私に多くの気付きを与えてくれたし、多様な価値観に触れさせてくれたので、今の自分にとって貴重な財産になっている。この団体に入ってよかったと思うと同時に、このような貴重な経験ができる日本ルワンダ学生会議が今後もさらに発展することを願ってやまない。

最後に、今回の招致活動の実現に協力してくださった全ての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「“自己分析”の中で見つめなおす」

早稲田大学政治経済学部 4年

藤本文史



現在就職活動の真っ只中。そのため、今は就職活動を通して自分を見つめなおす機会が非常に多い。日本ルワンダ学生会議の交流活動についても考える機会は多かった。その中で、将来途上国で仕事を行う際に重要になるのではないかと感じた教訓が2つあった。ここでは、それらについてまとめてみたいと思う。

まず一つ目の教訓。ルワンダ人学生との交流を通じて、新たな仕組みづくりにおけるプロセスの重要性を感じた。新しく導入する仕組みが良いものでも、組織全体に訴えかけて制度の意義を納得させていく過程を疎かにしたら、良い仕組みでも機能しないのではないかと、ということである。

去年（2012年）の夏にルワンダ人学生を招致したとき、ある日本人メンバーが民主主義とルワンダの状況に関するプレゼンを行った。実はルワンダの選挙では与党が90パーセン

ト以上の得票率をもっており、プレゼンの内容はそれについて疑問をなげかけるものであった。その際、ルワンダ人側の反応としては、選挙で人々が投票したうえでの結果なのだから、特に問題はないのではないかと、いうものであった。

しかし、ルワンダで民主主義と個人の自由が適切に保障されているかという点、そうではない。多党制や表現・報道の自由を制限する法律が導入されたり、野党の幹部が逮捕されたり暗殺されたりすることがあり、実質的に民主制が機能しているとは言えないのである。

こうしたことはルワンダが例外ではないと思われる。他のアフリカ諸国でも中東でも独立後、形式的には民主制が導入されたが、実質的に機能していないケースが多い。欧米では民主制が機能しているのに、なぜアフリカや中東では民主制が適切に機能していないのか。この事実について考えたとき、こうした国々では民主主義の理念がきちんと国民の間に浸透する歴史的プロセスが欠けていたからではないかと考えた。欧米では、様々な思想家が民主主義の意義について懸命に訴えていた背景があり、幾度の革命を通して民主主義が実現されていった歴史的土壌がある。欧米では、まず民主主義の意義について考える内面的なプロセスがあり、その後民主主義が制度となって実現した。アフリカ諸国で民主制がうまくいかないのは、これらの国々では民主主義の制度、つまり外面が先に整えられただけで、民主主義の意義について人々に説明する内面的プロセスが決定的に欠けていたからではないか、民主主義をうまく機能させたいのなら外面よりもむしろ人々の内面にこそ強くアプローチするべきではないのか、と考えた。

したがって、途上国開発に際しては、制度の整備だけでなく、人々はその制度の意義を理解するプロセスも重要になると思う。制度の整備に比べてはるかに時間がかかろうとも、人々が制度の意義を理解する内面的プロセスは、将来その制度が健全に機能するために不可欠である。導入する制度が民主制度であれば、単に選挙制度を整備するだけでなく、民主主義の意義を強調した教育内容も充実させる必要がある。

ルワンダ人学生との交流を通して感じた 2 つ目の教訓は、他国でなんらかの仕事をする際は、信頼関係も大事だが信頼関係だけを頼りに事業を行ってはいけないということである。信頼関係による相手の良心を過度に期待してはいけない。取引の証拠を書類としてきちんと残しておくなどの最低限のビジネス的な心構えを同時にもって相手に臨まなくてはならない。

以前、ある会社の説明会で社員の方が、海外営業について話していた。海外では、会社の製品を納入しても、取引先がつぶれたりして製品の代金を回収できないことがあるらしい。また取引をしても相手側がありえない価格を提示してくることがあるらしい。そういうことから説明会の社員の方は、海外では相手側の良心ばかりを期待していたのでは現地の人々にいいようにやられる、あとで痛い目にあわないような最低限の心得はしておかなければならない、と言っていた。

説明会のあと、日本ルワンダ学生会議の活動を思い起こしてみるとなんとなく思い当た

る節があった。この団体に入ってから、ルワンダ人側の金銭的な「甘え」が何度も見受けられたからである。ルワンダ人招致の際に、お金は日本人側がなんとかしてくれるだろうというルワンダ人学生の気持ちがなんとなく感じられた。また団体の日本人メンバーのルワンダ渡航の際に、ルワンダ人側から請求される金額のリストには、使途の不明なものがあったという話もよく聞いた（自分は実際に会計の仕事に携わったことはないのだけ）。しかしルワンダ人の財政状況がそれほど厳しいものにみえたかというところではない。彼らは、日本に来れば秋葉原でカメラを買ったりする。また自前のパソコンやスマートフォンを持っていたりもする。ルワンダ人側は、自分たちはお金に不足しており、日本人側からの資金の提供が必要だと主張していたが、本当なのだろうかという疑問に思うことも正直あった。

こうしてみると、私達日本人メンバーは、相手側との信頼関係に依存しすぎていたのかもしれない。団体の理念として「相互理解」があるが、この理念がルワンダ人側に対して譲歩する理由になることが多かった気がする。相互理解はお互いの信頼関係を重要視したものだけど、だからといって団体の活動のありかたとして信頼関係だけを基盤にするのは適切ではないだろう。他の国の人々と共に活動していくには信頼関係の構築も重要だが、それだけでなく最低限のビジネス的な心構えをもっておかねばならないと感じた。

「未来へ、つながる」

学習院女子大学国際文化交流学部 3年
星野真希

今回、約2年ぶりに招致に参加した。というのも、去年の招致（第8回本会議）の時は、東欧に行っていたため、参加しなかった。今回の招致では、横浜、鎌倉、岩手に参加したが、その時に思ったことを書き記そうと思う。

私にとって今回の招致は、ルワンダ人メンバーとの交流もそうだが、何よりも日本人メンバーとの交流の日々だった。普段は、週1回の活動日に顔をあわせるだけだが、招致中は毎日顔をあわせることになる。特に福島では、4泊5日生活を共にした。笑いあったり、感想を述べたり、議論したり、反省したり・・・お互いにいい部分も悪い部分も見え、本気で向き合う時間も増える。そうした中で過ごした時間はとても密度が濃かった。私は、諸事情あり、この団体を半年～1年間あまり関わらない時期があった。なので、自分がこの団体



になぜ所属しているのだろうか？という疑問を持つことがあった。しかし、今回の招致を通して、ルワンダ人と交流したい、ルワンダのことを知りたいというよりも、「日本ルワンダ学生会議」に所属している日本人メンバーと一緒に活動したい！という思いが強いからだとして今回の招致を通して自覚した。

今回の本会議で、ルワンダ人に対して抱いた特段強い感想はない。ただ、彼らが私の大好きなエビやタコなど魚介類が好きでないことだけは驚いた（笑）確かに、ちょっとした考え方の違い（例えば、時間や金銭感覚、食生活など）はあるかもしれない。「ちょっとした」違いなので、なおざりにしてしまい、そこからお互いに壁が生じて、すれ違いが起った。お互いに目をそらし、説明しなかった。おそらく過去の先輩たちも、今のメンバーもその壁に何度もぶち当たり、悩んでいた。しかし今回、日本人学生もルワンダ人学生も目をつぶらず、その問題に立ち向かった。そして、本会議中にとある成果を成し遂げた。彼らだって私達と同じように恋の話で盛り上がり、笑ったり、物まねしたり、悲しい気持ちになったり、人を助けたいと思う、普通の学生である。彼らと交流して、強く思った感情はなかった。私は彼らと交流していて、「楽しかった」。「楽しかった」という思いが大切に、そこからまたつながっていくものがあると思う。

よく「この団体に所属している意義はなんですか？」と聞かれる。確かに私達の活動は、学校を建てたりなどのボランティア活動をするわけではないし、目に見える成果がでるわけでもない。確かに、普段会えないルワンダ人学生と交流したり、日本国内でも普段では行けないところに行って活動できたり、ルワンダに渡航できるということにメリットはあるかもしれないが、それだけではないことに最近気が付いた。この活動は「未来への糧」である。日本人メンバーも「日本ルワンダ学生会議」の活動から、問題意識やまたは新たな視野が広がり、違うフィールドで活躍しているメンバーが何人かいる。また団体を卒業した後も、国際協力で活躍している方もいれば、民間企業で活躍している方もいる。けれども、彼らがどこで活躍しようと、「アフリカ」「ルワンダ」の関心を未だに持ち続けており、関心を持ち続けるということが重要なような気がする。おそらく、これから国際協力の現場ではなく、民間企業もアフリカへの企業進出が進んでいく中で、私も含め、この活動の経験や思い出が将来の糧になることを信じているし、願っている。またこの招致で初めて知ったのだが、ルワンダ人の中でも「日本ルワンダ学生会議」の活動を通じて、日本に興味をもち、日本に在住している人。また奨学金を獲得して、日本留学を志す人があらわれたらしい。この活動自体は目に見えない小さいことの積み重ねで、また目に見える成果があるわけでもない。しかし、日本人側もルワンダ人側も、この活動が一人一人の人生に大きな影響をもたらしていることには変わりないのだと思い、「じーん」としてしまった。あとは、いつかルワンダ人と日本人のカップルができれば・・・と思う（笑）

最後に、遠いルワンダから来てくれたルワンダ人学生、日本人メンバー、そして、「日本ルワンダ学生会議」の企画に賛同してくれ、協力してくださったすべての方にお礼申し上げます。特に、最近就職活動していて、社会人の方がいかに忙しいのかを実感しました。

その中で、貴重な時間を割いて、協力してくださった社会人の方々には感謝の述べようがありません。本当にありがとうございました。ルワンダに渡航すること、今度の招致の時は、ルワンダ人ともっと文化交流をする企画がしたいという思いを胸に秘めながら、残りの1年の活動を頑張りたいと思います。長文読んでくださり、ありがとうございました。

「違いを楽しむ」

立命館大学経済学部 3年

松本万里子



この団体に所属して、2目の日本招致。第10回本会議は、いろいろな事情が重なり、横浜企画と鎌倉企画しか参加できなかったが、私なりに感じたことを述べたいと思う。

日本招致とルワンダ渡航をそれぞれ経験し、今回の来日メンバーともルワンダ渡航の際、一緒に活動したので、初めて招致に参加したときのような緊張はなかった。前回の来日メンバーと今回の来日メンバーでは、雰囲気は異なり、陽気に踊る

姿よりも、真剣に話を聞いたり積極的に質問したりする姿が印象に残った。特に、「宗教」について話をした際には、日本人メンバーとの宗教観の違いに驚き、理解しようといろいろな質問をしていた。宗教観の違いは、私にとっても、とても興味深いものであった。普段、宗教や神について考えることはないため、自分の宗教観についてルワンダメンバーに説明するのは、大変難しく、うまく伝えることができたという自信もないが、どのようなときに神社や寺に参拝に行くのかということを変えたときの、彼らの驚いた姿は今でも忘れられない。「宗教」という話題を通じて、日本とルワンダの違いを楽しむことができた。ルワンダでは、主にキリスト教が信仰されている。その宗教観を基に、彼らの生活や文化が成り立っていると考えると、団体理念にある「相互理解」を達成するためにも、今回の本会議をきっかけに日本人メンバーは、さらに彼らの宗教に対する理解を深める必要があるだろう。

これまでの活動の中で、ルワンダメンバーの状況を推測して判断するというような場面が何度かあった。私はこれまで、日本とルワンダでは、状況が違うのだから、なるべく寛容に受け入れるべきだ、その違いを楽しむくらい余裕をもつべきだと考えていた。彼らがそう言うのだから、そうなのだろうと特に疑うこともなかったのだが、ここにきてそのような関わり方は、違うのではという気がしている。彼らがやると言ったにも関わらず、

実際は出来ていないということや、調子のよい発言しかしていないように感じられることがあったからである。彼らが実行できないのは、やり方が分からないからなのか他に理由があるのか、そこをはっきりさせ、やり方が分からないというのであればサポートするという関わり方が、重要なのではないだろうかと考えるようになった。その際、日本のやり方を押し付けていないか、日本の要求ばかりになっていないかという点に気を付ける必要がある。限られた時間、限られたコミュニケーションツール、慣れない英語を駆使して話をするのは、容易なことではない。しかし、それを繰り返してお互いの妥協点を見つけることが、相互理解の一つの形だと私は考える。今回の本会議を通して、ルワンダに対する理解が深まったというよりは、国際交流の複雑さに直面し、ますます分からなくなった。しかし、分からなくなるともっと知りたいという意欲が湧いてくる。よって、これからもルワンダメンバーとの交流を続けていきたいと思う。

「立ち止まるから、迷うのだ。」

日本大学法学部 2年
丸茂思織

感想とは言っても、今回私は鎌倉企画と一部の横浜企画、学生会議のみの参加であったため、本感想が第10回本会議の包括的な感想でないことを了承頂ければと思う。今回の日本招致事業も前回同様、個人的な反省点を挙げればきりがなくらいだが、あまりに反省文チックになっても面白くないと思うので、この場では本事業で自分の担当した鎌倉企画についてと今後の目標について述べたいと思う。



本招致で、私は鎌倉企画を担当した。鎌倉企画は2日間という非常に小規模な企画で、その軸となる活動も「寺社見学」という、なんとも「社会科見学」のようなお手頃・お気軽な内容だった。正直なことを言ってしまうと、メンバーのなかにも息抜きのような位置づけで鎌倉企画を捉えていた人も少なくなかったのではないだろうか。そんなこんなであまり期待されていなかった鎌倉企画ではあるが、私は意義のあるものになったと思う。私は鎌倉企画の中でも「事前学習」の担当で、寺社見学の前日に行った「日本人の宗教観」についてのプレゼンテーションに特に力を入れた。プレゼンの内容については、満足できていない部分も多々あるが、プレゼンを通じて、日本人は特定の宗教を信じている人が非常に少ないながら、様々な宗教関連のイベントを行っているといった、日本の他国が持た

ない複雑さや、日本ならではの寛容さにルワンダメンバーが触れてくれたことを嬉しく思う。また自国の宗教観（ルワンダはキリスト教徒が多く、一神教）と大いに異なるその事実に驚きながらも、その良さを認めてくれたことが私はとても嬉しかった。

最近はややホットな社会問題が企画全体のメインピックになることが多いように感じるが、宗教（観）や文化といったものは、我々の考え方の背景となっている非常に重要なものであると思う。社会問題等について共に考え、将来を担う若者として何ができるのかを模索することは言わずもがな重要なことであるが、宗教（観）や文化といった基本的な違いを、理解する・乗り越えるだけでなく、認め合うことから相互理解は始まるのだと感じた。

また今回の招致を通じて、本団体においての自分のひとつの目標ができた。非常にシンプルではあるが、「きちんと準備をしてルワンダに行く」ことである。本団体に所属しているメンバーなら皆当たり前「ルワンダに行きたい」と考えるものだと思うかもしれないが、本招致前の私は本団体においての活動のモチベーションが低迷しており、当時は「ルワンダに行くくらいなら、ヨーロッパ観光でもしたいなあ」なんて考えるだけにとどまらず、この団体を辞めることを何度も考えていた。そんな私がルワンダへ行きたいと思えるようになったのには、大きく2つの理由がある。

まず、本団体の活動を通じて「伝える・繋げる活動」をしていきたいと考えるようになったことである。高校での出張授業やトークセッションイベントの司会といったものをやらせて頂く機会があり、そこで微力ながらも私たちの授業やイベントで心動かされる人々がいることを知った。こういった理由から、いつしか私は直接的でも間接的でも「ルワンダを人々に伝える・人々と繋げる」活動がしたいと考えるようになった。しかし今まで多くの人の前でルワンダを語る機会を頂きながら、自分がルワンダについて語ることに自信が持てなかった。偉そうに語っておきながら、ルワンダに関する知識が不十分なだけでなく、私は実際にルワンダに行ってその空気に触れたこともなかったからだ。自分の納得できるかたちで自分のやりたい活動をするには、実際にルワンダに行くことが重要であると感じた。しかしこの理由だけでは、ルワンダ渡航に行くという決意をするに至らなかった。

また本事業では、ルワンダメンバーと日本メンバーが団体の将来のありかたについて激しく議論を交わす機会があった。私は、必死にルワンダメンバーを説得する先輩たちの背中を見つめることしかできなかったのだが、彼らのその熱意に純粋に感動した。自分たちがこの団体にいられる時間が長くないにも関わらず、この団体の将来を見据え、必死に現状を変えようとするその姿を見て心打たれたのだ。そしてこの熱い議論の結果、日本メンバーとルワンダメンバーは第10回本会議を以て初めてアグリーメントを結ぶことに成功した。メンバーが必死になって結んだその約束をルワンダ側がきちんと守っているのか、またそれがきちんと機能しているのか…議論をする先輩たちの背中を見て、それを実際に自分の目で確かめたいと思った。以上が、私がルワンダに渡航しようとした理由である。しかし何の準備もしないでただ参加しても、本招致と同じような反省を繰り返す結果となってしまう。まずは自分の英語力を磨き、日本について語れる知識を獲得してから渡航を

迎えたいと思う。

最後になるが、本招致を冷静に思い返せば本当に個人的な反省しか浮かばない（これが本音）。悔しく辛い記憶ばかりの招致になったが、ある意味絶対に忘れられない本会議となった。この反省を胸に刻み、もう二度と立ち止まらずに、歩き続けたいと思う。

また今回の日本招致で10回目の本会議を迎えることになったわけだが、第10回本会議も数多くの方の方々の協力あって成し遂げることができました。最後になりましたが、本日本招致事業に関わってくださったすべての方々にお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

「5年目?!」

横浜市立大学国際総合科学部 4年
宮本寛紀



私が日本ルワンダ学生会議に入ったのが、2009年度に行われた第3回本会議（初めての日本招致）であった。それから回を重ね、今回で第10回本会議となり（日本招致としては5回目）、過去における経験や失敗を踏まえ、当団体も着実に進歩していると感じる。それは一重に私たちメンバーが築き上げたものではなく、周りで支えてくださる皆様のおかげであると改めて感じ、感謝の気持ち

でいっぱいである。

今回の本会議では、企画自体に参加する主要メンバーではなく、ビザ申請時の留意点や企画準備段階でのアドバイザーとして関わることとなったわけだが、やはり参加するからには、しっかりと企画全体に出席することができれば良かったと後悔も残る。日本招致の企画では、日本人メンバーが張り切りすぎるあまりに、ルワンダ人メンバーとの間で温度差が生じてしまうこともしばしばあるが、今回の本会議ではそれをあまり感じることはなかった。むしろ、ルワンダ人メンバーから、日本人メンバーの出席率の低さを指摘されるなど反省し改善しなければならないこともある。それは、今後の課題にもなってくる。

当団体の面白いところは、活動に飽きがこないということ。（個人的にですが…）

ルワンダに行ってフィールドワークを行い、日本に招聘していろいろなところを訪問し

ながら学んで、各地でイベントを開催し、学生会議として議論してなどと、言ってしまうがただ 2 国間の学生同士の交流であるのに、毎回の本会議で話し合われることは異なり、訪問地も様々で日本人として日本のことを知る良い機会にもなり、学生時代にこの団体に所属して活動ができ、本当に視野が広がったと感じる。

この団体を引退しても、継続的にルワンダと関わっていたいと思う。それは、もしかしたらビジネスとしてなのかもしれないし、友人に会いに旅行に行くかもしれない。どのように関わられるかは未知だが、この団体で培われた相互理解のマインドを常に大切にしていきたいと思う。

「“黒人さん” → “ルワンダのお友達”」

同志社大学グローバル地域文化学部 1年
安居綾香

私の今までの 19 年の人生の中で、アフリカの人、ましてや、ルワンダ人と交流することは初めてだった。招致前の私のルワンダのイメージは、「自然がいっぱいでジェノサイドがあった悲しくて、貧しい国」。そして、ルワンダ人はそんな国に生きる「黒人さん」という何とも大まかなものだった。私は関西支部からの参加でルワンダメンバーと関東メンバーとは、東京駅で合流することになっていた。遠くからメン



バーを発見したとき、まず何を言うべきなのかよくわからず、どうしたものだろう、結局日本語で挨拶をしてしまった。しかし私の予想を遥かに上回るテンションでハグをしてくれた「黒人さん」。その瞬間、少しは緊張も和らいだ。

福島企画の間、ルワ女子 2 人と 1 週間同じ部屋で生活することになった。ルワンダのことをたくさん聞ける！と思い、楽しみではあったが、まずは何から話せば良いのかわからず、しばらくは戸惑ってしまった。おもしろい写真を撮影する会をきっかけに、徐々に徐々に仲良くなり、恋バナまでするようになった。最終日には、ルワンダの伝統的なダンスも教えてもらい、伝統衣装を着て、少し踊れるようになった。富岡町視察の日、私は両親からの許可をもらえず、Nadine と二人、ホテルで翌日の企画の準備することになった。その日はずっと、準備をしながら、ルワンダの大学や生活の話聞いた。私が思っていたよりも、ルワンダメンバーは素敵なカメラやパソコンを持っており、豊かに思えた。しか

し、反面、ルワンダでの生活は発展してきていると雖も、まだまだ途中の段階なのだとも思った。このことは、特に学生会議や JRYC Future の際にも深く考えさせられた。そのようなことを約 2 週間考えたことで、招致前に抱いていたルワンダメンバーに対しての「黒人さん」というイメージは、「ルワンダのお友達」という関係性に変わったのである。

私が日本ルワンダ学生会議に入ったきっかけは、正直、ルワンダという国やジェノサイドに関心があったからではない。もっと大まかにアフリカについて考え、交流したい、と考えたからである。しかし、1 年生としてはじめて今回の 10th に参加させていただき、「ルワンダ」という国、そこに暮らす人々に関心を持った。ルワンダについてもっと知りたい、また、ルワンダに絶対行くという目標を見つけることができた。相互理解を念頭に学生会議をより濃いものにするためには、自分自身がより、ルワンダについて知らなければならない。福島企画で考えた”実際に”自分の目や肌で感じる事が大切なことは、ルワンダ-日本間でも同じことが言えるのではないだろうか。次の渡航に参加することを目標に、英語力を磨き、ルワンダのことを楽しく勉強していった。そして、渡航したときには、ルワンダの人々に日本のことを知りたいと思ってもらえたら嬉しい。

最後になりますが、今回このように貴重な機会を与えてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

私が日本で見た中で最も興味深いものを2つのカテゴリーに分けました。

1. ポジティブな面

私が日本に関して最も興味深いのは、その地理的位置、つまり日本が島国であり第二次世界大戦後大きく成長した国だということです。東京に限らず日本のほとんどすべての地域に本当に多くの建物がある、私の国と比較してみると



と日本のような海洋に面し島国である国をみることはふつうではない。なぜならルワンダは内陸国であるからであり、海辺がなく大量の水もないのである。日本は私にとってユニークな場所に位置している。

日本の社会的な文化。日本の人々がひとをどのようにもてなすのかを見たときに感じたように、私にとっては興味深いものであった。私たちは偶然、日本で様々な家に泊まったが日本人は親切に、暖かく私たちを迎え入れてくれた。これは日本の文化の一般的な概要を見ることになり私にとって素晴らしい機会・経験となった。また、“寿司”のような日本の伝統的な食の多様性やどのように箸を用いて食を楽しむのかもいい機会・経験となった。私はどのように箸を用い、上手に操るのかわからなかったので日本滞在中なんども使おうとしてみた。よって多くのミスをしてしまったし、そのことについては謝りたいと思います。そして私の数人の友達が私の箸の持ち方・使い方を訂正してくれ、そしてこう言った。「間違った箸の持ち方をすることは、日本では失礼にあたるんだよ。」と教えてくれた。それは私にとって本当に興味深いことであった。なぜなら私は日本に来る前このことを知らなかったからである。マリオン、ピエール含め私が箸をつかっている間、ずっと直し続けてくれてありがとう。

2. ネガティブな、しかしこの世界のあらゆる場所で普遍的な面

貧困は寿町のような日本のいくつかの場所に存在する途方にもくれるような問題であるようだ。そこでは家をもたないホームレスの方々がいており、高齢化も進んでいる。彼らの60%が65歳以上であった。これは同じ人間としてこのような状態で生きている人々を目の当たりにしてショックを受けた。来日するという事は海外からの知識を得ることであり、唯一無二の経験として許容することであると私は思う。これは私の国、ルワンダのような発展途上の国から来た人々ならほとんどあてはまることである。

リーダーとして最も難しい点

- ①リーダーシップには自分自身をモチベートすることが必要であり、それはいかなる有益な務めとも異なる。ここに予想外(計画外)であるものをあげるとすれば…
 - ・お金 例えばコミュニケーションコスト
 - ・時間 リーダーシップをとるということは時間のかかることで、やり遂げるためには授業などの事前に予定していた活動を拒否したりやめてしまう必要がある。今進めている大学と大使館への **travel document** (企画書のこと?)にも各リーダーが時間をかけこれらを終えるために犠牲を払わなければならない。
- ②リーダーシップをとることと日常生活でやらなければいけないことを結びつけるのが難しい。例えばリーダーシップをとることと就職活動である。なぜなら学生がリーダーシップをとるということは経済的に存続しないからである。
- ③メンバーの活動について メンバーの人は時々活動的だが決心が固まっていない。これが日本に来る人を選考する際にメンバーはより活動的になる傾向があるが、一年を通して活動的であるというわけではない。これは問題であり、リーダーがよりよい活動をコーディネートするのを妨げるものである。
- ④日本ルワンダ学生会議における日本サイドとルワンダサイドの誤解
JRYC 日本サイドと十分なコミュニケーションができない時に活動の調整を行うのが難しい時があることである。例えば、JRYC 日本サイドのコーディネーターがルワンダで多くの(学生また学生ではない)メンバーの話を聞いている時、結局リーダーがそれらの多くの問題に答えないといけないといったような状況である。これは難しいポイントでリーダーのやる気を削ぐものであると思う。

リーダーとして学んだこと

リーダーシップをとることは起こるかもしれない悪いことの多くを無視することが必要だとわかってきた。なぜならこれは人を次のステップにあげるのではなく減じる可能性があるからである。これはリーダーの臨機応変の力と合いまるものであり、それはリーダーシップをとるために最も大切なことである。

自己責任、自尊心、自分をモチベートすることも良いリーダーになるために、そして自らの活動を価値あるものにするために必要であるとも気付いた。会議に出席するために海外へ行くとき、リーダーというひとはルワンダから訪れたチームのイメージを良くも悪くももたらすキーパーソンだということにもわかった。これはもしリーダーがチーム構成、またリーダーシップのスキルを苦手とするならば、これはチーム、代表団そしてメンバー全体の欠格という結果になるであろう。(藤内庄司 訳)

ナディーーン

Nadine KARINGANIRE

ルワンダ国立大学 社会学部



日本で行われた第 10 回本会議は日本についての理解を深めるとてもいい機会となった。自分が思い描いていた日本に対するイメージが間違っていたことを、実際に日本に行くことで知ることができたのだ。

横浜企画では、寿町に住んでいるホームレスのうち半数を占める人々が 65 歳以上であるというという、日本社会が直面しているホームレス問題について知った。また私はそこで、ホームレスに食事を配るというボランティアを行っている人々と実際に接することができた。寿町では日本の社会福祉についてや、日本でもいまだに貧困によって苦しんでいる人々が多くいるということを知った。関氏の経営する *fe.a coffee* を訪れた際には、フェアトレードについてさらに理解を深めることができた。全ての人の利益を考慮する彼のビジネスを見ることができ、私はとても嬉しく感じた。仕事を見つけることが困難な障がいをもった人を雇うという彼のビジネスはとても素晴らしいと思う。鎌倉企画では、日本人の宗教観を学ぶことができた。私は日本の「神」に非常に興味を持ち、またそれは私たちが知っているものと意味合いが非常に異なるということを知った。ほとんどの日本人が特定の宗教を信仰していないにも関わらず、宗教に関連した様々な行事を行っていることには非常に驚かされ、独自の宗教観に基づいた彼らの行動について興味をもった。福島企画では、福島第一原発について学ぶことができた。福島は非常に危険な場所であると考えていたが、今回の訪問によって、福島全土が汚染させているわけではなく、また現在除染作業が着々と進められていることを知った。

日本で最も興味深いと私が思ったことは、日本人がルワンダをどのように考えているのかを知ることができたことである。ルワンダを全く知らない人もいれば、ジェノサイドが起こった危険な国として知っている人もいる。しかし、ルワンダはジェノサイドだけではない。ルワンダという言葉がジェノサイドを意味するわけではないことを知ってほしい。それに対し、日本ルワンダ学生会議のメンバーは我々の国のことを非常によく分かってくれていると思う。

私は、一生懸命に働くことが発展の源であるということを知った。日本はルワンダよりも豊かなが、両国には類似点がいくつか存在し、またそこから発展のヒントを学ぶことができると考えている。本招致で日本に来ることができたことは、私の日本に対する興味を増幅させる素晴らしい有意義な機会になったと思う。ありがとうございました。

(丸茂思織 訳)

日本ルワンダ学生会議は年に1度ずつ互いの国へ渡航し、そこで本会議を実施している。第10回本会議は2013年12月18日から2014年1月5日のおよそ20日間、ルワンダ人学生と日本人学生の文化交流を通して、相互理解を深めることを目的に実施された。今回で10回目の本会議を迎え、以前にも増して充実した活動を行うことができた。以下では第10回本会議で実施した、主な活動について言及したいと思う。



本会議のなかで私たちは、互いのより深い理解のために異なるトピックを取り上げてプレゼンテーションを行う学生会議や、日本について興味を持たない人に現在何が起こっているのか、我々が実際に見て伝えるために、各地（福島の富岡町や鎌倉など）への訪問を行った。これは日本ルワンダ学生会議としての狙いである。

また私たちは、日本ルワンダ学生会議の歴史を尊重しながらも、両国の友好関係を理解しようと努めた。ルワンダ側・日本側両者の相互協力・発展のために、どうすれば貢献できるのかを考えることは非常に興味深かった。私たちは日本ルワンダ学生会議をどうすれば拡大させることができるのかを議論した。このおかげで、比較的短時間で目標を達成することが可能になると思う。

真面目でよく練られた計画に基づく会議のおかげで、私たちメンバーは現在私たちが何をしているのかということに非常に興味を持つことができ、また何を本当に達成すべきか、そのためにはどうすればいいのかという指針を共有することができた。互いに手を取り合い、日本ルワンダ学生会議のために共に活動を続けていきたいと思う。最後に、第10回本会議に関わってくださったすべての方々に感謝申し上げたい。

(丸茂思織 訳)

ロゼット
Rosette BAGWANEZA

ルワンダ国立大学 経済経営学部

私はこの機会(感想をかくこと)を JRYC 日本メンバーに親愛なり心からの感謝を述べる機会とする。彼らは 2013 年 12 月 20 日から 1 月 5 日までの学生会議を実行するのに実直に参加してくれた。私は日本ルワンダ両国の大使館、早稲田大学、そして金銭・道徳的サポートして頂いた日本の全ての人々に感謝する。そして JRYC コーディネーターである白川千尋に感謝している。



彼女は私たちを招待することを嫌がらず(私たちを喜んで招待してくれ)、日本における第 10 回学生会議を実行するために本当に努力して頂いた。さらにすべての JRYC メンバーの協力、ガイダンス、そして私が学生会議をやり遂げるのを可能にしてくれた苦労や犠牲に感謝する。彼らの努力がなければ、学生会議はなしえないことであつたはずだ。

本事業では横浜企画と福島企画があり、東京と神奈川を訪れた。私自身参加した福島企画により焦点を当てる。横浜含め神奈川について、私は到着が遅れてしまいあまり語れないが、メンバーから横浜企画の良さや興味深さを聞くことができた。

福島企画では私たちは須賀川市の汚染除去計画を訪れた。住居の汚染除去作業、環境回復について学んだ。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では 6 倍の激しさを記録し、それは社会の根底にある根深い矛盾を露呈し、福島第一原発において耐え難い事故を引き起こした。そこでは住居、環境、食物などにおいて汚染が確認された。そして私たちは須賀川市を訪れる機会を得て、汚染除去作業を見学した。須賀川市長に会う素晴らしい機会もあり、彼はこの地で何が起きているのか話してくれた。それにより、私たちはこの地での本当の情報とインターネットなどのメディアによる情報の違いを自分たちの目で見る事ができた。

福島では、壁や屋根、排水路、ベランダや庭を洗い磨くなどの違った方法での除染作業をみる事ができた。植物において、彼らはどのくらい放射能が残されているのかを確認し、そのあとその植物を伐採していた。そして積み上げられた汚染土壌をどのようにするのか、そしてどう正常に回復させていくのかなど汚染除去作業についてより知ることができた。また汚染除去作業は私たちに希望を与え、福島は今より良くなり、ルワンダ国民に行く前に比較していたほど危険ではないと伝える。富岡町で行ったコンサートもまた興味

深いものとなった。地元のひとに会い、彼らは経験したことを語ってくれ、そのあと考えや日常生活について共有した。そして伝統的なダンスを披露した。私たちは不可能なことではないという希望を与えられた。私たちはジェノサイドを経験したが現在ルワンダは平和な国で未来に希望を持っているからである。

最終日、私たちはカンベンガ・マリールイズ氏にお会いしレクチャーを受けた。それはたいへん面白く興味深いものであって JRYPC の目標を設定するなど私たちの団体の改善にアドバイスをしていただいた。それによって私たちは自分たちの活動に自信を持つことができ考えを改め、人間関係における考え方を共有することができた。加えて、彼女の人生についてお話を伺い、教訓を授かった。福島企画の後には東京に戻り JRYPC の将来について語り合う準備をした。そこでは自分たちの活動を改善するために将来について多くを語り、活動計画を立てた。私はより多くの活動を共に成し遂げられることを望む。

会議の終盤、私はこの日本での私が得た学びの 2 週間は私に人生においていくつかの重要なカギを残してくれたと確信した。それはチーム力といった社会的側面と「継続は力なり」と言われるような実用的な知識である。

日本ルワンダ学生会議は良い団体であり、私たちが行った学生会議は実用的な活動として非常に重要でもあり、現状をよく理解するのにまさに必要である。第 10 回会議の間、日本の歴史や宗教を理解する手段を多く経験し、地元のひととイベントを行い、フィールドワーク・ホームステイ・学生会議を行うことができた。本当にありがとうございました。

(藤内庄司 訳)

メディア掲載

MEDIA COVERAGE

各種メディアに「第10回本会議」の福島での活動を取り上げて頂きました。

2013年12月27日付 福島民報より

2013年（平成25年）12月27日（金曜日） 福島民報

ルワンダ学生 本県視察

29日まで 除染作業の現状など

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復旧・復興を目指す本県の現状を知る



須賀川市の現状を聞くルワンダの学生ら

うとルワンダの学生四人が二十六日、須賀川市仮設庁舎を訪れ、除染作業の現状を学んだ。二十九日まで本県各地を視察している。

首都圏の学生などでつくる日本ルワンダ学生会が仲介した。ルワンダの学生四人と学生会議のメンバー七人が訪れ、市職員から除染方法や進捗（しんちよく）状況などの説明を受けた。

橋本克也市長は学生からの「福島食品は本当に安全なのか」との質問に対し、「世界でも厳しい基準で検査している」と安全性を強調した。参加者は除染現場も視察した。

二十七日は富岡町を視察する。二十八日は郡山市の同町仮設住宅で交流会、二十九日は福島市で開かれる震災関係の講演会を聴講する。

原発事故の現状と復興 日本ルワンダ学生会議メンバー 橋本市長と懇談、除染状況視察

県内の原発事故による除染などの視察に訪れている「日本ルワンダ学生会議」メンバー

一行十人、十六日午前、須賀川市役所仮設庁舎特別会議室を訪れ、橋本克也市長に県内の視察状況を報告、懇談した。



一行は、「原発事故の現状と事故からの復興」をテーマに、県内の除染視察や意見交換、住居制限区域視察、避難者との意見交換を行うために県内を訪問。この

つ、懇談した。意見交換を行った。同学生会議は、平成十七年に早稲田大学の平山郁夫ホランティアセンターが「ルワンダプロジェクト」として設立され、同二十一年に現在の名称に変更した。同会議は、日本とアフリカ中部の国「ルワンダ」の学生同士が、友情と信頼・協力関係を構築することを目的に設立された。

一環として須賀川市を訪れたもの。白川代表らは視察状況を報告、橋本市長は「除染作業で線量の低減を図っているが、皆さんにも正しい知識を正確な情報で市の復興に協力してほしい」とあいさ

創刊67周年

ABUKUMA (日刊)

あぶくま時報

社是
◆地域に奉仕
◆不偏不党
◆明朗反骨
◆公平無私

阿武隈時報社

発行所 〒962-0848 福島県須賀川市弘法地15-1
TEL (0248) 73-2483 FAX (0248) 73-3616
E-mail アドレス abukuma@bz04.pfala.or.jp

平成25年(2013年) 12/27 金 第18618号

昭和21年9月4日 第三種郵便物許可

QRコード

阿武隈時報社QRコード

除染作業の必要性理解
ルワンダ大学生ら来須

日本ルワンダ学生会
須賀川市から招いた
ルワンダ大学生ら4人は26日、須賀川市を訪れ、橋本克也市長と面会し、震災後の同市の状況に理解を深めたほか、除染作業の見学を行った。

同会議は日本とルワンダ双方の学生がそれぞれ、震災と原発事故からの復旧と復興に努める現状や、また、イメージアップのためウルトラマンをテーマとした事業があることを世界の人々に伝えてほしい」とし、学生らが震災後の状況や避難などによる入居の正しい知識と冷静な判断力を多くの人々に持ってもらえるよう、その必要性に理解を深めた。

また、イメージアップのためウルトラマンをテーマとした事業があることを世界の人々に伝えてほしい」とし、学生らが震災後の状況や避難などによる入居の正しい知識と冷静な判断力を多くの人々に持ってもらえるよう、その必要性に理解を深めた。

除染作業の重要性を知るルワンダ大の学生たち



福島民友 2013年(平成25年)12月29日(日曜日)

除染、食の安全に理解

ルワンダ学生、須賀川訪問

日本とルワンダ両国の学生間での相互理解を目指す日本ルワンダ学生会の参加ルワンダ大学生ら4人は26日、須賀川市を訪れ、除染や同市の復興状況について理解を深めた。

同会議は日本とルワンダ共和国の学生たちが互いの国の社会や文化に理解を深め合うことを目的に活動。現在は両国の学生たち22人で構成し、「ルワンダ入学生生」の日本招致」などの交流事業を展開している。今

回は「第10回本会議日本招致事業」の一環でルワンダ大の学生たち4人が日本を訪れ、18日から来年1月5日まで滞在。日本の学生たちと共に東京都、神奈川県、本県などで活動を行う。

26日は同会議のメンバー

橋本市長を表彰した日本ルワンダ会議の参加学生たち

ら12人が市仮設庁舎を訪れ、橋本克也市長を表彰。橋本市長は「除染に取り組んでいる様子を実際に見て、放射線についての正しい知識を学び、被災地の現状を正しく理解して世界の人たちに発信してもらいたい」と話した。

ルワンダの学生たちからは「原発事故で市から避難している人たちはいるのか」「食の安全は確かなのか」との質問が出された。表敬後は同市の除染作業現場で除染方法などを見学したほか、市の担当職員や作業員たちと除染に関する意見交換を行った。

同会議のメンバーたちは29日まで本県に滞在し、郡山市の仮設住宅や富岡町の避難指示解除準備区域などを訪問する。



2013年12月30日付 福島民報より

福 島 民 報 2013年(平成25年)12月30日(月曜日)

踊り披露し合い交流 山

ルワンダの学生 仮設住宅訪問 郡

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興を目指す本県の現状を知ろうと県内を訪れているルワンダの学生四人は二十八日、郡山市富田町の仮設住宅内にある富岡町生活復興支援センター(おだがいさまセンター)を訪れ、避難生活を送る住民と交流した。

踊り披露し合い交流 山

ルワンダの学生は歌い手と踊り手に分かれて母国の伝統のダンスを紹介。異国情緒あふれるダンスを繰り広げた。富岡町老人会女性部踊りの会のメンバーは日本の踊りを披露。ルワンダの学生の目を惹きつけた。アフリカの太鼓「ジャンベ」も演奏された。



ルワンダの伝統的なダンスを紹介する学生



日本の踊りを披露する住民

2013年12月30日付 毎日新聞(地方版) web 記事より

③ 毎日新聞 ③

東日本大震災:ルワンダの大学生4人、富岡の避難住民と交流 「福島の実現を伝えたい」 / 福島

毎日新聞 2013年12月30日 地方版

1994年、民族間の対立で起きた大虐殺を経て、あらゆる差別を廃し民主化を達成したアフリカ中部のルワンダの大学生4人が28日、郡山市富田町の仮設住宅にある「おだがいさまセンター」を訪れた。日本の学生に伴われて来た4人はフラダンスや茶会を通じ、富岡町の避難住民と交流した。

学生団体「日本ルワンダ学生会議」(専修大3年、白川千尋代表)が企画し、4人は26日から29日まで県内の除染現場や富岡町の居住制限区域を見て回った。

ルワンダ南部のブタレ大で農業を学ぶ男子学生、ルウェマさん(22)は「私の国では英BBC放送などの影響から、福島はとても危険な地という先入観が広がっているが、来てみると、そんな単純な話ではなく、多くの人が前向きに生きており、その姿に感動した」と話した。

また、同大で経済を学ぶ女子学生、バグワネザさん(24)は「国に帰ったら、あらゆる場で福島の実現を伝えたい」と語った。

一行は1月5日まで滞り、東京の早稲田大などで福島での視察を基に日本の学生との討論会を開く。【藤原章生】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.

2013年12月30日付 福島民友より

福 島 民 友 2013年(平成25年)12月30日(月曜日)

**ルワンダ学生ら交流
郡山で富岡町民と
日本ルワンダ学生会議**

(白川千尋代表)は28日、郡山市の仮設住宅内のおたがいさまセンターを訪れ、富岡町から避難する町民らと交流を深めた。

同会議はルワンダの大学生と学術・文化交流を行う学生団体「東京電力福島第一原発事故や被災地の現状を学ぼう」と、同会議の日本招致事業の一環として26日から本県を訪れている。

同センターではルワンダの学生4人が伝統的なダンスや歌を披露。町民も日ごろ練習している踊りを紹介し、交流を深めた。

また、ルワンダティーを振る舞いながらの茶話会のほか、子どもたちとのレクリエーションも盛り広げられた。



ルワンダの伝統的な踊りを披露する学生ら

2013年12月30日付 毎日新聞より

福 島 福島 2013年(平成25年)12月30日(月) 毎 日 新 聞

1994年、民族間の対立で起きた大虐殺を経て、あらゆる差別を廃し民主化を達成したアフリカ中部のルワンダの大学生4人が28日、郡山市富岡町の仮設住宅にある「おたがいさまセンター」を訪れた。日本の学生に呼ばれて来た4人はフラダンスや茶会を通じ、富岡町の避難住民と交流した。写真。

学生団体「日本ルワンダ学生会議」(専修大3年、白川千尋代表)が企画し、4人は26日から29日まで県内の除染現場や富岡町の居住制限区域を見て回った。

**ルワンダの大学生4人
富岡の避難住民と交流
「福島の実を伝えたい」**



ルワンダ南部のブラレ大で農業を学ぶ男子学生、ルウエマさん

(28)は「私の国では英BBC放送などの影響から、福島はとても危険な地という先入観が広がっているが、来てみると、そんな単純な話ではなく、多くの人が前向きに生きており、その姿に感動した」と話した。

また、同大で経済を学ぶ女子学生、バグワネザさん(24)は「国に帰ったら、あらゆる場面で福島の実を伝えたい」と語った。

一行は1月5日まで滞在し、東京の早稲田大などで福島での視察を基に日本の学生との討論会を開く。

【藤原章生】

後援・助成団体様・ご協力頂いた方々

SUPPORTERS

日本ルワンダ学生会議 第 10 回本会議は、多くの方々のご協力あって成し遂げることができました。誠にありがとうございました。今後とも日本ルワンダ学生会議の活動を見守って頂ければ幸いです。

後援

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)
ルワンダ国立大学 (National University of Rwanda)
アフリカ平和再建委員会 (ARC)

助成団体様

双日国際交流財団
三菱東京 UFJ 国際財団
国際交流基金
早稲田大学学生生活課

ご協力頂いた団体・個人の皆様 (順不同)

在ルワンダ日本大使館
駐日本ルワンダ共和国大使館
駐日ルワンダ大使館公認
寿地区センター
関辰規氏 (fe. a coffee 運営会社代表取締役社長)
渡辺英俊氏
川上好氏 (株式会社 川上工業代表取締役)
社会福祉法人 富岡町社会福祉協議会
須賀川市役所職員の皆様
須賀川市市役所市長橋本克也氏
NPO「ルワンダの教育を考える会」代表カンベンガ・マリールイズ氏
NPO「ビーンズふくしま」
オリエンタル交通

郡山バプテスト教会

ジャンベ奏者 SUGEE 氏

おたがいさま企画、交流会に参加して下さった方々

誠にありがとうございました。

写真館

MEMORIES

笑顔も涙も、たくさんありました。



セクシーな二人
(島村宅でのホームステイにて)



ハイ、ポーズ!



つ、冷たいッ!!



「頑張って良かった…」代表は思わずほろり。



こんなに仲良くなりました
アレックスの笑顔といったら!



皆さん、ありがとうございました！



庄巻のルワンダダンス



怪しい関係の二人…



もちろん真剣な議論も



JRYC GIRLS☆



大使のお家にて

おわりに

日本ルワンダ学生会議第10回本会議にご参加くださったみなさま、助成財団や大学関係の方々、ご理解とご協力をいただき本当にありがとうございました。無事、東京・横浜・鎌倉・福島を巡り、目指していた「学び」を日本とルワンダの学生で共有することができました。心から御礼申し上げます。

日本ルワンダ学生会議、通称JRYCはこれで、ルワンダ開催と日本開催併せて10回の交流事業を実現したことになります。ところがメンバーは、この10回という数字にあまりこだわりのないようです。「Youth」（若者、JRYCでは主に大学生）である期間は限られています。数年でメンバーは入れ替わりそのたびにそれぞれが一生懸命に事業を行うからでしょう。

しかし、何年も居座っているわたしから言わせると、こう何回も交流が実現するというのは奇跡です。なぜなら、他のNPOやボランティア活動と比べて「学生会議」という活動には成果がないからです。いえ、「成長」という、結実までに長く時間を要する成果を追及しているがゆえ、そう見えるのです。そんな、ある意味不確実な成果にこだわって譲らないわたしたちに対し、長期にわたり様々な形で多くの方々が理解しご協力くださったことに、ひとえに感動しております。

この第10回本会議は、わたしが心から尊敬する後輩（という言葉を使うのが正しいかどうかわかりませんが）が中心となって企画したものです。彼らは一年も前から話し合い、企画を進めてきました。福島の被災地に行くとなれば何度も被災地に脚を運び、倫理面までしっかりと議論していました。貧困という根深い問題からソーシャルビジネスという新しいソリューションからまで幅広い視野をもちつつ、現地調査や事前準備も怠ることはありませんでした。わたしは心から彼らを誇りに思います。

そして彼らは、様々な場面で大小問わず多くの方々に様々なご支援をいただけてきたことでしょう。小さな言葉ですから全員には届かないかもしれませんが、声を大にして心から「ありがとう」とお伝えしたいです。

時は流れていきます。でも、学びを止めてはいけません。JRYCに学びを求めて学生が集まる限り、この時間と空間が続いていくことを願ってやみません。

お互いに理解できないことに、たくさん悩めばいい。伝わらなくてケンカすればいい。もっともっと、分かりあえるから。

そして舞台は、第11回へ。

平成26年2月

早稲田大学文化構想学部4年 久保 唯香

日本ルワンダ学生会議 第10回本会議活動報告書

この事業は、双日国際交流財団・三菱UFJ国際財団・国際交流基金・WAVOCの資金協力の下で行われました。経済的な面で支えてくださった各財団の皆様および、各活動にご協力くださった多くの方々に改めて深くお礼申し上げます。

2014年3月7日 第2版発行

発行元 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）公認
日本ルワンダ学生会議

編集 丸茂思織

連絡先 japan.rwanda@gmail.com

